

2024年度 JUAS ビジネスデータ研究会 研究発表

研究会活動概要

【実施期間】

2024年5月～2025年3月

【主な活動実績】

- 全体研究会10回、
内、講演会2回、集中討議1回開催
- その他、各分科会での活動

【参加者人数】

51名

内、幹事団は右表のとおり。

	氏名	会社
部会長	西村太輔	日清食品ホールディングス株式会社
副部会長	大下健史	ブレインズコンサルティング株式会社
副部会長	石井昭紀	株式会社イージフ
幹事	山川 雄矢	株式会社ジェーシービー
幹事	市川 康平	株式会社プライド

2024年度 流れ

AI活用には信頼ある元データが必要であり、回答には納得あるプロセスを経る必要がありますし、生成されたデータもまた信頼を求めるものです。AIを含めたデータ活用のプロセスの中で、以下のテーマにフォーカスして探求し、それぞれに対する**新しい知見や発見、気づき**を得ていくことを目指します。

- (A) ビジネスドリブンでデータの在り方
- (B) データドリブン（活用）に至るまでの課題
- (C) AI活用を含めた納得性のある結果を得るためのプロセス
- (D) AIにも使えるほどの信頼性のあるデータとはどんなものなのか

テーマごとの参加
目的の再確認



講演 &
ディスカッション



テーマごとの
研究目標設定



目標に向けた
研究/調査/ディスカッション



新しい
知見

分科会構成

第一分科会:

データドリブン経営を支えるデータ品質

第二分科会:

理想のデータ基盤

第三分科会:

データ活用に向けた組織構築と人材育成

第四分科会:

データドリブン経営のすゝめ

第五分科会:

データの価値を理解させる黄金アプローチ

データドリブン経営を支えるデータ品質とは ～ユースケースから得る知見～

JUAS ビジネスデータ研究会 第一分科会
2025年3月12日

アジェンダ

1. 分科会参加者紹介
2. 研究背景・方針
3. データ品質とは
4. ユースケース検証
5. 品質評価フレームワーク提案
6. 研究結果・研究を通しての気付き

分科会参加者紹介

◆リーダー

加藤 海人 (日本航空株式会社)

◆メンバー

和泉 翔太 (キヤノンマーケティングジャパン株式会社)

齋藤 大地 (スズキ株式会社)

名倉 健太 (株式会社ニコン)

佐藤 拓哉 (カシオ計算機株式会社)

◆オブザーバー

山川 雄矢 (株式会社ジェーシービー)

研究背景

- データドリブン経営に向けた情報活用を促進する
1つの要素として、「データ品質が求められる」と推測
- データ品質課題の原因や要因は各社様々で、
共通の観点でデータ品質を理解する必要があると考えた

研究方針

- 十分な品質が担保されることでビジネスにおける
データの価値が向上すると仮定し、ユースケースを用いて
求められるデータ品質とは何かを研究する

**「データ品質が高い」とは
どういう状態なのか**

**特定の基準でデータの品質を評価し、
それをクリアしている状態**

データ品質15ヶ条

データ品質について、国際基準のひとつである「ISO/IEC 25012（データ品質の評価）」をベースに日本工業規格にて作成した15種類の評価基準を参考とする

	項目名	評価内容
1	正確性 (Accuracy)	正確であるかを評価する。 意味に誤りがないこと、書式や表記が正しいこと、誤字脱字がないこと
2	完全性 (Completeness)	抜けもれがなく完全であることを評価する。 必要な項目が網羅されていること、必須項目に空欄が含まれていないこと
3	一貫性 (Consistency)	整合性があり矛盾していないことを評価する。 データセット内またはデータセット間で矛盾がないこと
4	信憑性 (Credibility)	信頼できるかを評価する。 データの出所や更新日が明示されていること、改ざんを予防していること
5	最新性 (Currentness)	十分に新しいかを評価する。 更新サイクルが適切であること、公開されている情報が最新であること、更新の有無が確認できること
6	アクセシビリティ (Accessibility)	利用する場合に特別な手段が必要になっているかを評価する。 保管されているデータが利用手段に適合した形式であること
7	標準適合性 (Compliance)	標準的なルールに適合しているかを評価する。 書式、使用している文字セットが標準であること、指定された選択項目が入っていること

データ品質15ヶ条

データ品質について、国際基準のひとつである「ISO/IEC 25012（データ品質の評価）」をベースに日本工業規格にて作成した15種類の評価基準を参考とする

	項目名	評価内容
1	正確性 (Accuracy)	正確であるかを評価する。 意味に誤りがないこと、書式や表記が正しいこと、誤
2	完全性 (Completeness)	抜けもれがなく完全であることを評価する。 必要な項目が網羅されていること、必須項目に空欄
3	一貫性 (Consistency)	整合性があり矛盾していないことを評価する。 データセット内またはデータセット間で矛盾がないこと
4	信憑性 (Credibility)	信頼できるかを評価する。 データの出所や更新日が明示されていること、改ざんを予防していること
5	最新性 (Currentness)	十分に新しいかを評価する。 更新サイクルが適切であること、公開されている情報が最新であること、更新の有無が確認できること
6	アクセシビリティ (Accessibility)	利用する場合に特別な手段が必要になっているかを評価する。 保管されているデータが利用手段に適合した形式であること
7	標準適合性 (Compliance)	標準的なルールに適合しているかを評価する。 書式、使用している文字セットが標準であること、指定された選択項目が入っていること

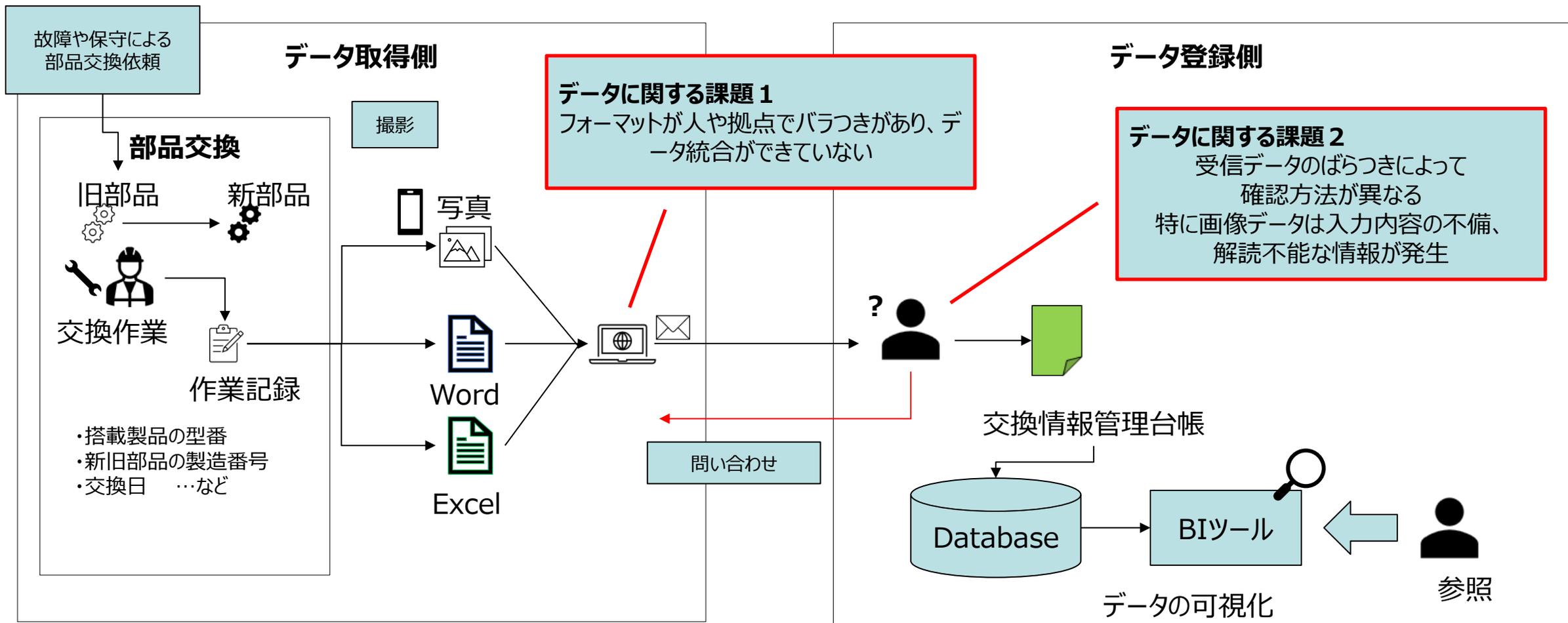
測定関数	A / B
測定量要素	A:構文上正確なレコードの数
	B:レコードの数

データ品質15ヶ条

	項目名	評価内容
8	機密性 (Confidentiality)	機密性が確保されているかを評価する。 アクセス権の設定が適切であること、暗号化やハッキング対策などができていること
9	効率性 (Efficiency)	効率的に処理できているかを評価する。 データを効率的に処理できること、コードを効果的に使用していること
10	精度 (Precision)	項目の形式が利用目的に応じた精度を確保できているかを評価します。 精度（小数点桁数など）が適正に設定されていること、精度が示されていること、
11	追跡可能性 (Traceability)	原本を確認できるかを評価する。 外部データが明確化されていること、変更時の日付等を記録していること
12	理解性 (Understandability)	項目を正しく理解できるかを評価します。 意味が理解できること、メタデータが提供されていること、適切に関連付けがされていること
13	可用性 (Availability)	データ利用の容易さを評価する。 必要なときにアクセスできること、利用システムが常時稼働していること
14	移植性 (Portability)	データ移行の容易さを評価する。 標準的なフォーマットで出力およびエクスポートできること
15	回復性 (Recoverability)	データ復元の容易さを評価する。 バックアップデータが存在し、アクセスできるバックアップシステムがあること

ユースケース①

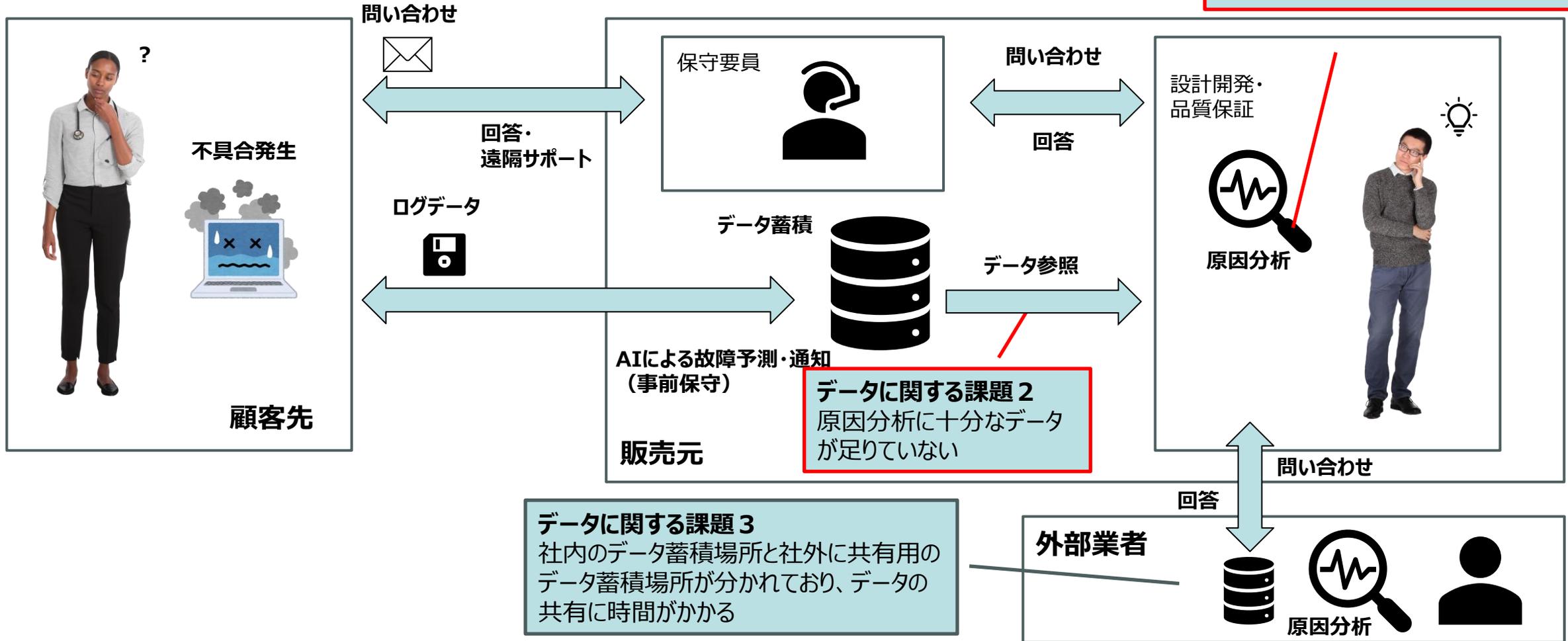
概要：製品に搭載されている部品を交換する場合、製品と新部品の番号の情報を紐づけるとともに、旧部品が適切に廃棄されたことを管理する必要がある。



ユースケース②

概要：顧客からの問い合わせ内容の確認、及び顧客先の装置からログデータを取得し、原因を分析して対応する。

データに関する課題 1
ログ形式のデータなので、開発者でないと何が起きているか分からない



ユースケース データ品質評価検証

No	業務の困りごと	なぜそのような状態か	原因	解決案	No	該当する品質15か条	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15				
1	交換部品のデータ桁数が想定と異なる 手書き文字が読めない	データ入力の手書き	機材（PC・スマホ・プリンタ等）を提供していない	機材を提供する	1	正確性、完全性、信ぴょう性、標準適合性	●	●		●			●												
			現場の工数不足	入力が楽になる仕組み導入 Webアプリ化	2	完全性、効率性、アクセシビリティ		●					●												
			作業者のモチベーションが低い	動機付けがない	—	3	—																		
		— 作業のメリットを感じていない		昇給・昇格による動機付け	4	—																			
		— 他の仕事と兼任している		入力が楽になる仕組み導入 Webアプリ化	5	完全性、効率性、アクセシビリティ		●						●											
		PC操作に不慣れ		教育を行う	6	—																			
		現場の工数不足		入力が楽になる仕組み導入 Webアプリ化	7	完全性、効率性、アクセシビリティ		●						●											
		作業者の入力がチェックされない		チェックの仕組みが無い	Webアプリ化	8	完全性、効率性、アクセシビリティ		●						●										
				入力フォーマットの自由度が高すぎる	送付フォーマットのデジタル化 Webアプリ化	9	正確性、標準適合性	●								●									
			1人で作業している	二重チェック	10	—																			
2 問合せ担当者の工数がかかる	単純に時間がかかる	海外の場合、時差が影響する	Webアプリ化	11	完全性、効率性、アクセシビリティ		●						●												
		問合せ先（入力担当者）が別業務をしている 専任者がいない	専任者をおく	12	—																				

品質項目
1. 正確性
2. 完全性
3. 一貫性
4. 信憑性
5. 最新性
6. アクセシビリティ
7. 標準適合性
8. 機密性
9. 効率性
10. 精度
11. 追跡可能性
12. 理解性
13. 可用性
14. 移植性
15. 回復性

データ品質評価における課題

課題

1. 評価項目の数が多く、
評価自体に工数やリソースがかかる

2. 評価項目の解釈が難しく、
人によって解釈が異なりうる

3. ユースケースの目的・背景の理解と
目指す姿の設定が必要

意見例

- 15項目での点数付けが煩雑
- データが複数ある場合、さらに高負荷

- 点数付けの基準や理解が曖昧
- 「精度」と「正確性」の概念を混同しやすい

- 業務要求を満たすためのデータ品質要件の
特定が難しい
- 目指す姿への改善施策となりえるか評価が必要

分科会での注目ポイント

課題

1. 評価項目の数が多く、
評価自体に工数やリソースがかかる

2. 評価項目の解釈が難しく、
人によって解釈が異なりうる

3. ユースケースの目的・背景の理解と
目指す姿の設定が必要

解決案

必要な評価項目を絞れないか？

実際の評価に落とし込めるように
ガイドラインを用意・教育ができるか？

データオーナーや活用者との認識合
わせ、あるべき姿を明確にするべき

フレームワーク提案

1. 評価項目の数が多く、
評価時体に工数やリソースがかかる

必要な評価項目を絞れないか？

- 企業活動（SCM,PLM,CRM,コーポレート）
における主要データを洗い出し、それぞれの特徴から
- ①業務領域やデータ種で**共通の重要品質項目を定義**
 - ②業務領域やデータ種で**異なる重要品質項目を定義**
- し、評価項目の絞り込みを実施

企業活動におけるデータ例

PLM

製品設計データ: CAD図面、設計仕様書、技術図面

部品データ: 部品リスト (BOM)、部品の仕様、サプライヤー情報

プロジェクト管理データ: プロジェクト計画、進捗状況、リソース配分

試作・テストデータ: 試作品のテスト結果、品質検査データ、FB

製造データ: 製造プロセス、製造手順書、製造コスト

製品リリースデータ: リリース計画、マーケティング資料、販売予測

保守・サポートデータ: 保守履歴、サポート問い合わせ、修理記録

廃棄データ: 廃棄計画、リサイクル情報、環境影響評価

SCM

在庫データ: 在庫量、在庫の場所、在庫の回転率

発注データ: 発注量、発注履歴、発注先の情報

供給データ: 供給業者の情報、供給スケジュール、供給の信頼性

生産データ: 生産計画、生産実績、製造コスト

輸送データ: 輸送手段、輸送スケジュール、輸送コスト、輸送中追跡情報

需要予測データ: 市場の需要予測、販売予測、季節変動

品質管理データ: 製品の品質検査結果、不良品率、品質改善の履歴

CRM

顧客情報: 名前、住所、電話番号、メールアドレス、基本的な連絡先情報

取引履歴: 購入履歴、契約履歴、支払い履歴、顧客との取引に関する情報

行動データ: ウェブサイトの訪問履歴、メールの開封履歴、クリック履歴

フィードバック: アンケート、レビュー、クレームのフィードバック情報

マーケティング: キャンペーン/プロモーションの効果、リードの生成状況

サポート履歴: 顧客サポートの問い合わせ内容、対応履歴、解決状況

コーポレート

戦略: 企業のビジョン、ミッション、戦略計画、目標設定

業績: KPI (重要業績評価指標)、バランススコアカード、業績報告書

会計: 財務諸表 (P/L、B/S、C/F計算書)、仕訳帳、総勘定元帳

予算: 予算計画、予算実績比較、予算修正データ

従業員: 個人情報、雇用契約、給与情報、福利厚生データ

パフォーマンス: 業績評価、目標設定、FB、トレーニング履歴

法務対応: 許認可情報、法的文書、コンプライアンスデータ

契約: 契約書の作成・審査、契約履行状況、契約更新情報

法的リスク: 訴訟情報、法的リスク評価、リスク対策計画

コンプライアンス: 法令遵守状況、内部監査、コンプライアンス教育履歴

ITインフラ: サーバー情報、ネットワーク構成、システム稼働状況

情報セキュリティ: セキュリティポリシー、インシデント報告、監査結果

企業活動におけるデータ例

PLM

製品設計データ: CAD図面、設計仕様書、技術図面

部品データ: 部品情報

プロセス管理データ: プロセス配分

試験データ: 試験結果

製造データ: 生産履歴

製品リリースデータ: リリース計画、マーケティング資料、販売予測

保守・サポートデータ: 保守履歴、サポート問い合わせ、修理記録

廃棄データ: 廃棄計画、リサイクル情報、環境影響評価

企業における技術情報

プロセスや技術変更管理情報が多い

画像や一般的にはわかりづらい

項目が多い

SCM

在庫データ: 在庫量、在庫の場所、在庫の回転率

発注データ: 発注履歴、発注情報

供給データ: 供給業者の情報、供給履歴

生産データ: 生産履歴

輸送データ: 輸送履歴、輸送情報

需要予測データ: 市場の需要予測、販売予測、季節変動

品質管理データ: 製品の品質検査結果、不良品率、品質改善の履歴

日次での変動が多く演算処理によって

チェーン全体が密に連動している

コード（及び名称）や数値項目が多い

CRM

顧客情報: 名前、住所、電話番号、メールアドレス、基本的な連絡先情報

取引履歴: 機微な情報や自由記述が多い

行動データ: 任意文字列やケースに応じて

フィードバック: アンケート、レビュー、クレームのフィードバック情報

マーケティング: 設定される項目も多い

サポート履歴: 顧客サポートの問い合わせ内容、対応履歴、解決状況

コーポレート

戦略: 企業のビジョン、ミッション、戦略計画、目標設定

業績: KPI（重要業績評価指標）、バランススコアカード、業績報告書

会計: 財務諸表、決算書、固定帳

予算: 予算計画

従業員データ: 従業員情報、給与情報

パフォーマンス: 業績評価、目標設定、FB、トレーニング履歴

法務対応: 信憑性や妥当性が求められる
扱うデータ形式は様々

契約: 契約書の作成・審査、契約履行状況、契約更新情報

法的リスク: 訴訟履歴、法的リスク情報

コンプライアンス: 法令遵守状況、内部監査、コンプライアンス教育履歴

ITインフラ: サーバー情報、ネットワーク構成、システム稼働状況

情報セキュリティ: セキュリティポリシー、インシデント報告、監査結果

主要品質評価項目 フレームワーク

ISO/IEC 25012	品質項目読み解き	品質	PLM	SCM	CRM	コーポレート	
固有 システム依存	① 共通の 重要品質項目	正確性	●	●	●	●	
		完全性	●	●	●		
		一貫性	●	●	●	●	
		信憑性				●	
		最新性	●	●	●	●	
	② 異なる 重要品質項目	アクセシビリティ				●	
		標準適合性					●
		機密性	●			●	●
		効率性	●		●		
		精度			●		
		追跡可能性					●
		理解性	●		●		
	システム 非機能要件 品質項目	可用性					
		移植性	技術情報であるため 機密性が重要	正確で素早い演算処理のために、 効率性や精度が必要	データ形式が幅広く、 用途に応じた形式で格納することが重要	顧客中心の情報で 機密性が必要	監査での利用も多いため、 法で定められた規格や 原本へ回帰して情報を参照できる 必要がある
回復性		処理において効率的な項目の 利用が必要 難解な情報のため メタデータが必要	似た項目名称も多いため、 メタデータも必要				

フレームワークの効果測定(ユースケース②)

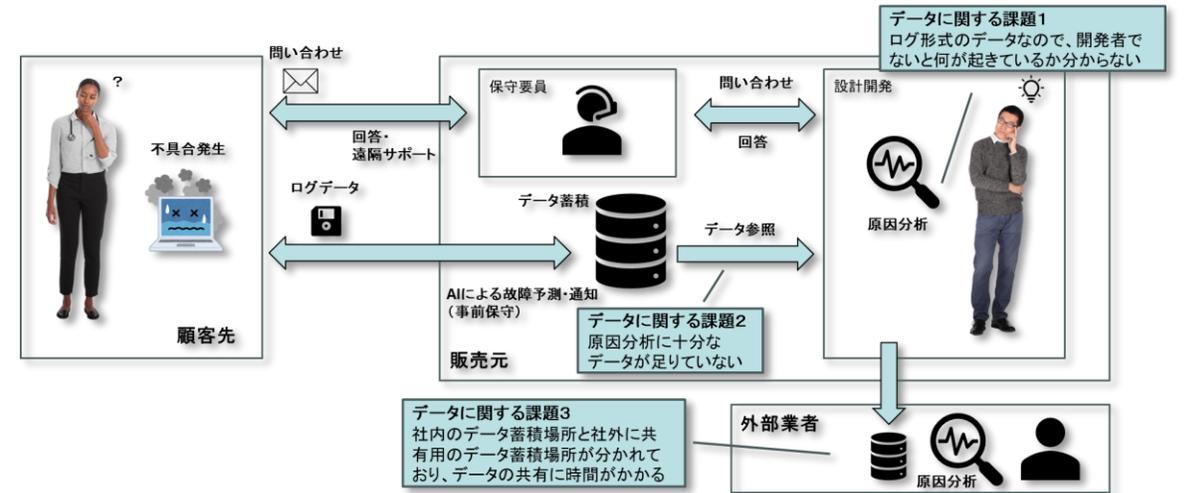
前提

- 対象業務の業務領域の特定
 - 本ケースはPLMに相当するデータ領域
 - 対応すべきデータ品質項目の特定
 - 共通で重要な品質項目の他、「機密性」「効率性」「理解性」が特に重要である
- ※システム非機能要件品質項目は対象外

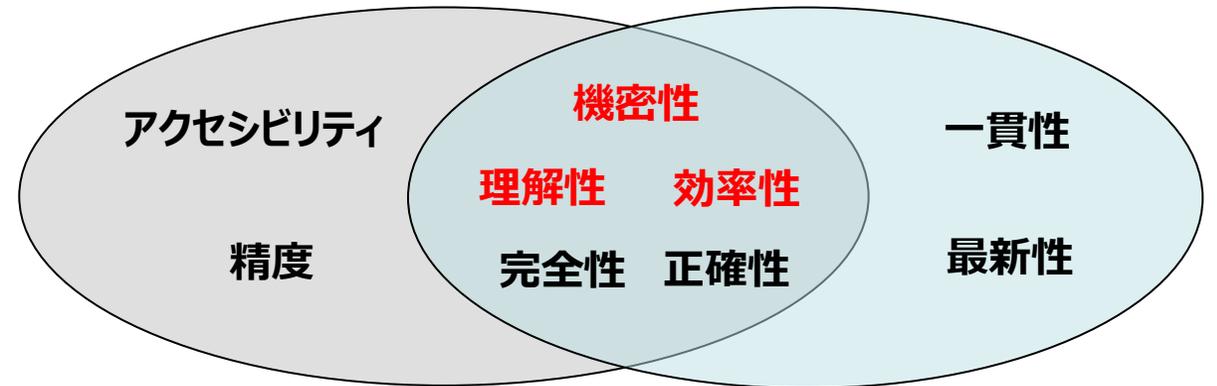
効果

- フレームワークを信用しつつ、業務理解も加えて重要な品質項目を絞り込めている (評価指標: F1スコア = 0.71)
- F1スコアTP項目をより重要項目として絞り込むことも示唆

混同行列		フレームワーク (仮説)	
		重要	重要でない
業務理解の元	重要	5	2
	重要でない	2	3



- 業務理解の上重要と判断
- フレームワークで重要と予測



追跡可能性 信憑性 標準適合性 回復性 可用性 移植性

- ・「データドリブン経営」と「データ品質」の
関連性・位置づけの言語化
- ・データ品質評価軸の調査、理解深耕の実施
- ・ユースケースを用いた品質評価検証
- ・運用上の課題提起
- ・解決案の仮説策定
- ・フレームワーク提案
- ・フレームワークの効果検証

研究を通しての気づき（AI要約）

1. 主な成果

1. データ品質の重要性と複雑性への理解深化
2. 業種横断的な共通課題の発見
3. 4つの業務区分に基づくデータ品質評価フレームワークの開発
4. 業務詳細の知識がなくても活用可能な評価手法の示唆

2. 今後の課題

1. フレームワークの適用範囲拡大と検証
2. 具体的な評価基準・評価シートの開発
3. データ品質要求レベルの定義方法の確立
4. 企業ルールとしてのデータ品質管理の検討

3. 総括

本研究により参加者はデータ品質に関する新たな視点を獲得。開発されたフレームワークは有望だが、さらなる検証と改良が必要。今後はより広範な業種・業務への適用と具体的な品質管理プロセスの確立に向けて研究を進める。

END

2024年度JUASビジネスデータ研究会 第二分科会

「理想のデータ基盤」

2025年3月26日（水）
ビジネスデータ研究会

第2分科会メンバー 14名

敬称略



ブレインズコンサルティング
(リーダー)
福田 直起



KHネオケム
谷池 智



ニュータニックス・ジャパン
三好 哲生



ジャステック
(サブリーダー)
岡野 透



ニチレイ
岩尾 咲也佳



ヤマト運輸
牛江 浩崇



雲の宇宙船
(サブリーダー)
舟橋 孝秀



ライオン
斎藤 夏実



IHI
新井 悠人



TDCソフト
浅田 裕久



大正製薬
木澤 美貴子



BIPROGY
菊地 賢也



旭化成
姫野 貴紀



東レシステムセンター
櫻井 美樹

メンバーの声



データ基盤の**理想的なアーキテクチャ(福田モデル)**を検討し、以下2つの目的達成を狙います。

新規データ基盤構築担当者に対して：
必要不可欠な機能要件を提示し、**効率的かつ効果的なシステム構築をサポート**する。

現行のデータ基盤運用者に対して：
理想的なアーキテクチャを示すことで、既存システムの**課題に対する問題解決案を提示**する。

1

過去から現在 集中型アーキテクチャ

- 1-1 過去のデータ基盤
- 1-2 現在のデータ基盤
- 1-3 変遷のまとめ

2

未来 分散型アーキテクチャ

- 2-1 集中型の課題
- 2-2 分散型基盤の登場
- 2-3 ハイブリッド型基盤の登場

3

さらなる未来 理想のアーキテクチャ 福田モデル

- 3-1 ハイブリッド型基盤に存在する課題
- 3-2 理想のデータ基盤へのアプローチ
- 3-3 福田モデル

4

まとめとふりかえり メンバー所感

- 4-1 まとめ
- 4-2 メンバー所感

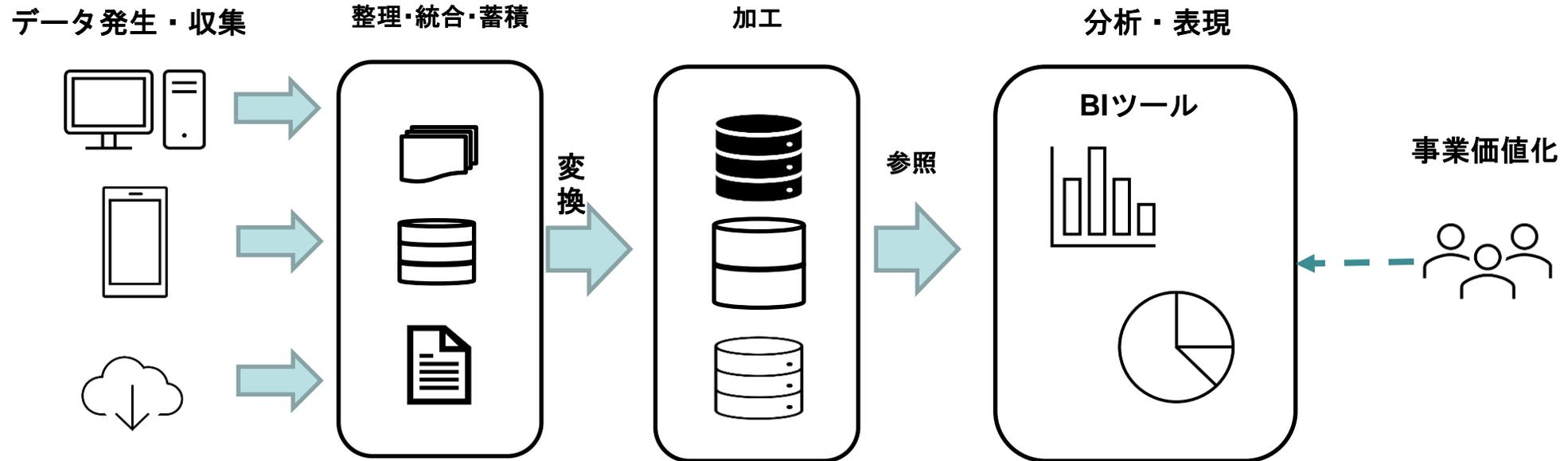
1

過去から現在

集中型アーキテクチャ

1-1 過去のデータ基盤

約10年前のデータ基盤は以下のような構成であったが、現在使用されている各機能の具体的な名称や概念はまだ確立されていなかった。



出典: 2015年度JUAS研究活動成果報告書 データマネジメント研究会資料を一部改変 (https://www.juas.or.jp/cms/media/2017/01/15_dm-ds.pdf)

No	課題	課題分類
1	ストレージコストが高く、データの多様化に柔軟に対応できない	コスト、品質
2	無計画なデータ投入により、正しいデータがわからない	品質
3	システム間データ連携に時間がかかる	納期
4	フォーマットが標準化されておらず、分析効率が上がらない	品質、納期

標準的な概念が整備されていなかった

1-2 現在のデータ基盤

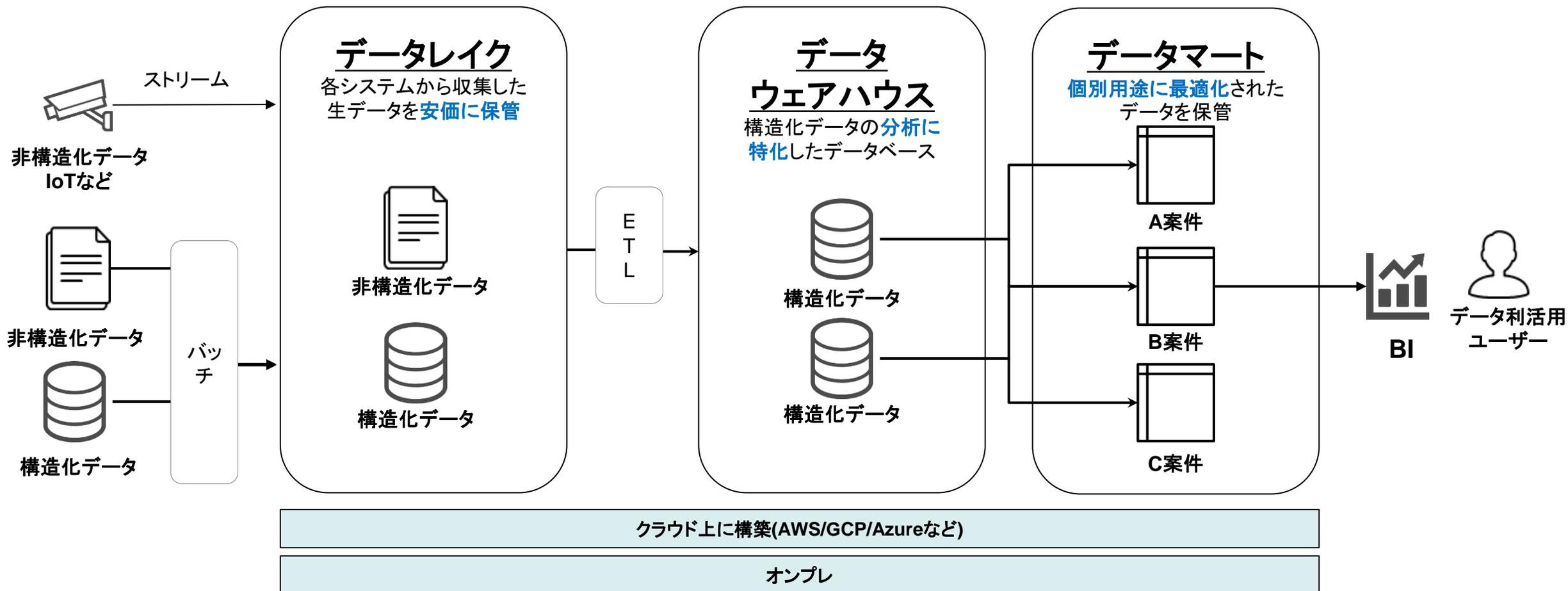
現在主流のデータ基盤の構成を理解するため、公開されている業界情報や事例を調査し、その使用用途や適用状況を分析した。

No	事例	要素技術		
		データレイク	データウェアハウス (DWH)	データマート
1	マーケティングデータの統合と分析基盤の構築	○		
2	経営データ一元管理のためのデータ基盤構築	○	○	
3	リアルタイムでのデータ分析可能なデータ基盤構築	○	○	○
4	大学向けデータ分析基盤構築	○	○	○

データレイク、DWH、データマートの活用事例が一般的にみられる

1-2 現在のデータ基盤

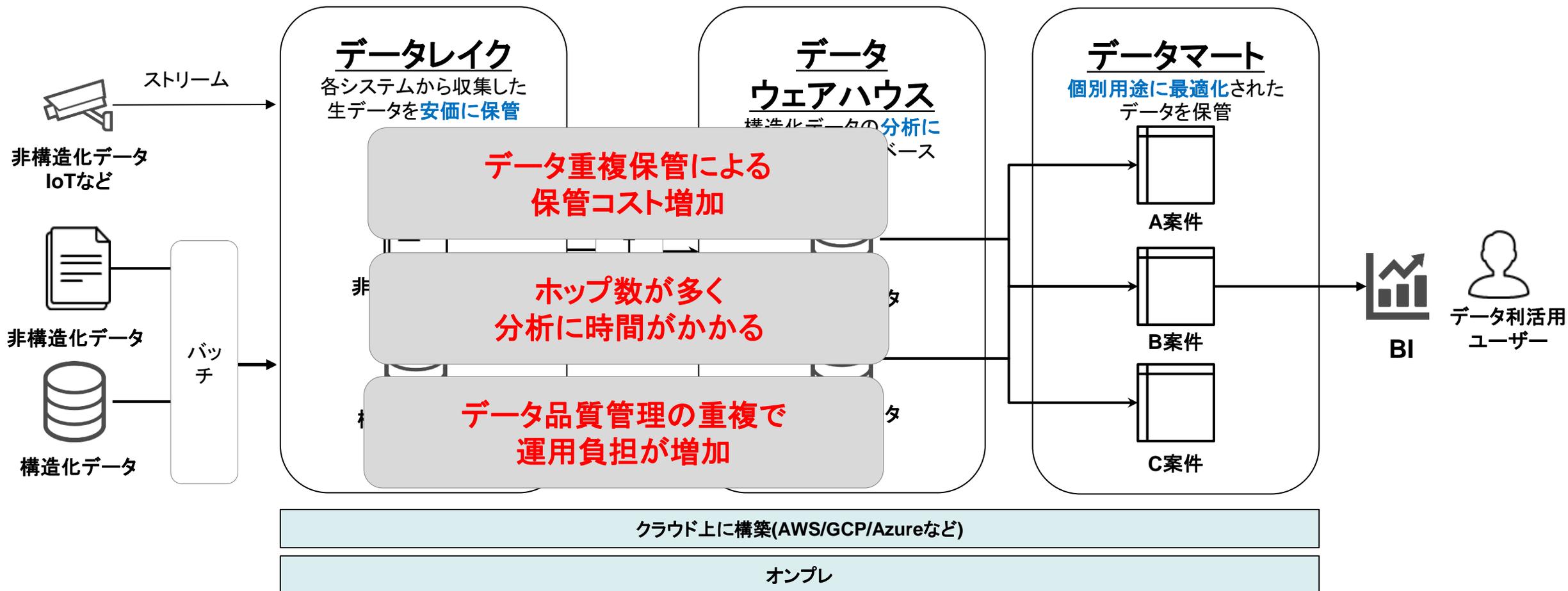
前述の調査結果に基づき、現在主流と考えられる標準的なデータ基盤の構成は以下になると推察される。



現在はこのアーキテクチャ(集中型)が主流になっている

1-2 現在のデータ基盤

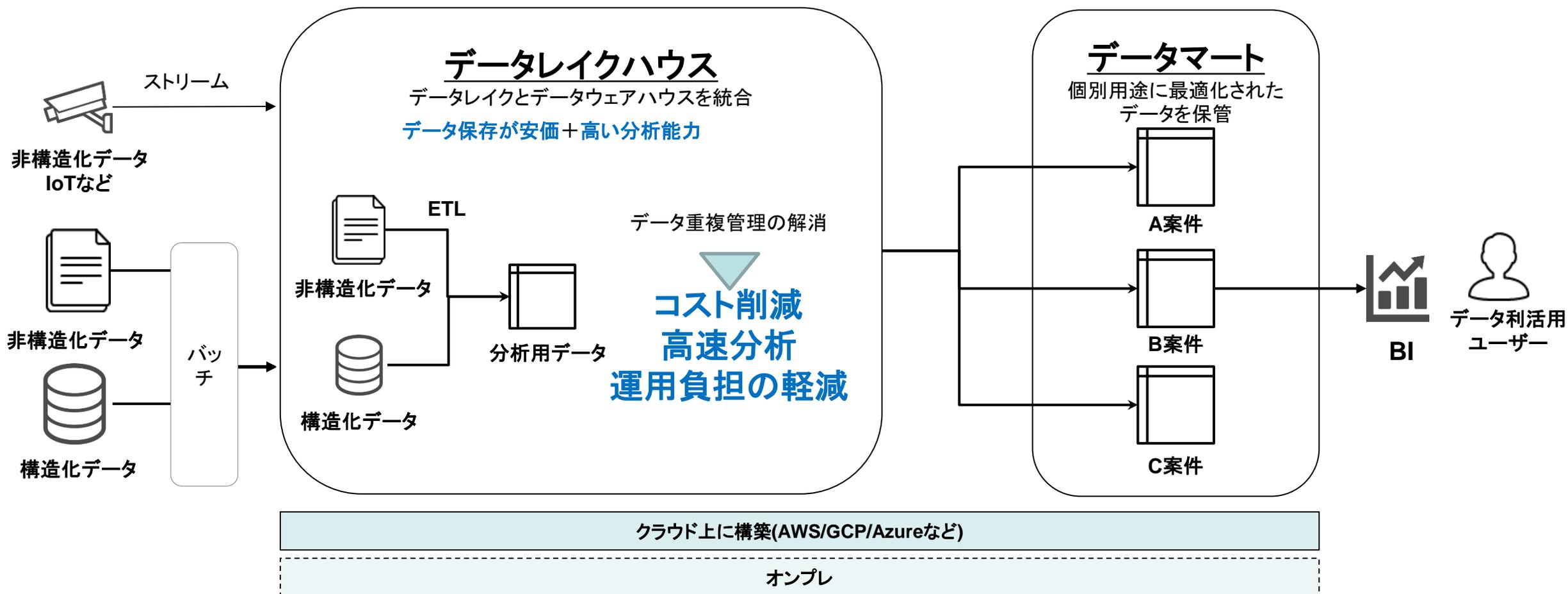
一般的に標準とされる集中型のデータ基盤には以下の課題が存在する。



現在はこのアーキテクチャが主流になっている

1-2 現在のデータ基盤

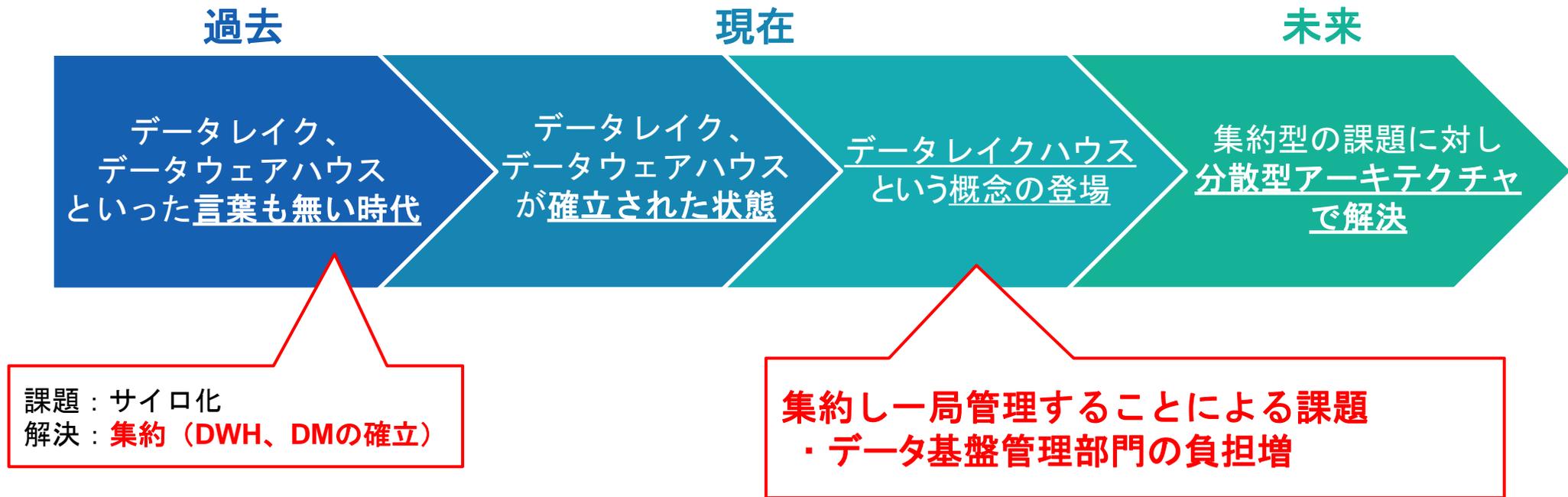
前述の課題を解決するため、データレイクハウスという概念が提案され、実装されるようになった。



データレイク+DWH構成の課題を解決するため、データレイクハウスが登場

1-3 変遷のまとめ

以下に集中型データ基盤の変遷を時系列で示し、今後の課題を記載する。



今後見込まれる新たな課題対策として、分散型アーキテクチャを検討する。

2

未来

分散型アーキテクチャ

2-1 集中型の課題

現在主流となっている集中型のデータ基盤は、ユースケースの拡大とそれに伴うデータ量の増加により、データ基盤管理部門の負荷が増加している。その結果、以下のような課題が顕在化している。

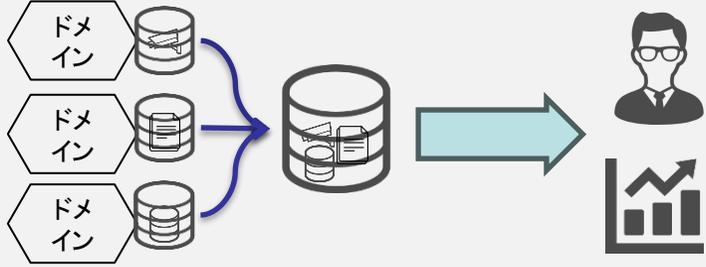
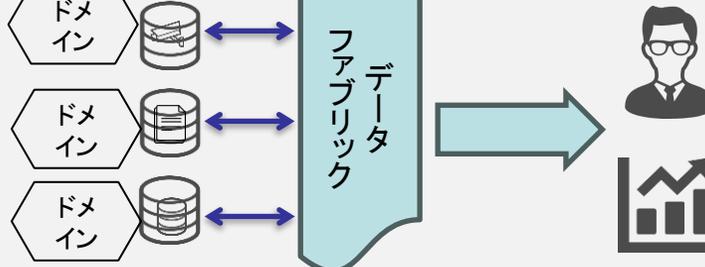


No	課題	具体例
①	データ管理部門の責任範囲・負担が大きい	・データ更新依頼がデータ管理部門に集中し、処理が遅れることによりデータ利活用先ユーザのデータ待ちが発生
②	データの維持管理コストがかかる	・データ基盤にすべてのデータが保存されているが、分析で利用されるのは最新1年分のデータのみ
③	データソースの追加・変更にかかる時間がかかる	・ETLパイプラインの開発に時間がかかり、意思決定が遅れる
④	データが分析可能になるまでのタイムラグが発生する	・バッチ処理のみ運用されている場合、リアルタイムの売上分析ができず、意思決定が遅れる

集中型データ基盤は、データ基盤管理部門負担増加による利便性低下の課題がある。

2-2 分散型データ基盤の登場

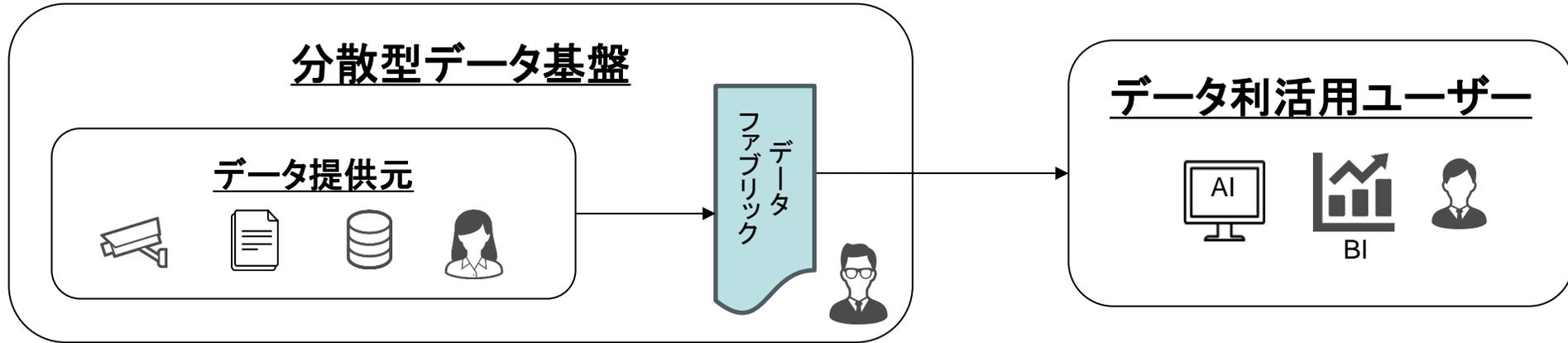
前述の課題に対応するため、より高い拡張性とIT運用負荷の軽減を実現する分散型データ基盤が登場し、採用も進んでいる。

	集中型アーキテクチャ	分散型アーキテクチャ
イメージ		
データ基盤の特徴	データやガバナンスは中央組織が集中管理	データもガバナンスもドメインと中央組織が責任を分担
データ収集と提供	データレイクやデータウェアハウスは組織内の 実データ を統合的に収集・蓄積し、用途に応じて管理活用するデータ基盤	各ドメインに保存されている実データを統合的にアクセス・管理するためのアーキテクチャであり、データを1か所に集約せず、 仮想的な統合(データファブリック) を実現
ガバナンス	ETLやデータマート、BIに代表されるデータ利用者が理解しやすい形にデータを変換する ハブ&スポーク型 のデータ処理	各ドメインのデータにアクセスする手段(APIなど)を提供し、別ドメインが必要なデータを呼び出して加工する メッシュ型 のデータ処理
パフォーマンス	データ基盤管理部門 が中央集権的にデータガバナンスを担当	各ドメイン担当者 と データ基盤管理部門 がデータガバナンスを担当
	データ移動 : ETLでデータを転送する時間がかかる クエリパフォーマンス: 高速	データ移動 : 不要 クエリパフォーマンス: 低速の可能性あり (データソースへの負担)

集中型とは異なる分散型データ基盤が登場

2-2 分散型データ基盤の登場

分散型データ基盤は、集中型データ基盤が直面する課題に対して効果的な解決策を提供する。

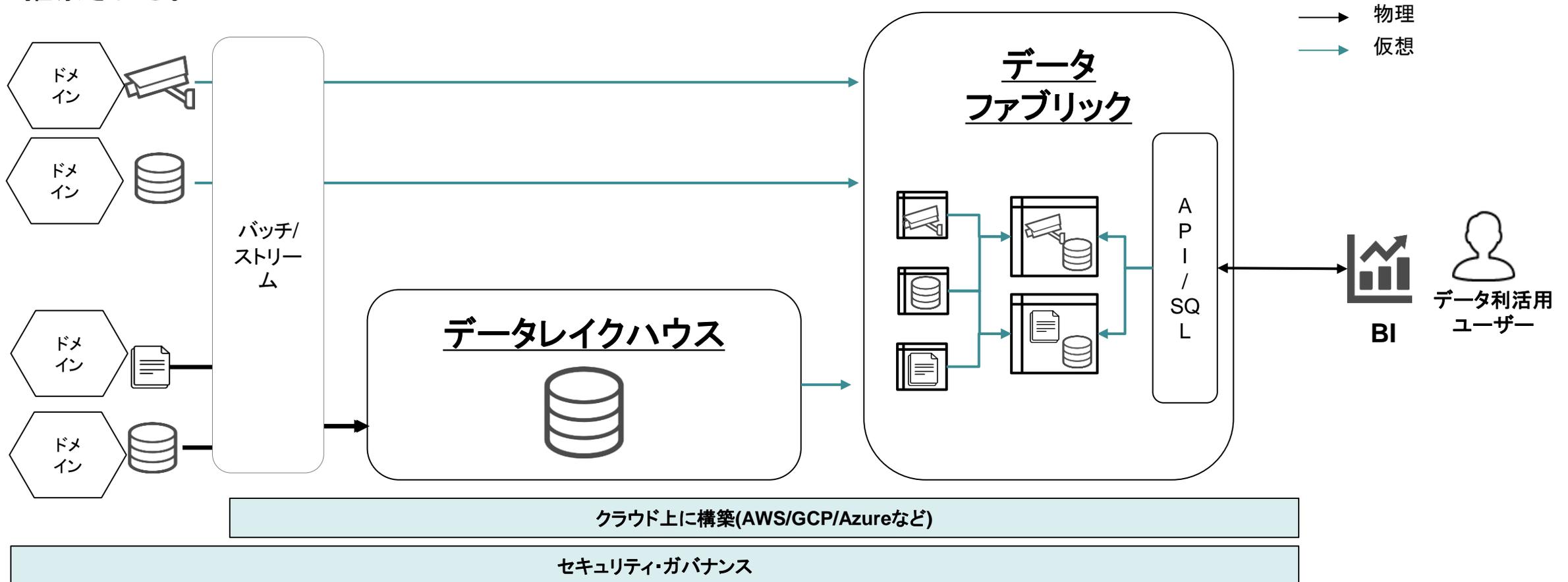


No	集中型の課題	分散型による解決内容
①	データ管理部門の責任範囲・負担が大きい	・各部門のデータ責任者が自部門のデータ管理を担うことで、データの責任範囲・負担が分散化される。
②	データの維持管理コストがかかる	・集中型で行っていたデータの二重管理・リフレッシュ業務がなくなる。
③	データソースの追加・変更にかかる時間がかかる	・各部門での新規発生・変更を行うことで、利活用先は変更内容を利用できる。
④	データが分析可能になるまでのタイムラグが発生する	・集中型への送信処理がなくなり、利活用先までの送信時間の短縮が見込まれる。

分散型データ基盤は、集中型が抱える様々な問題点を解決する可能性がある。

2-3 ハイブリッド型基盤の登場

集中型データ基盤と分散型データ基盤は互いに補完する関係にある。
ユースケースや条件に応じて、両者の長所を活かしたハイブリッド型のデータ基盤を採用されることが推察される。



ハイブリッド型のデータ基盤の登場

2-3 ハイブリッド型基盤の登場

以下にハイブリッド型データ基盤までの変遷を時系列で示す。



分散型アーキテクチャの課題解決を検討する。

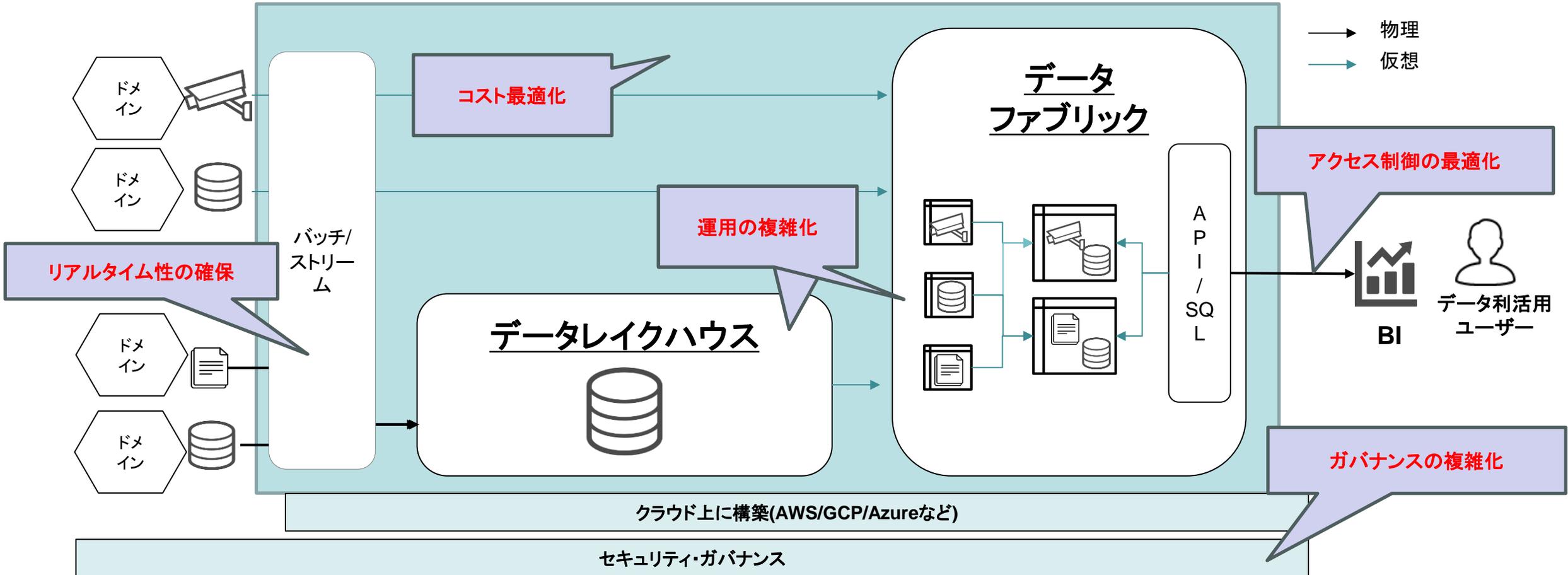
3

さらなる未来

理想のアーキテクチャ
福田モデル

3-1 ハイブリッド型基盤に存在する課題

ハイブリッド型は集中型と分散型のそれぞれのメリットを活かしつつ、両立を目指すものだが、それぞれから継承した課題やハイブリッド型固有の課題も抱えている。



ハイブリッド型のデータ基盤の課題

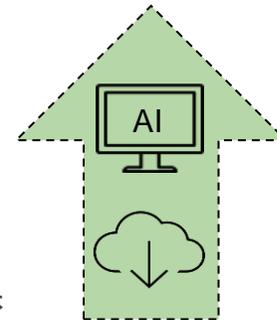
3-2 理想のデータ基盤へのアプローチ

前述のハイブリッド型データ基盤が直面する課題に対応するため、現在のAI技術および今後10年間で実用化が見込まれる技術や概念を適用し、理想のデータ基盤(福田モデル)の在り方を探求した。



10年後に一般的に普及していると予測される技術および概念

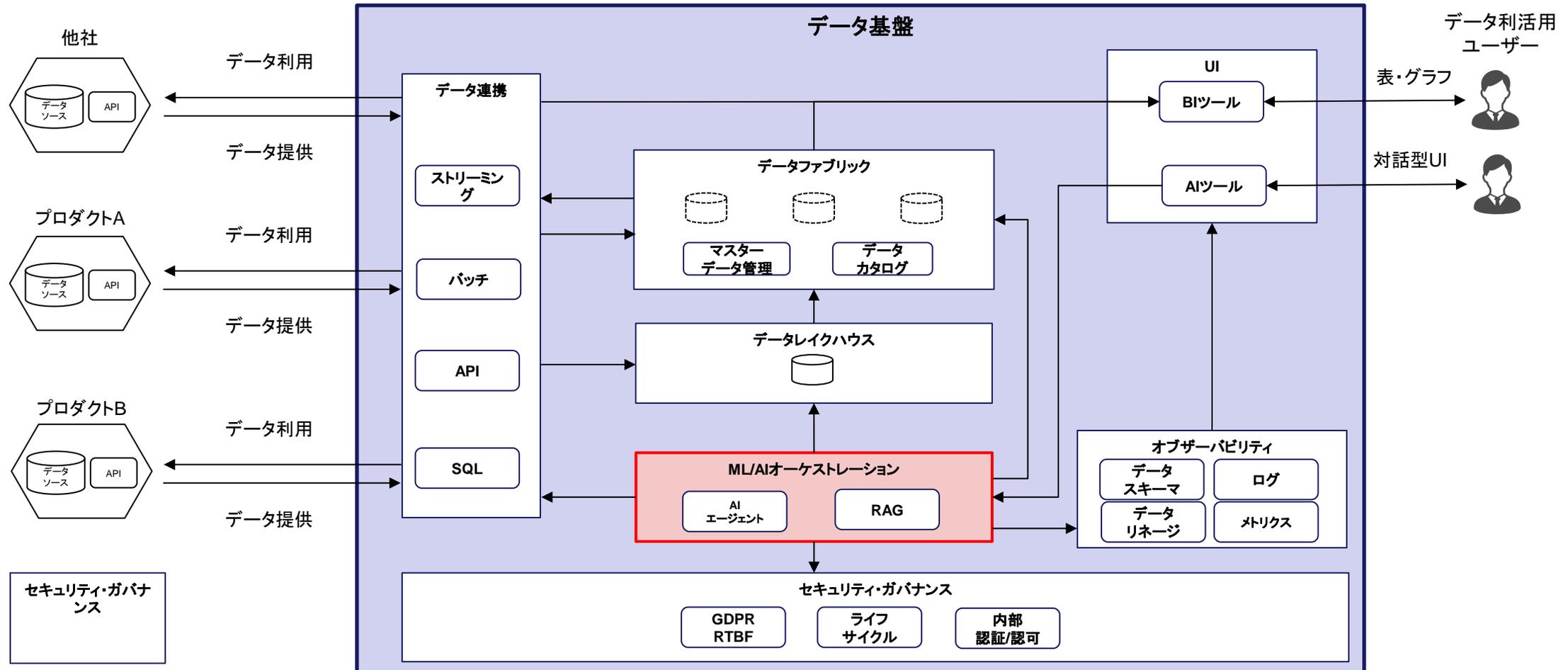
1. AIによるデータの整理・補完・生成が一般的になる
2. 回線やストレージの大容量化、高性能化により、データ移動のコストが大幅に低減している
3. GPUの発展や量子コンピュータの進歩により、データ分析に関するコストが削減されつつある
4. データの処理や移動の可否は、セキュリティ、コンプライアンス、ガバナンス、倫理的考慮によって大きく左右される
5. デジタル化されていないデータの重要性が低下し、デジタルデータが主流となっている
6. 非構造化データの分析技術が進歩し、より一般的に活用されるようになっている
7. データ基盤の役割は主に「提案」を行うことであり、最終的な「判断」は人間が行う責任がある



ハイブリッドの課題の解決 + 10年後の技術 = 理想の基盤

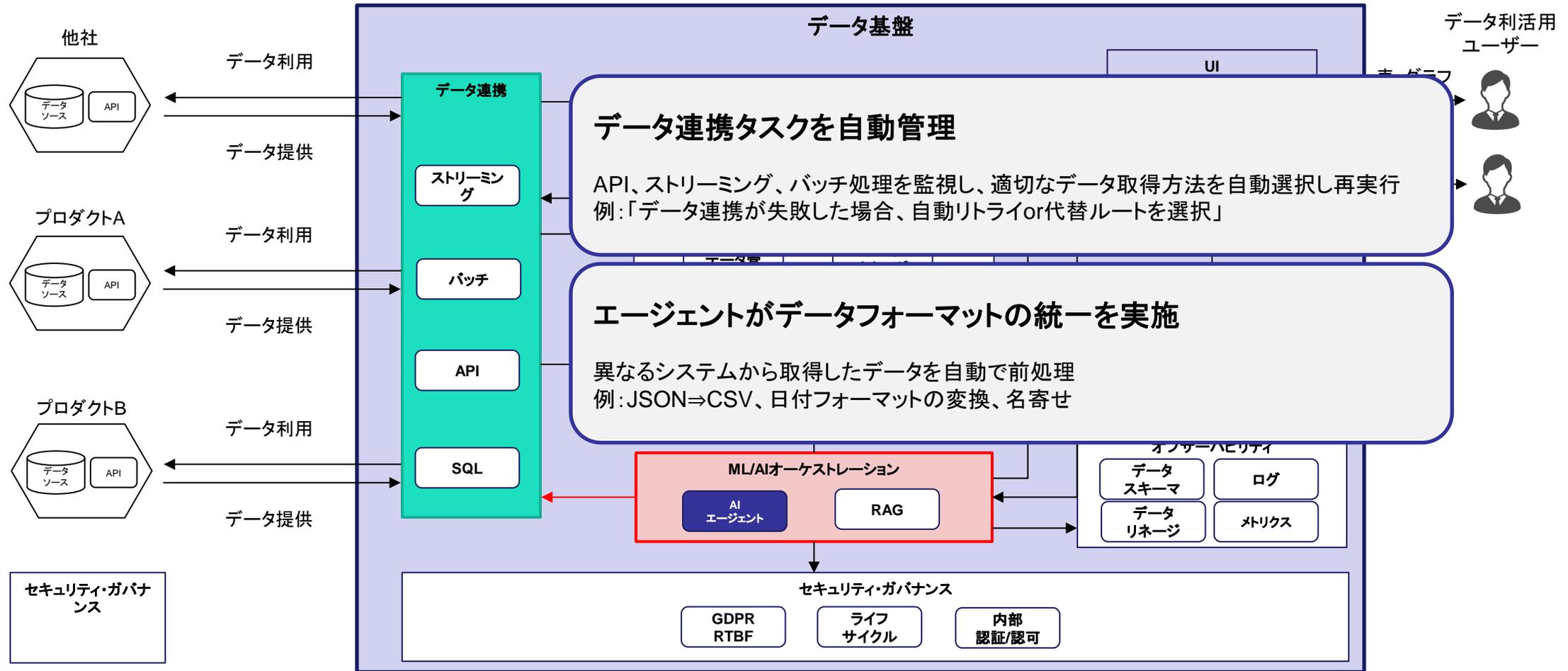
3-3 福田モデル

データ基盤へ生成AIの導入



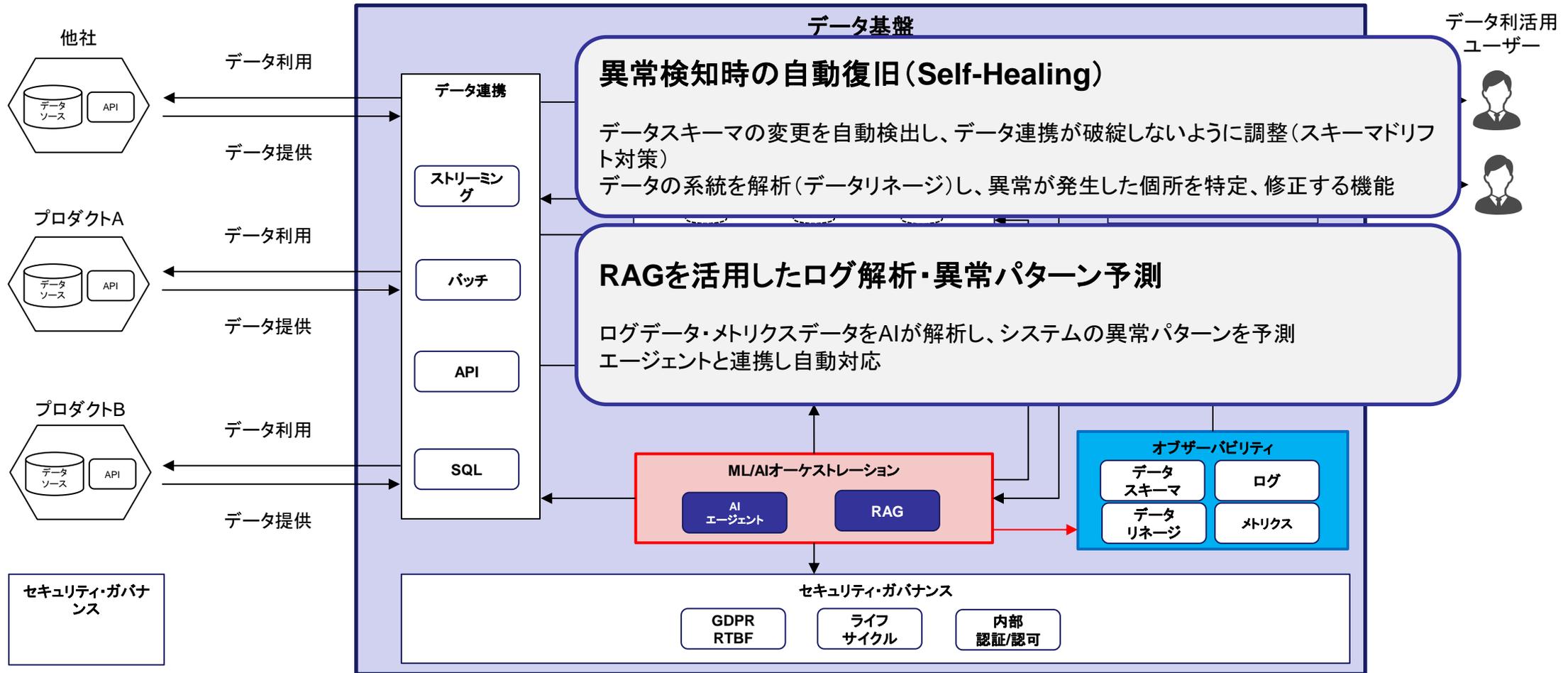
3-3 福田モデル

AI × データ連携



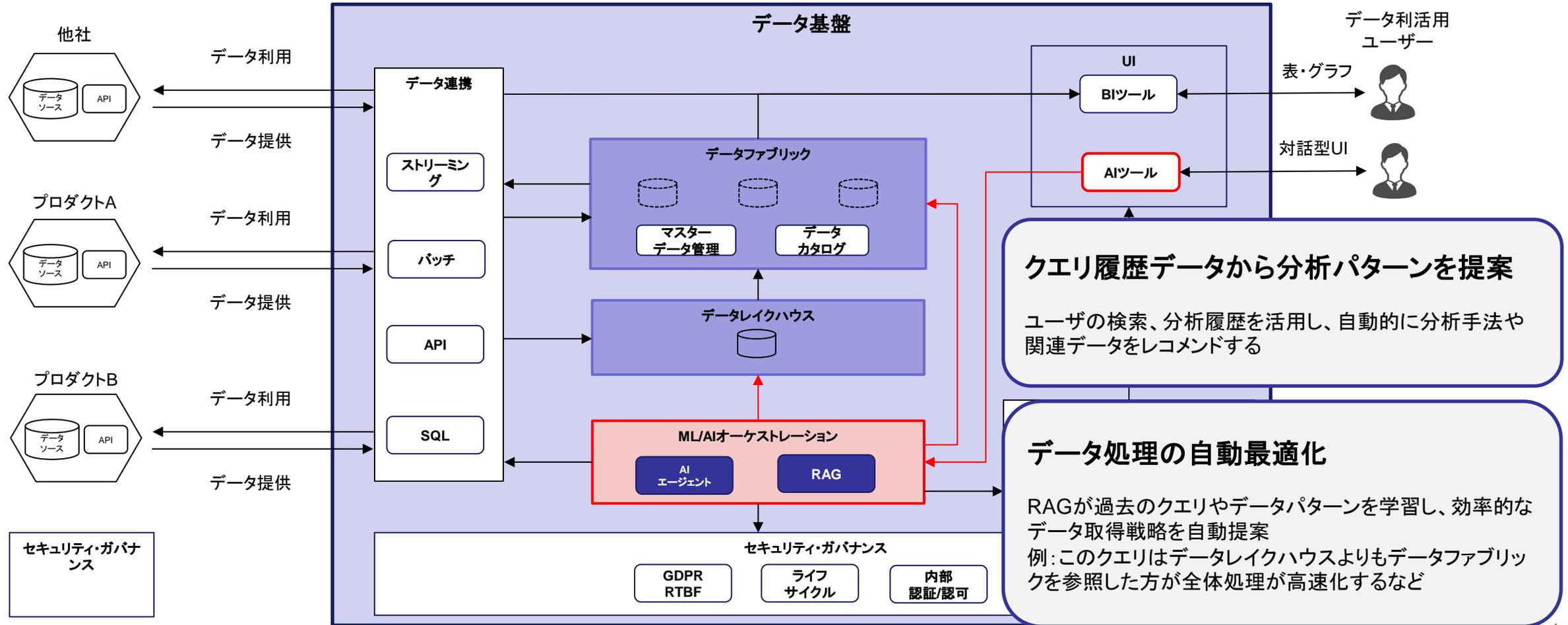
3-3 福田モデル

AI × オブザーバビリティ



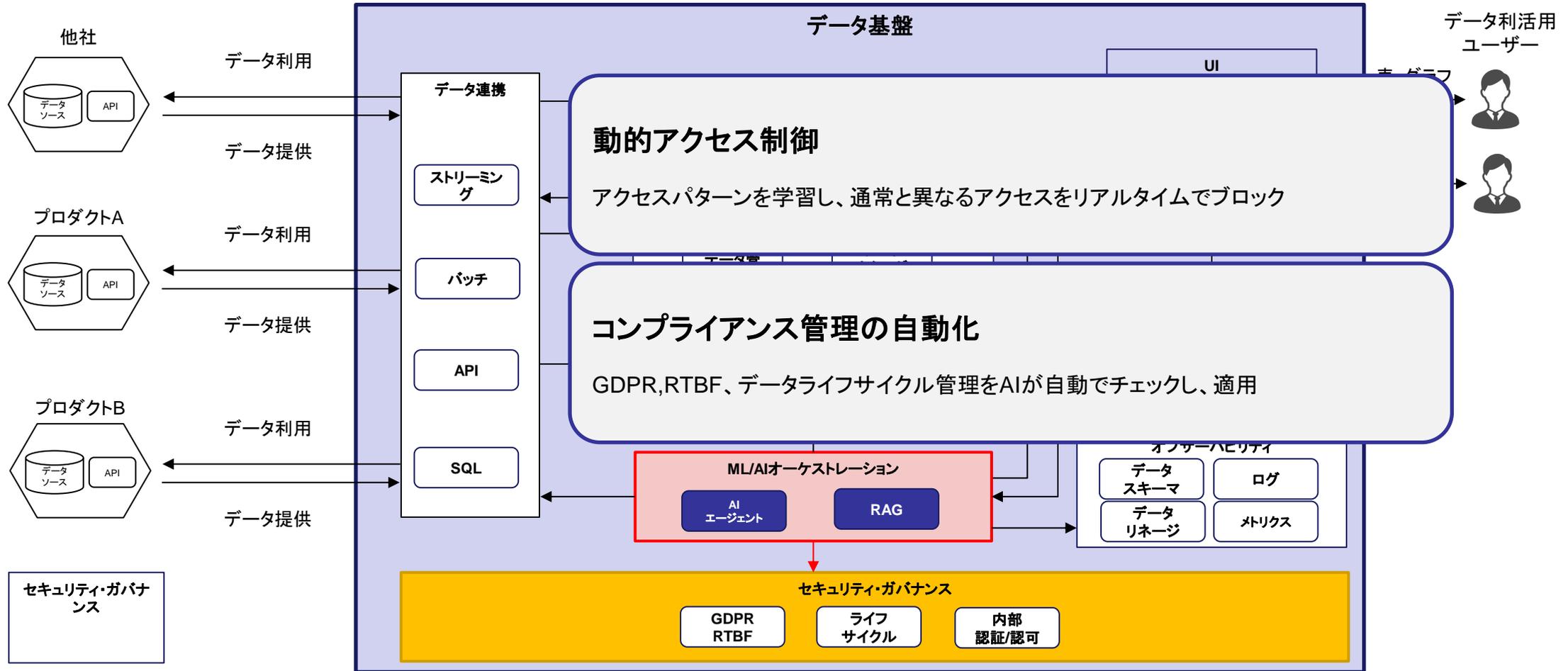
3-3 福田モデル

AI × データファブリック データレイクハウス



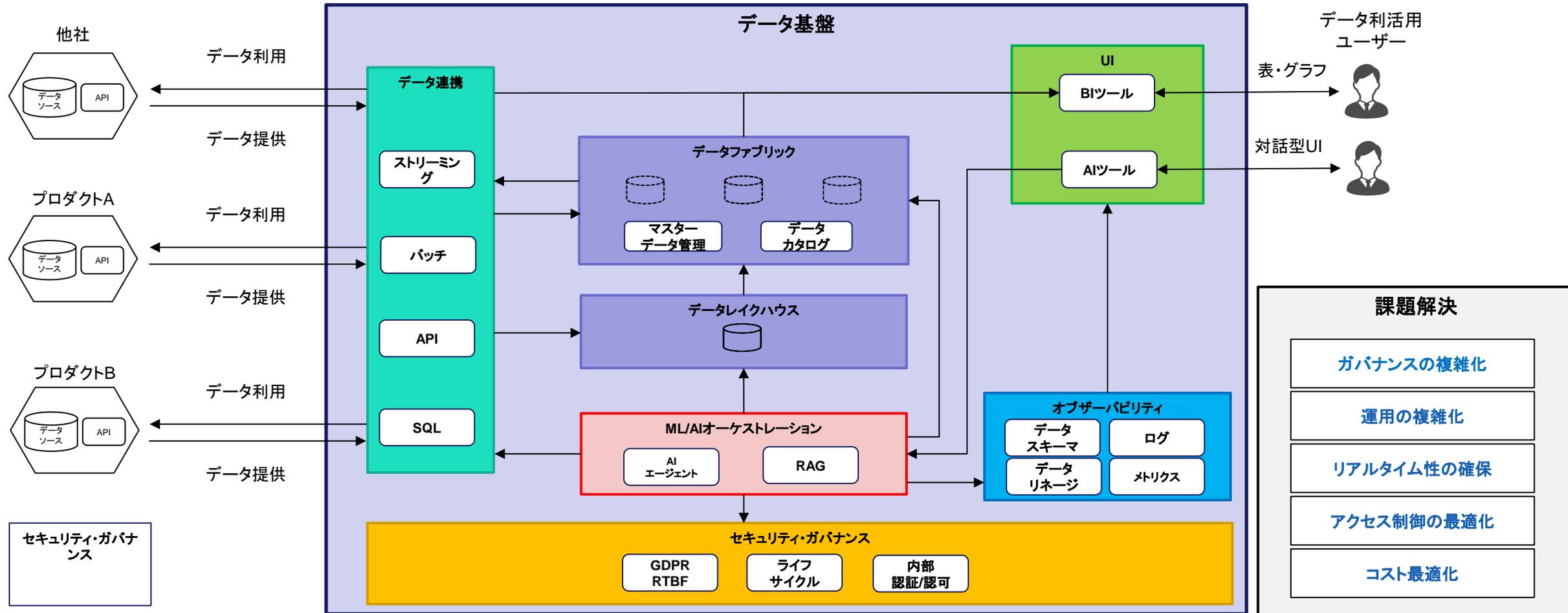
3-3 福田モデル

AI × セキュリティガバナンス



3-3 福田モデル

データ基盤と生成AIによる課題解決



3-3 福田モデル

福田モデルで課題解決の参考にした事例や概念

課題区分	課題詳細	解決策	参考事例や概念	URL
データファブリック・レイクハウス	複数のシステム間でデータが重複し、整合性の維持が難しい	生成AIを用いて、データの重複や不整合を自動的に検出・修正することで、データ品質を向上させる。	物理学と機械学習を組み合わせたAIが産業界を変革する - ハイブリッドAI	https://www.cognite.com/ja-jp/blog/physics-and-ai-hybrid-delivers-actually-working-ai-for-industry?utm_source=chatgpt.com
			Using Generative AI to Clean Your Data In Salesforce	https://www.salesforceben.com/using-generative-ai-to-clean-your-data-in-salesforce/
セキュリティ・ガバナンス	データがオンプレミスやクラウドなど多様な環境に分散し、データの所在や管理責任の可視化が困難	生成AIを活用して、データのメタデータを自動的に生成・管理することで、データの所在や属性を明確にし、ガバナンスを強化する。	アーキテクチャー設計がAIの俊敏性を最大化する - IBM - United States	https://www.ibm.com/thought-leadership/institute-business-value/jp-ja/report/hybrid-by-design-architecting-for-agility-jp?utm_source=chatgpt.com
			GDPR と AI の交差点、および 6 つのコンプライアンスのベスト プラクティス	https://www.exabeam.com/ja/explainers/gdpr-compliance/the-intersection-of-gdpr-and-ai-and-6-compliance-best-practices/
セキュリティ・ガバナンス	分散環境でのアクセス制御が複雑化し、セキュリティリスクが増大	生成AIを活用して、アクセスログをリアルタイムで分析し、異常なアクセスパターンを検知・対応することで、セキュリティを強化する。	アーキテクチャー設計がAIの俊敏性を最大化する - IBM - United States	https://www.ibm.com/thought-leadership/institute-business-value/jp-ja/report/hybrid-by-design-architecting-for-agility-jp?utm_source=chatgpt.com
			Exabeam が新機能「LogRhythm Intelligence」でAI主導のセキュリティ運用で革新を継続	https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000014.000089507.html

3-3 福田モデル

福田モデルで課題解決の参考にした事例や概念

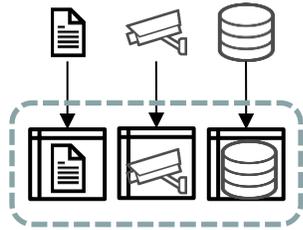
課題区分	課題詳細	解決策	参考事例や概念	URL
オブザーバビリティ	多様な環境でのシステム運用が複雑化し、管理が困難	生成AIを用いて、システムのパフォーマンスデータを分析し、最適なリソース配分や障害予測を行うことで、運用効率を向上させる。	アーキテクチャー設計がAIの俊敏性を最大化する - IBM - United States	https://www.ibm.com/thought-leadership/institute-business-value/jp-ja/report/hybrid-by-design-architecting-for-agility-jp?utm_source=chatgpt.com
オブザーバビリティ	複数の環境での運用により、コスト管理が複雑化	生成AIを用いて、リソース使用状況を分析し、コスト効率の高い運用プランを自動的に提案・実行する。	アーキテクチャー設計がAIの俊敏性を最大化する - IBM - United States	https://www.ibm.com/thought-leadership/institute-business-value/jp-ja/report/hybrid-by-design-architecting-for-agility-jp?utm_source=chatgpt.com
			Amazon Bedrock を使用した生成 AI のコストと使用状況の追跡、配分、管理	https://aws.amazon.com/jp/blogs/news/track-allocate-and-manage-your-generative-ai-cost-and-usage-with-amazon-bedrock/
データ連携	リアルタイムでのデータ処理が求められる一方、システム間の連携遅延が発生する可能性がある	生成AIを活用して、データフローを最適化し、リアルタイム処理を支援することで、遅延を最小限に抑える。	アーキテクチャー設計がAIの俊敏性を最大化する - IBM - United States	https://www.ibm.com/thought-leadership/institute-business-value/jp-ja/report/hybrid-by-design-architecting-for-agility-jp?utm_source=chatgpt.com
			Confluent brings real-time capabilities to Google Cloud generative AI	https://cloud.google.com/blog/topics/partners/confluent-brings-real-time-capabilities-to-google-cloud-gen-ai?hl=en
データ連携・オブザーバビリティ	サービスレベルアグリーメント(SLA)の遵守が難しい	生成AIを活用して、システムの稼働状況を監視・分析し、問題発生前に予防措置を講じることで、SLAの遵守を支援する。	アーキテクチャー設計がAIの俊敏性を最大化する - IBM - United States	https://www.ibm.com/thought-leadership/institute-business-value/jp-ja/report/hybrid-by-design-architecting-for-agility-jp?utm_source=chatgpt.com
			AIOpsを活用したシステム運用自動化への挑戦	https://www.nttdata.com/jp/ja/trends/data-insight/2021/1104/

4

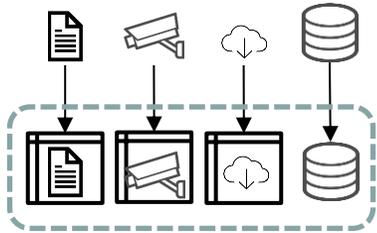
まとめとふりかえり

メンバー所感

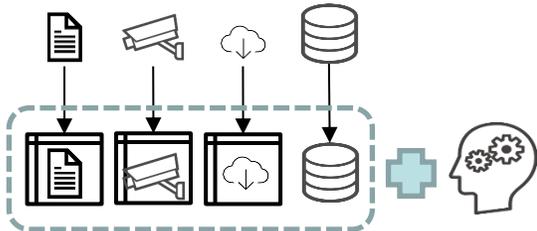
4-1 まとめ



- データ基盤は、データレイク・DWHによる集中型の他に、**データファブリックによる分散型**の選択肢が登場



- 集中型と分散型を合わせた**ハイブリッド型のデータ基盤の採用**が予想されるが、運用やガバナンスなどの課題は存在



- 生成AIの技術をハイブリッド型データ基盤に適用した**「福田モデル」**を策定し、ハイブリッド型の課題解決を検討

4-2 メンバー所感 サマリ

他の企業のデータ基盤への取り
組み状況や課題を把握できた



自社のデータ基盤構築・活用に
向けたヒントを得られた



データ基盤に関する知見を深め
ることができた



将来の課題や展望について検
討することができた



同じ悩み・課題を共有できる存
在ができた



ご静聴ありがとうございました！

2024年度 JUAS ビジネスデータ研究会 第三分科会 「データ活用に向けた組織構築と人材育成」

2025年3月26日（水）
JUAS ビジネスデータ研究会

研究テーマ 設定理由

■ 「データドリブン経営」の認識合わせ

データ基盤やAI活用といったシステム導入のみならず、データを活用した意思決定の質的な向上や業務の効率化といった、企業価値を向上させるための「経営基盤」と「業務プロセス」と定義
データ活用を軸に据えた企業全体の「オペレーションモデル」とも言うことが可能

■ データドリブン経営の**実現**とは

データドリブン経営が実現している姿を、上記のオペレーションが企業文化として浸透することと定義



当分科会では企業文化の醸成に含まれる多様なテーマのうち、実務を支える**人材**と仕組み化する**組織**に焦点を絞り、研究テーマとして設定

第三分科会 メンバー

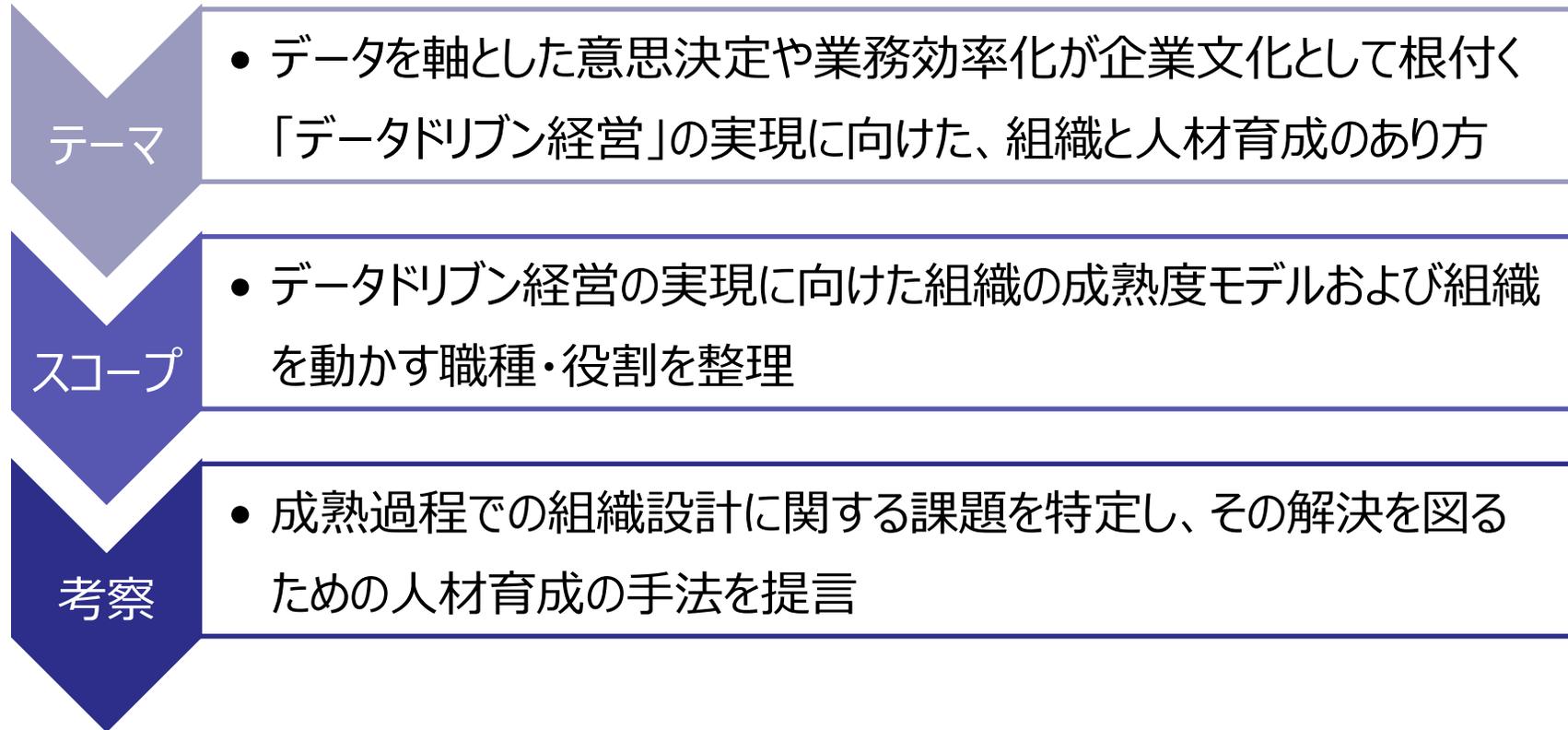
No.	会社名（敬称略）	氏名（敬称略）	役職	チーム
1	コベルコシステム株式会社	賀子 正也	リーダー	人材育成
2	インフォテック株式会社	渡邊 真	サブリーダー	
3	東芝インフォメーションシステムズ株式会社	奥平 俊		
4	日本製鉄株式会社	原田 康平		
5	東京電力ホールディングス株式会社	松原 慶之		
6	株式会社フュージョン	森尻 瑞恵		
7	住友商事株式会社	松浦 俊行	サブリーダー	組織構築
8	日本電気株式会社	奥田 泰典		
9	システムズ・デザイン株式会社	黒尾 光央		
10	森永乳業株式会社	坂本 一樹		
11	麒麟ビジネスシステム株式会社	渡辺 浩子		
12	株式会社イージフ	石井 昭紀	オブザーバー	

目次

1. 序論 — データドリブン経営の実現に向けて
2. 前提・定義
 - ① 成熟度モデル
 - ② 職種・役割
 - ③ ロードマップ
3. 示唆・提言
 - ① 研究手法・ペルソナ
 - ② 組織構築
 - ③ 人材育成
4. 結論 — 仮説への考察と活動の課題・所感
5. 参考文献

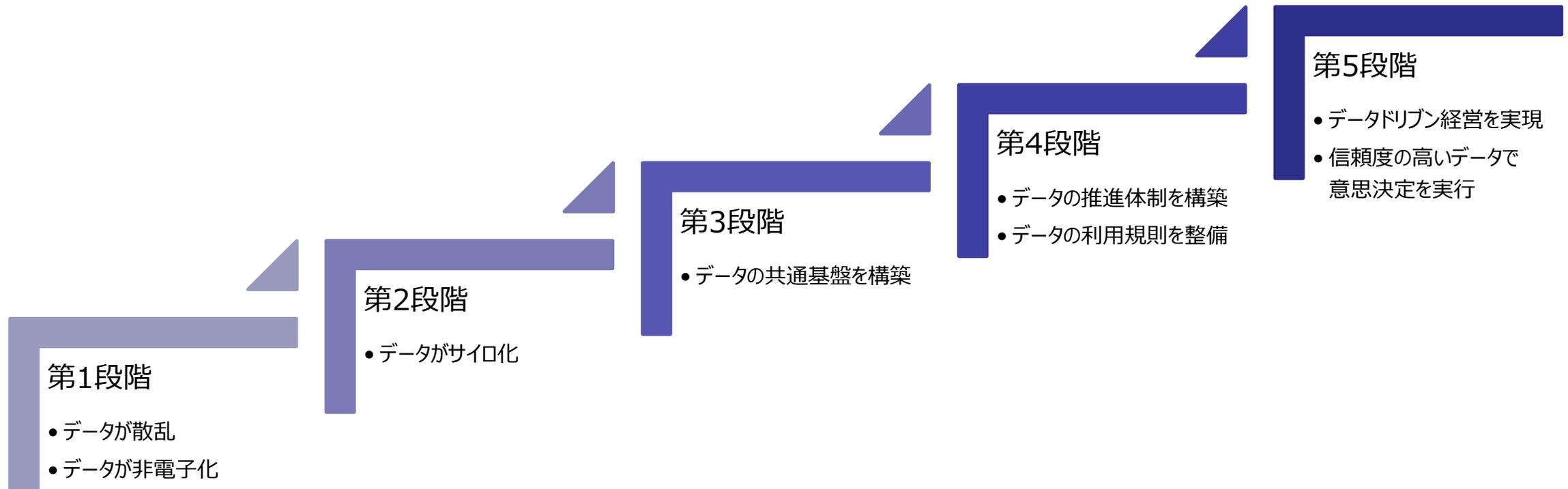
1. 序論 — データドリブン経営の実現に向けて

データドリブン経営の実現を目指す企業において、組織構築・人材育成が有機的に連携したデータ活用の業務遂行が必要との仮説に基づき、それら両面の施策を研究・考察



2. 前提・定義 ①成熟度モデル

各メンバーの社内事例、DMBOK2やDMM Modelを参照し、データドリブン経営の実現に向けた**組織の成熟度モデル**と各段階の**データ活用状況**を下記のとおり定義



※DMBOK2 : The Data Management Body of Knowledge 2nd Edition

※DMM Model : Data Management Maturity Model (データマネジメント成熟度モデル)

2. 前提・定義 ②職種・役割

データドリブン経営の実現に求められる役割を、データ活用を主軸に「データ提供者」、「データ利用者」、「経営層」の3つに分けて整理

経営層

- 組織のデータ戦略を統括

データ提供者

- データの作成・収集・整理を行い、信頼可能なデータ基盤を構築
- データ品質、セキュリティの担保のための規則を整備

データ活用の 戦略立案

データ利用者

- 高度な技術の活用によるデータの分析、新たなビジネス価値を創出
- データを可視化し、意思決定を支援
- データを活用し、業務改善や戦略立案を支援

2. 前提・定義 ②職種・役割

データ提供者

分類	職種	役割
データ収集・整備・基盤構築	データエンジニア	データの収集・保存・変換を行い、データ利用基盤を整備
	データアーキテクト	データ基盤を設計・構築し、効率的なデータ環境を提供
	データベースアドミニストレーター	データベースの設計・運用・最適化、効率的なデータ管理を実現
データ管理・保護	データマネージャー	データ管理プロセスを統括し、全体の活用を推進
	データセキュリティリスト	データのセキュリティ戦略を策定し、不正アクセスを防止
	データオーナー	データの管理責任を持ち、品質維持やアクセス制御を統括
データ統治	データガバナンスオフィサー	データ管理ルールを策定し、品質とコンプライアンスを維持
	データスチュワード	データを企業資産として管理し、データの有効性と信頼性を確保

2. 前提・定義 ②職種・役割

データ利用者

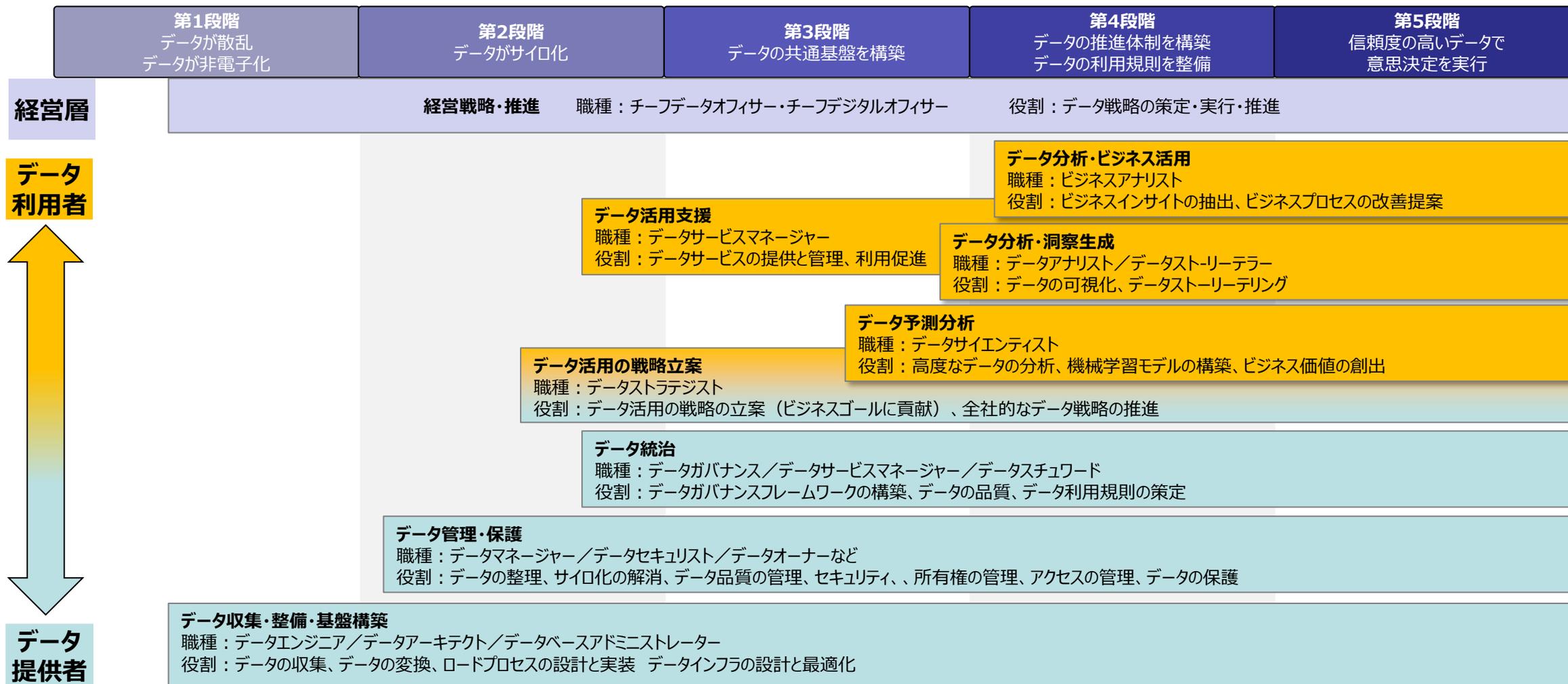
分類	職種	役割
データ活用の戦略立案	データストラテジスト	データ活用の戦略の立案、全社的なデータ戦略を推進
データ活用支援	データサービスマネージャー	データサービスの提供と管理・利用を促進
データ予測分析	データサイエンティスト	データ分析やAIを活用し、ビジネス価値を創出
データ分析・洞察生成	データアナリスト	データを可視化し、意思決定を支援
	データストーリーテラー	分析結果をわかりやすく伝え、意思決定を支援
データ分析・ビジネス活用	ビジネスアナリスト	データを活用し、業務改善や戦略立案を支援

経営層

分類	職種	役割
経営戦略・意思決定	チーフデジタルオフィサー	デジタル変革を推進し、新たなビジネスモデルを創出
	チーフデータオフィサー	組織のデータ戦略を統括し、データ活用を最適化

2. 前提・定義 ②職種・役割

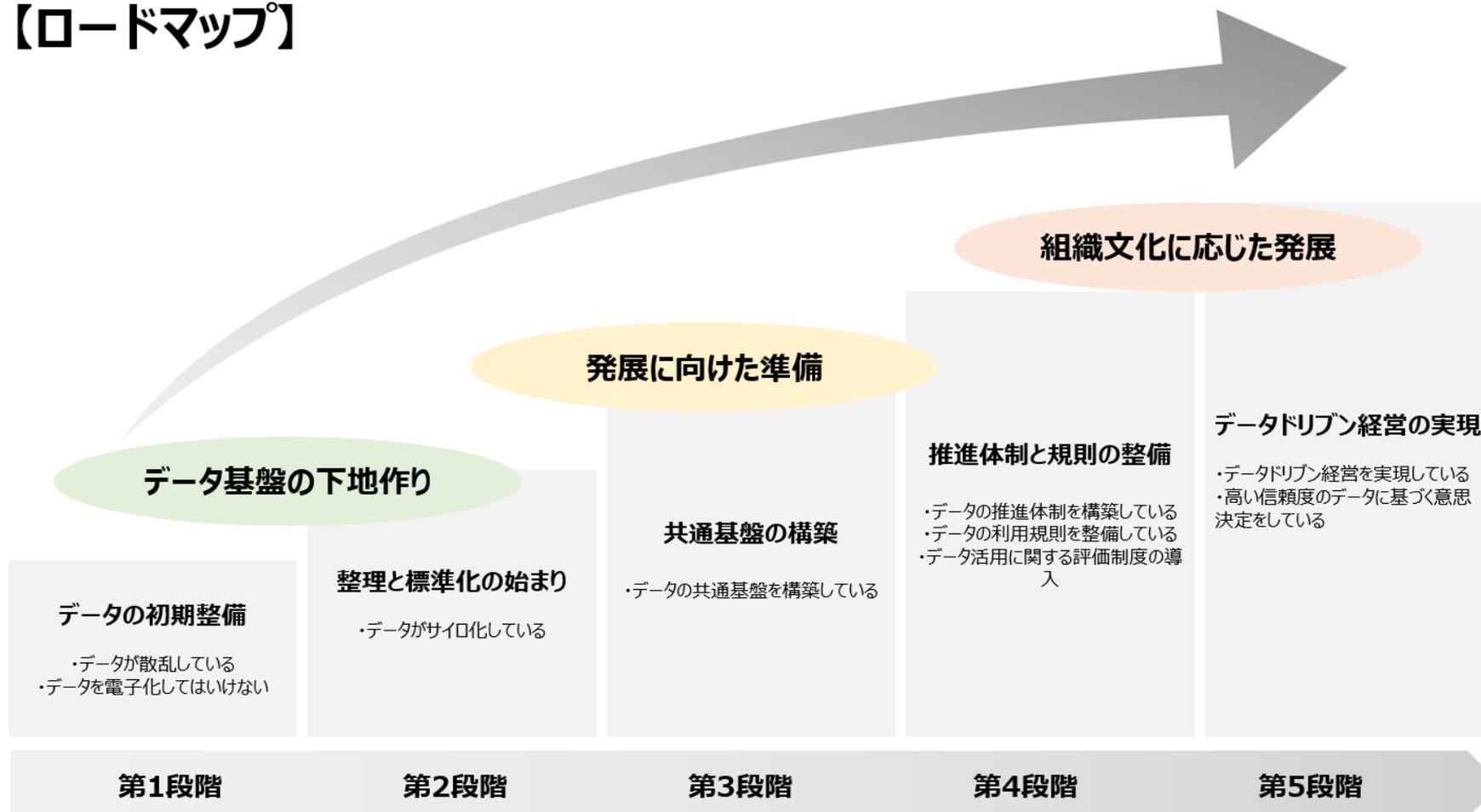
組織の成熟度段階に合わせてデータ利用者・データ提供者の各人材を育成、または異動・採用等の人事施策により確保することで、データドリブン経営の取り組みを推進



2. 前提・定義 ③ロードマップ

データドリブン経営の実現に向け、成熟度モデルの段階が上がる際の組織が取り組むべきテーマ・アクションを、ロードマップとして整理

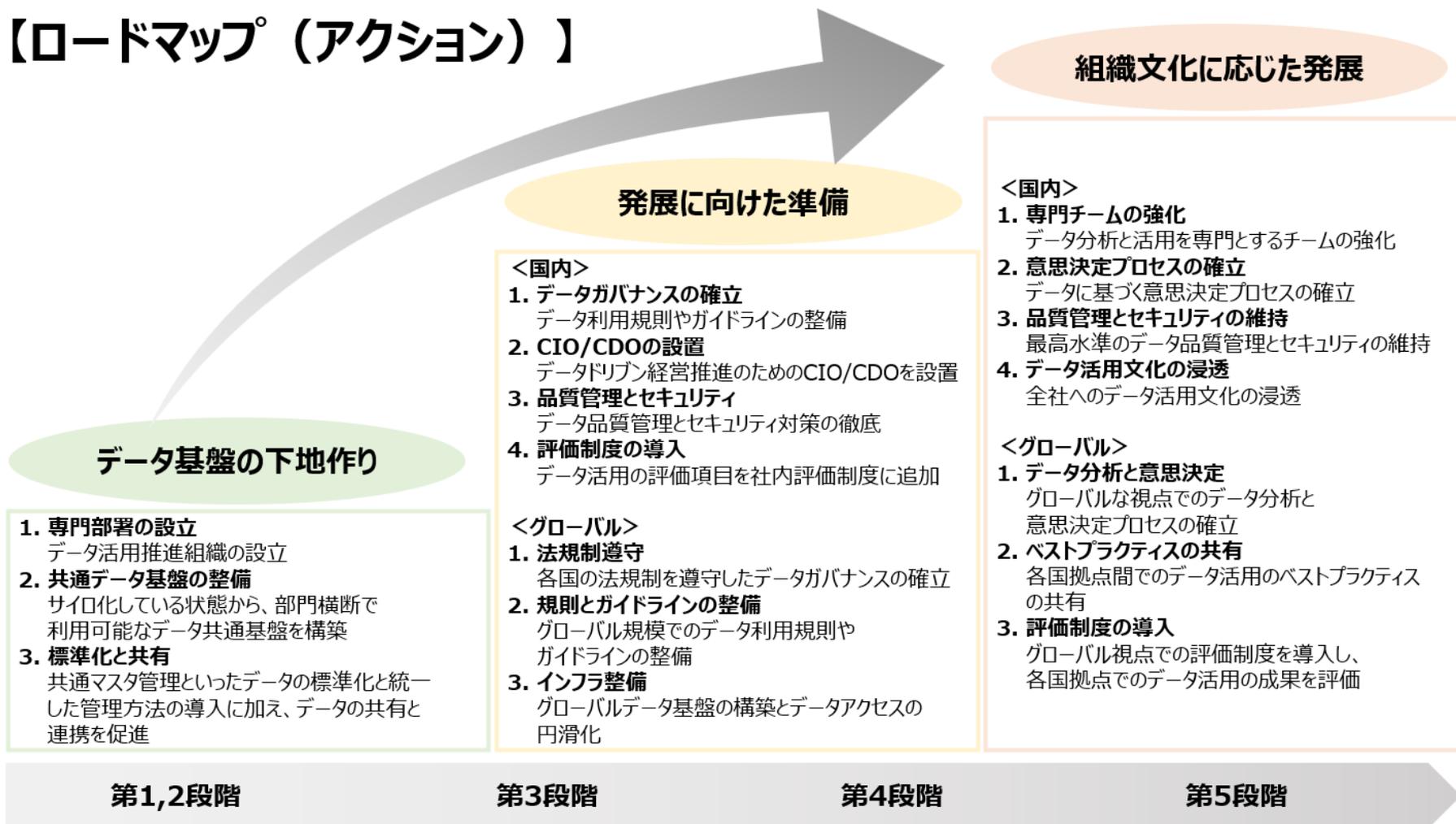
【ロードマップ】



2. 前提・定義 ③ロードマップ

前ページの各取り組みテーマの詳細アクションを整理

【ロードマップ（アクション）】



3. 示唆・提言 ①研究手法・ペルソナ

研究手法

1. 成熟度モデルをもとに、現状（AsIs）とあるべき姿（ToBe）を設定
 - 現状（AsIs） : 第2段階から第3段階への移行段階
 - あるべき姿（ToBe） : 第5段階
2. 現状とあるべき姿の組織としての差異から取り組むべき課題を推測
3. 課題に対して人材育成の観点から対応策を検討

組織構築

人材育成

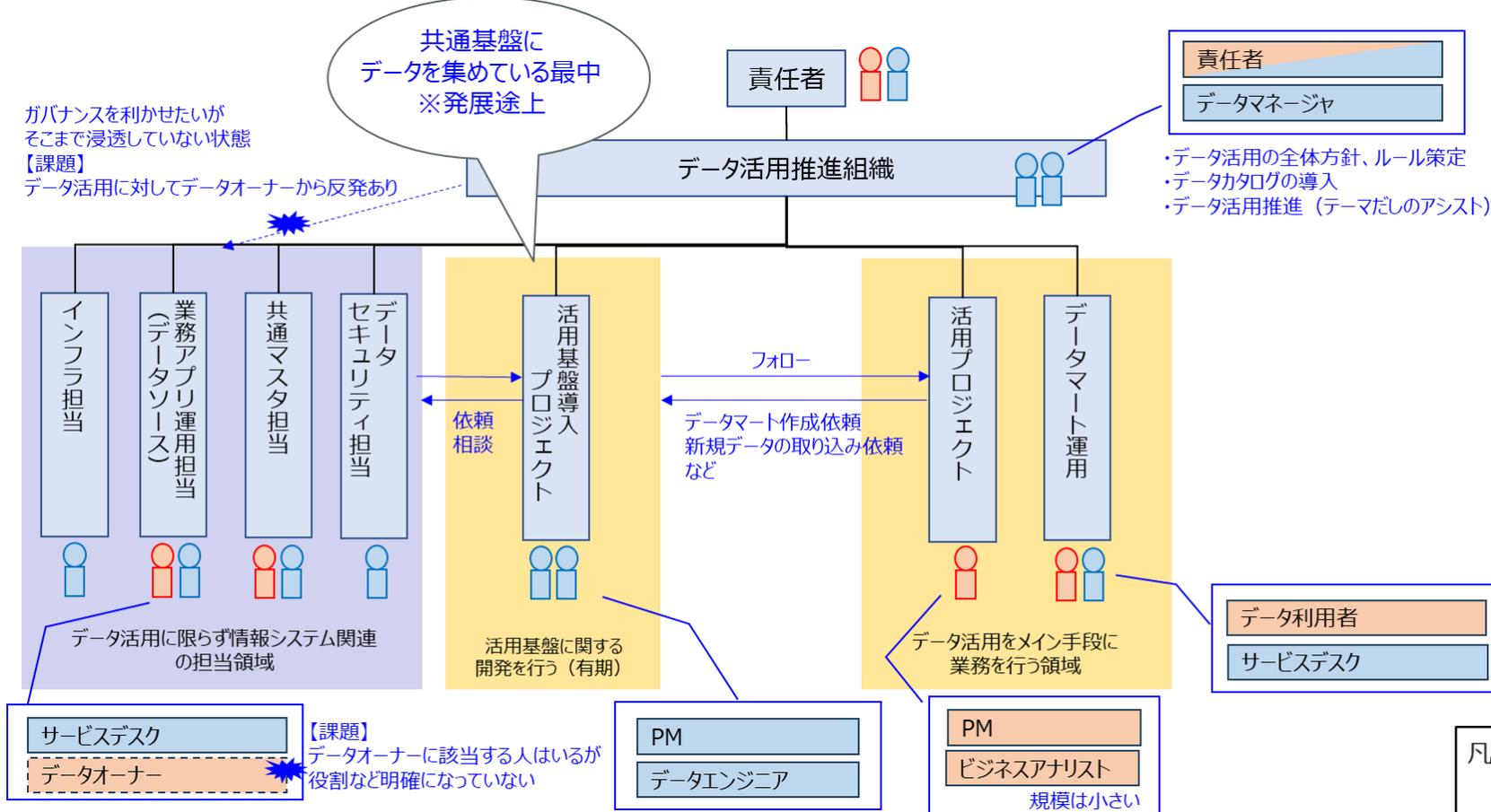
ペルソナ

- 規模：大企業
- 業界：グローバルに展開する製造業
- 現況：全社共通のデータ基盤の構築に着手
データ活用に必要なデータは社内存在

3. 示唆・提言 ②組織構築 現状（第3段階）

共通基盤の構築

- データ活用基盤構築導入プロジェクトの始動と同時に、データ活用の推進組織も開始
- データ活用推進組織により、データ活用の全体方針やガバナンスルールの検討・推進が開始
- 要件を踏まえ、各業務領域のデータを共通基盤へ集約する段階



状態：活用基盤を育成中

- 共通基盤の構築や推進組織は**情報システム部門が主導**
- データスチュワードは未機能
- データ活用推進組織はルール策定やカタログ作成に奔走
- データ活用の開始からまもなく、スキル保有人材が所属する組織では、既存の業務データをBIにて出力といった段階で活用が拡大
- 活用テーマの発案に支援が必要
- データサイエンティスト等の専門部署が必要なレベルに未到達
- 今後、活用基盤の主軸となるデータを収集後、プロジェクトが組織化（第4段階にてBI開発部署が発足）



3. 示唆・提言 ②組織構築 現状（補足）

各組織のデータ活用に関する取り組み状況

経営層には、従来型の業績・経営指標の報告を実施（手元でのExcel集計が主流）

1. 推進組織

会社全体のデータ活用に関する統括を目指し、各種ガバナンス方針の整理や現場でのデータ活用の後押しに着手

- データガバナンス（セキュリティ、権限管理などの最低限のものからスタート）に関する方針決めを担当
- データ活用に関する問い合わせ受け
- 全社視点でのデータ活用の浸透を企画（推進組織自体の高度化を含む）

2. データ活用組織

情報システム部門を中心とした推進組織の支援を得ながら、データを管理・活用

- データ活用に必要なスキルセットは限定的（アナリストやエンジニアの不足）
- データマネジメントの考え方の浸透が不十分（情報システム部門が実質的にデータオーナー、データ提供）
- 担当ビジネスのデータマートの運用を開始（自組織内のデータ活用が主流）
- 情報システム部門が既存業務の延長線上で全社共通のデータ基盤を構築

3. コミュニティ

- コミュニティは未開始、個人のイニシアチブで関係者を巻き込んでいる状況（属人的）
- データ基盤に関する問い合わせの窓口は情報システム部門が担当

【役割（グレーは未整備）】

責任者（マネジメントと連携）

データマネージャー

データサイエンティスト（現場支援）

データスチュワード（コンシェルジュ）

データエンジニア

ビジネスアナリスト

データオーナー

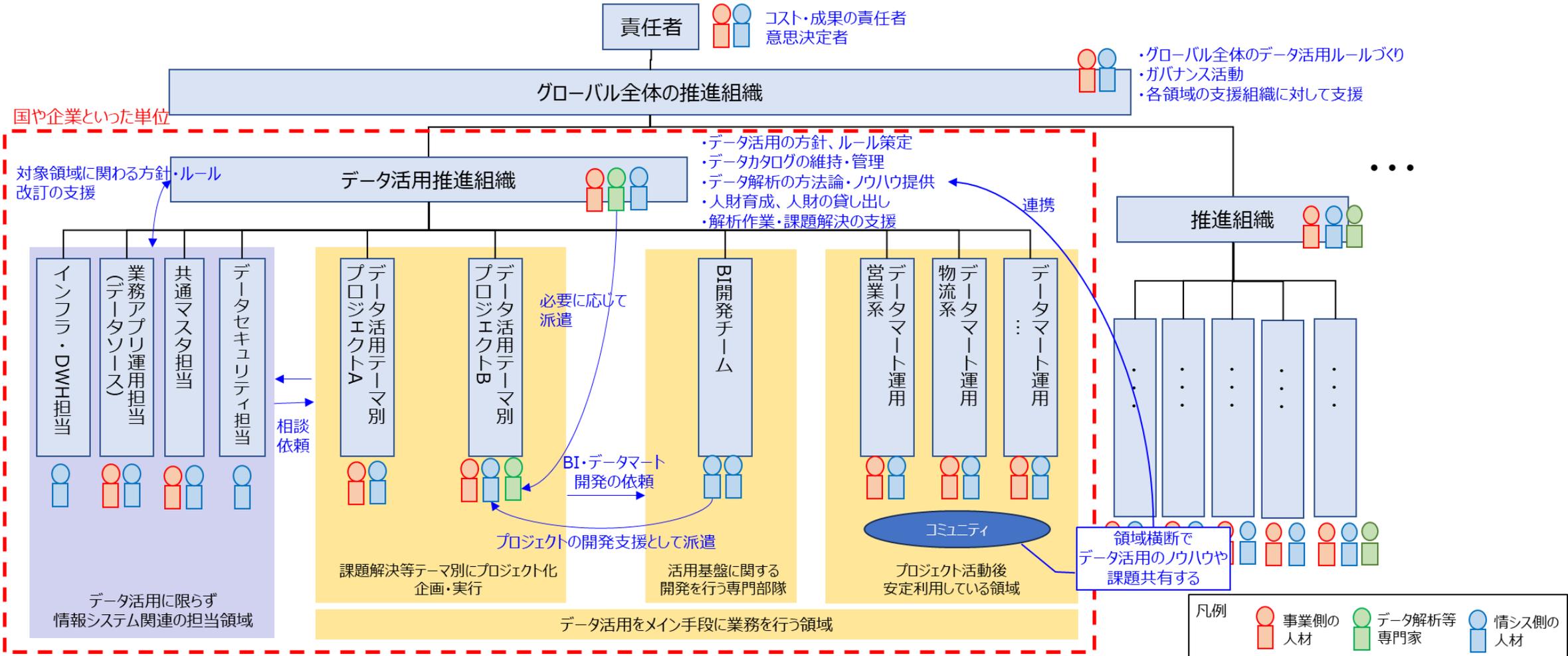
データサイエンティスト

サービスデスク

3. 示唆・提言 ②組織構築 あるべき姿（第5段階）

データドリブン経営の実現

- データ活用の推進組織によるデータ統治・活用を支援する体制により、データ活用案件やデータによるコミュニケーションの質・量が向上
- 事業側が主動してデータ活用を推進できている状態にあり、ビジネス現場での価値創造・価値向上に直結



3. 示唆・提言 ②組織構築 あるべき姿（補足）

各組織のデータ活用に関する取り組み状況

経営層においては、全社を俯瞰し迅速な意思決定が可能

1. 推進組織

データ活用に関する全体統括が「推進組織」にてコントロールされている（各種ガバナンス方針を整備し、データ活用を後押し）

- データガバナンス（セキュリティ、権限管理、開発標準など）に関する全社方針決定
- データ活用に関する問い合わせ対応（コンシェルジュ的）
- 全社視点でのデータ活用の高度化（推進組織自体の高度化や機能の追加
例：社外へのデータ販売）

2. データ活用組織

全社の方針に従い、各組織で自律的にデータを管理・活用

- データ活用に必要なスキルセットを具備（自組織内で人材の維持・獲得を判断）
- データマネジメントのプロセスへの理解（データオーナーの明確化、データのサイロの除外）
- 担当ビジネスのデータマートを運用・管理（データ品質の担保などを分散型にて管理）
- 分析したいデータへのスムーズなアクセス（データスチュワードとのコミュニケーション）
- 分析テーマに応じた現場レベルでの柔軟なプロジェクトの開始

3. コミュニティ

- 現場レベルで組織を横断したコミュニケーションとスキルアップ
- ボトムアップでの課題提起・解決の仕組みを構築

【役割（黄色は第3段階との差）】

責任者（マネジメントと連携）

データマネージャー

データサイエンティスト（現場支援）

データスチュワード（コンシェルジュ）

データエンジニア

ビジネスアナリスト

データオーナー

データサイエンティスト

サービスデスク

3. 示唆・提言 ②組織構築 総括

組織の現状のあるべき姿の差異から、データドリブン経営の実現に向けて取り組むべき課題を下記のとおり抽出

データ利用者に関する課題

- 事業側のデータ活用においてはデータの可視化（BI化）のみならず、大量データの処理、高度なデータ分析・AI活用や様々なデータを掛け合わせて活用するような、**多様な要件に対応するスキル**が必要

データ提供者に関する課題

- データ活用の推進組織は事業側の支援に向け、**データスチュワード**（データを理解しているコンシェルジュ）や**データサイエンティスト**を設けるための人材確保が必要
- 事業側での**自律的なデータ活用**（**データ基盤の活用**や**高度な分析等**）を**支援・推進**するプロジェクトチームを、機動的に組成できる**スキル・人材のプール**が必要
- データガバナンスの諸施策を展開し、**データオーナー**の役割への理解や、組織の垣根を超えた新たなデータの利用に対する合意がとりやすい社内環境が必要

3. 示唆・提言 ③人材育成

育成手法（抜粋）

名称	概要	特長
ハッカソン （ハック+マラソン）	短期間で集中的にアイデアを出し合いアプリやシステムを開発	<ul style="list-style-type: none">• 新しいアイデア、技術の発見• 社内連携の強化• スキルの向上、問題解決能力の向上
クロスインダストリー トレーニング	異なる業界や分野の知識やスキルを学習	<ul style="list-style-type: none">• 多角的な視点の獲得、業務への新たな視点の導入• 他業種との交流によるビジネスチャンス、コラボレーション機会の創出
エグゼクティブコーチング	経営層・リーダー層を対象にした個別コーチングプログラム	<ul style="list-style-type: none">• リーダーシップの強化による意思決定能力の向上• 効率的なリーダーシップの発揮• 組織全体のパフォーマンスの向上



3. 示唆・提言 ③人材育成 総括

役割・スキルの段階的成長

- すべての職種において、初期段階では基礎的な業務や技術の習得から開始
- 成熟度の移行につれ、より戦略的かつ高度なスキル（コミュニケーション、リーダーシップ）が必要
→ 第3段階以降は、データ分析やビジネス活用をはじめとする組織全体での取り組みが必要

社内育成と外部採用の比重

- 初期段階では基本的に社内育成が中心
- 後期段階では外部採用（即戦力）も有効

リーダーシップの重要性

- すべての職種において、最終段階では戦略的な視点およびリーダーシップが必要
→ 組織全体に対する高い影響力を期待

データガバナンスの重要性

- すべての職種において、データの品質向上および組織間共有の構築・促進が必要

4. 結論 — 仮説への考察と活動の課題・所感

仮説への考察

1. データ活用の文化醸成に向け、スキルを持つ人材の増加は必須である一方、持続的な実践と発展を実現させるため、その人材を支援する組織の仕組み（＝組織設計）が必要
2. 当該組織の構築において、現場データの収集から経営の意思決定までの流れを可視化することで、各組織に求められる役割の定義が可能
3. 組織の役割・責任範囲を定義することで、従来の延長線上にない「データ活用」に人材・予算・技術を配分する動きに連結
4. 各組織の方向性と各社員の役割・責任が明確化することで、個人ではデータ活用による企業価値の向上に対する貢献意識が強まるとともに、さらなるキャリアパスやスキルアップを目指す、前向き・自律的な動きが発生

→ **データを軸に「IT」と「ビジネス」を融合する動きが加速**



4. 結論 — 仮説への考察と活動の課題・所感

活動の課題

1. 「組織構築」と「人材育成」の議論にチーム制を取り入れたことで、各主題での迅速な役割分担が実現した一方、分科会の最終的な意見集約や合意形成に時間が発生
→ チーム制ではペルソナの認識を一層徹底し、共通の研究領域のもと議論を集結
2. 先端技術（機械学習・生成AI）を活用した組織構築や人材育成の手法は未検討
→ 他分科会の研究内容や業界の最新動向をもとに、具体的な活用の余地を検討

活動の所感

1. メンバーの業種（卸売、食料品、情報・通信、鉄鋼、電気・ガス、電気機器）により社内事例も多様であり、特に制度化が進んでいる企業を参考に成熟度モデルを考察・検討
→ 「データ提供者」、「データ利用者」、「経営層」を軸に、独自性の高い研究を展開
2. 「組織構築」のあるべき姿からどのような職種・役割が必要であるかを議論したことで、「人材育成」のあるべき姿（＝成熟度モデルの各段階における育成手法）を具体化
→ 今後は組織のあるべき姿を念頭に、今回の研究内容を各社の人材育成で実践

5. 参考文献

Webサイト

- Data Orchard, “Data Maturity Assessment Tool”,
<https://www.dataorchard.org.uk/data-maturity-assessment-tool>
(2024年12月 参照)

ご清聴ありがとうございました

2024年度JUASビジネスデータ研究会 第四分科会

データドリブン経営のすゝめ

2025年3月26日
ビジネスデータ研究会

分科会参加者

多様な業界・業種のメンバーから構成

人数は少なめ、でも、転職経験者複数につき議論の視点としては人数 + a分

大類 香穂里

ITサービス

アルファテックス株式会社

業務サービス

青木 淳

航空・運輸

株式会社JALインフォテック

ITサービス

安原 佑真

公共・金融

独立行政法人住宅金融支援機構

情報戦略

篠原 悠久子

鉄道・運輸

東日本旅客鉄道株式会社

データサイエンス

須田 一哉

ITサービス

株式会社エクサ

データサイエンス

森本 敏夫

ITコンサルティング

アイエックス・ナレッジ株式会社

オブザーバー
市川 康平
株式会社 プライド

テーマ選定理由

背景

- 現代の企業において、競争力を維持するために、**データを活用した意思決定**が重要
- 大企業所属のメンバーが多く、**経営層を動かすにはどうしたらいいか**、という問題意識あり

課題意識

第一歩として、**自社のデータドリブン経営度合（自社の強みと弱み）を把握**してもらう必要がある

テーマ決定

本分科会では、以下の2つの問いを掘り下げていくことにした

- ① データドリブン経営度合を把握するにはどうしたらいいか
- ② データドリブン経営にはどのような要素が必要となるか

この議論を通じて「**データドリブン経営のすゝめ**」を本分科会の研究テーマにした

研究結果

そもそもデータドリブン経営とは？

一般的な定義

データドリブンとは、データに基づいて戦略策定、計画立案、ビジネスの意思決定などを行うことを指し、そういったことが広く定着している組織による経営を、「データドリブン経営」と定義している。

(出典)Gartner社 : <https://www.gartner.co.jp/ja/newsroom/press-releases/pr-20220617>

分科会における定義

経営者・従業員の関係性に着目

経営者が従業員に対してリーダーシップをとって、
データ収集から意思決定までのプロセスを回し続けることで、
短期的な意思決定（現在）から中長期の計画策定（将来）まで実施する経営

データ収集

データ分析

分析結果の
可視化

意思決定

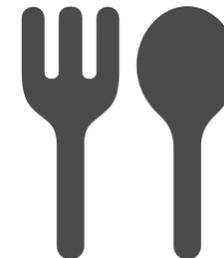
データドリブン経営が実践できているとはどういう状態か

データドリブン経営ができている実例を収集

外食業界 A社

- 全体売上の98%がデジタル経由（モバイルオーダー等）
- 店舗内のオペレーションも全てデジタルで可視化（提供速度、良品率等）

⇒膨大なリアルタイムデータを会社の意思決定に反映して売上増（リピーター率80%）



旅行業界 B社

- 年間利用100万円以上のヘビーユーザーに関するデータ収集及び分析を徹底的に実施
- ユーザー属性、利用実績、サイト内での行動等に応じたリコメンド（値下げ、アップグレード等）

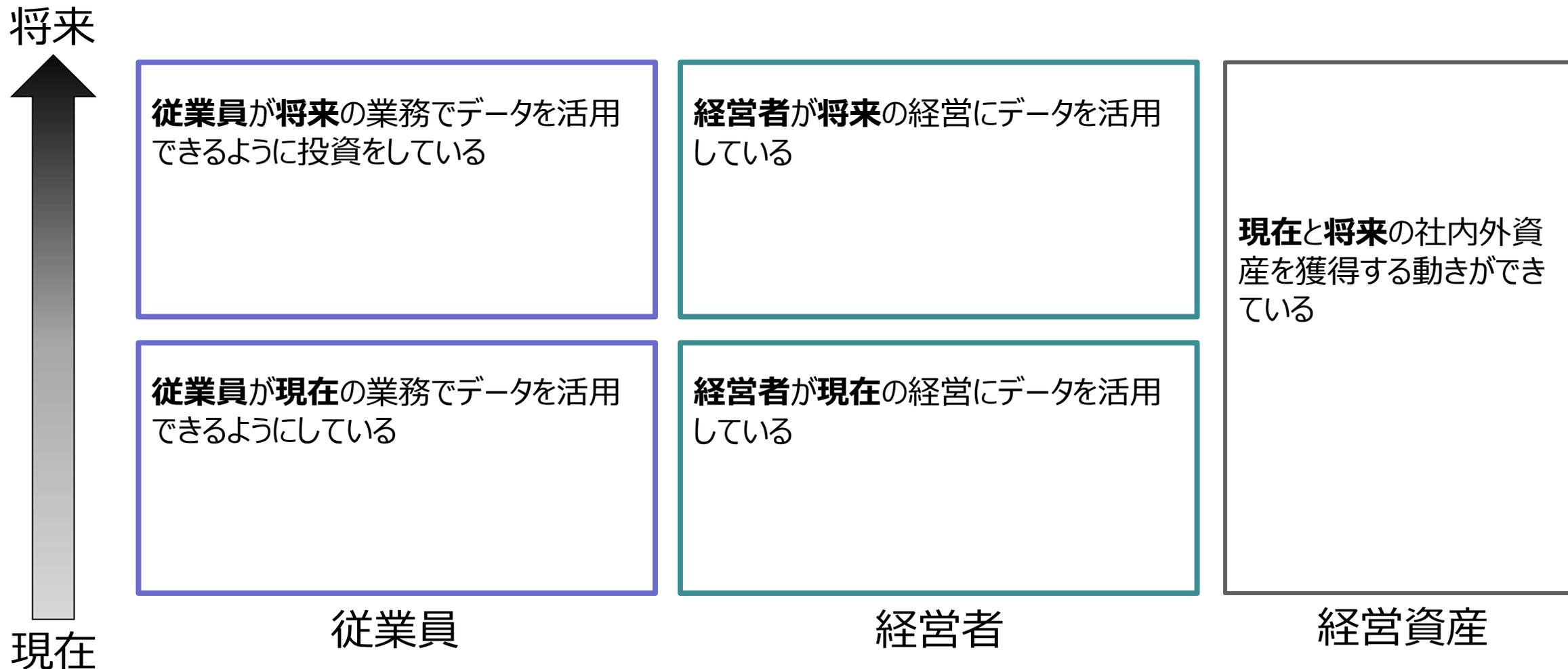
⇒データに基づく顧客単位でのアプローチを全社で仕組化して売上増（リピーター率90%）

実践できている企業に共通した要素

経営者自らがデータを活用、データに基づいた経営方針の決定、
従業員の誰もがデータにアクセスできる環境への投資、データ人財の重視……など多数

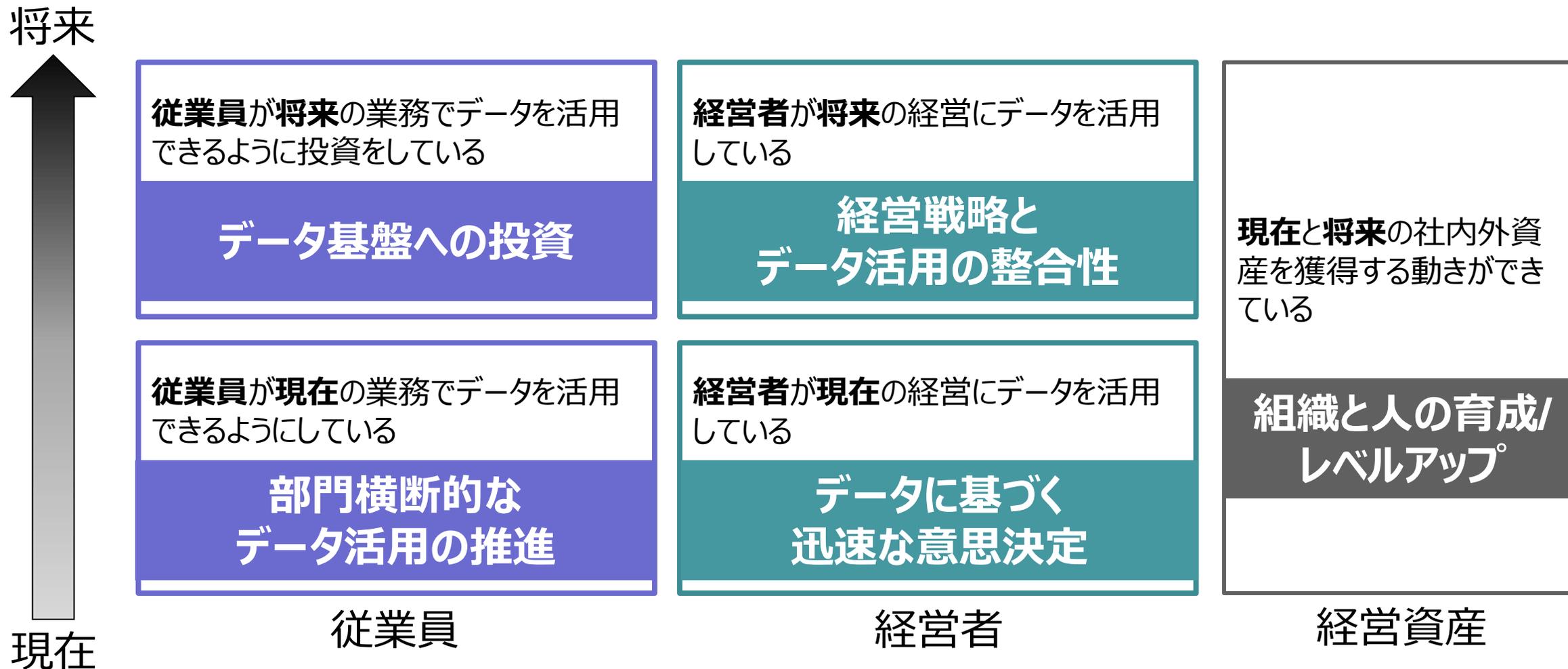
データドリブン経営が実践できているとはどういう状態か

「データドリブン経営が実践できている会社」に共通した要素を複数軸で整理

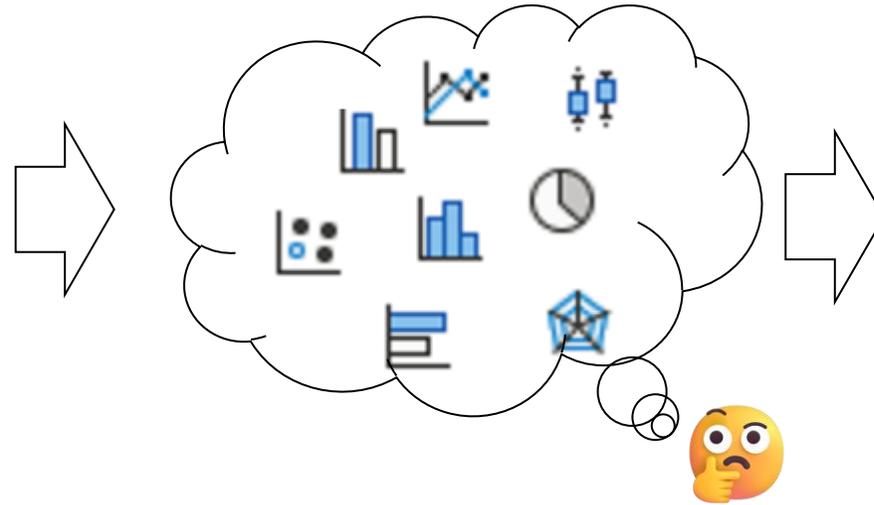


データドリブン経営が実践できているとはどういう状態か

これらは何をもって達成したといえるのかを分科会内で再定義



データドリブン経営成熟度を測定する



データドリブン
経営成熟度
測定シート

質問文作成の観点

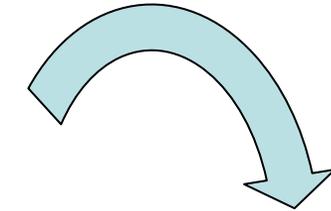
- ・ 経営者への質問（経営者が関与できる内容）
- ・ **Yes/No形式**
- ・ 各項目5つの質問文（ $5 \times 5 = 25$ の質問）
- ・ 回答者の性格や恣意性が影響しないよう、**客観的に判断できる**質問
- ・ 質問間の**独立性**

議論やブレスト、各自でLLMなども活用し精査、項目を取捨選択し作成

結果の集計: レーダーチャート化

項目	質問内容	回答	スコア	弱点
経営戦略とデータ活用の整合性	1. データに基づいた分析結果が、経営戦略の改善案に反映されたことはありますか？	yes	4	
	2. 過去1年以内にデータ活用戦略を文書化し、経営会議で正式に承認されましたか？	yes		
	3. データに基づく戦略の効果を、年に1回以上評価していますか？	yes		
	4. データ基盤構築・維持更新や、データ分析人材獲得・育成に向けた投資計画は、中長期の経営計画において具体的な数値を設定していますか？	yes		
	5. 自社のデータ活用施策を評価する際に、同業他社との比較も行っていますか？	no		
データに基づく迅速な意思決定	1. 過去1ヶ月間で、データ分析結果を受けて日々の経営における意思決定を実施した事例が複数ありますか？	yes	5	
	2. 経営会議で、データに基づく複数の選択肢を比較検討し、その場で意思決定を行う習慣がありますか？	yes		
	3. 予期せぬ事態（例：急激な需要変動、サプライチェーンの混乱）が発生した際、迅速にデータ分析に基づく対応策を決定できていますか？	yes		
	4. 日々の売上や顧客動向などの変化を、AI等を用いて自動的に検知し、即座に経営陣に通知する仕組みがありますか？	yes		
	5. データ分析結果に基づく意思決定の正確性と速度を、定期的に評価・改善するプロセスがありますか？	yes		
部門横断的なデータ活用の推進	1. 各部門はデータとその仕様書をセットで保持していますか？	yes	3	
	2. 3つ以上の部門が参加する部門横断的なデータ分析プロジェクトが、現在進行中ですか？	yes		
	3. データ仕様書やAPIが整備されていて、他者または他部門に対してデータの扱い方のレクチャーは不要ですか？	no		
	4. データの共有や利用に関する社内ガイドラインが整備されていますか？	no		
	5. 同じデータが、別のシステムで異なる内容で保存されていることはありませんか？	yes		
組織と人の育成/レベルアップ	1. 全従業員を対象としたデータリテラシー研修はありますか？※データリテラシー研修とは、「データを理解する力」「データを伝える力」「データを分析する力」「データを活用する力」についての研修を指します。	no	2	○
	2. データ人材に対する待遇の差別化ははかっていますか？例：個別の給与テーブルを採用、ITの資格に対する手当の導入、服装自由・テレワーク・フレックス制度の導入など	no		
	3. 自社に必要なデータ人材のスキルセットは整理されており、社内教育やデータ人材の新規採用に参照されていますか？	no		
	4. データ活用による業務改善を提案・実行した社員を評価・表彰する全社的な制度はありますか？	yes		
	5. データ分析の専任チームが社内外（分社化等）に設置されていますか？	yes		
データ基盤への投資	1. データを蓄積・分析するための仕組み※は社内存在していますか？	yes	3	
	2. 現在保有しているデータを蓄積・分析するための仕組み※は拡張性や柔軟性に富んでおり、将来的な需要変動に迅速に応じることはできますか？	no		
	3. データを蓄積・分析するための仕組み※について、社内で年1回以上の議論をする場が設けられ、社員の要望を把握できていますか？	yes		
	4. 業界や他社の動向を踏まえた外部情報（年次調査、レポートなど）を参考に、データを蓄積・分析するための仕組み※の更新・強化の検討が社内で年1回以上の頻度で行われていますか？	no		
	5. データを蓄積・分析するための仕組み※を評価する指標（ユーザ利用率、データ活用度、I/O速度など）は投資計画を練る際に参照されていますか？	yes		

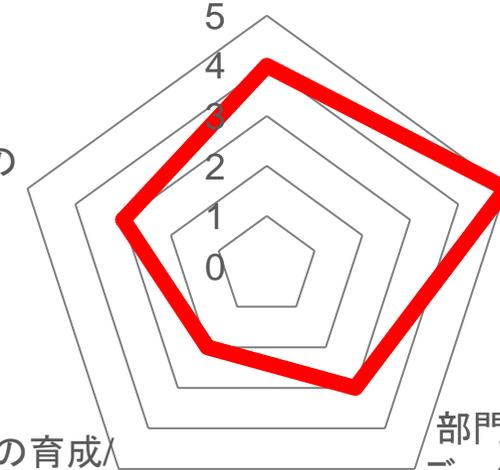
※ データ基盤、BIツールなど。データ提供側や利用側などが納得できるのであれば表計算ソフトウェアによる管理も可。



データドリブン経営成熟度スコア
経営戦略とデータ活用の整合性

データ基盤への投資

データに基づく迅速な意思決定

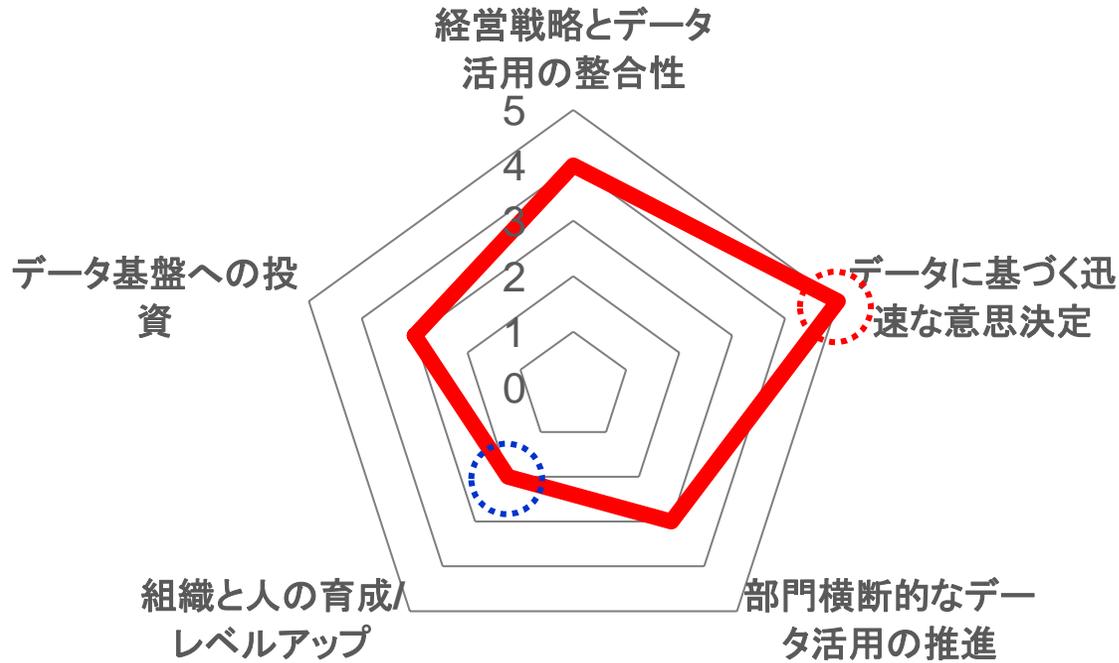


組織と人の育成/レベルアップ

部門横断的なデータ活用の推進

自企業の強み・弱みをレーダーチャートを使って可視化する

データドリブン経営成熟度スコア



この例では、経営者がデータドリブン経営を積極的に推進する一方、その文化が組織全体に浸透できていない可能性も示唆される

- このチャート結果からは、
データに基づく迅速な意思決定に強みがあるが、
組織と人の育成/レベルアップや
データ基盤整備といった、HW/SWへの投資に課題
 があることが視覚的に確認できる
- 詳細を参照しながら原因と解決策について議論を深める

No	質問	原因	解決策		
1	各部門はデータとその仕様書を セットで保持 していますか？	部門間でのデータ共有意識の低さ・サイロ化	横串組織の構築によるデータの横展開を推進する		
2	3つ以上の部門 が参加する部門トが、現在進行中ですか？	No	質問	原因	解決策
3	データ仕様書やAPIが整備されてデータの扱い方の レクチャー は、	1 データを蓄積・分析 するための仕組み [*] は社内存在していますか？	データを蓄積・分析するための仕組み [*] は社内存在していません	データを蓄積・分析するための土壌そのものがない	(まったく存在しない場合、) ビジネス課題を解決するためのデータ及びそれを支えられる基盤について検討する
4	データの共有や利用に関する 社ですか？	2 現在保有しているデータを蓄積・分析するための仕組み [*] は拡張性や柔軟性に富んでおり、 将来的な需要変動 に迅速に応じることができますか？	現状しきの古いデータ基盤でやり繰りしている状態	商機を逃さないためにも、拡張性や柔軟性が考慮された環境を整備する	
5	同じデータが、 別のシステムで 異ありませんか？	3 データを蓄積・分析するための仕組み [*] について、社内 で年1回以上 の議論をする場が設けられ、社員の要望を把握できていますか？	指標として表に出にくい要望をキャッチアップできない	実際にデータ活用に従事している社員たちと定期的に交流する場を作る	
		4 業界や他社の動向を踏まえた外部情報(年次調査、レポートなど)を参考に、データを蓄積・分析するための仕組み [*] の更新・強化の検討が社内 で年1回以上の頻度 で行われていますか？	社外動向への関心不足	競争力維持のため、定期的な調査機会を設ける	
		5 データを蓄積・分析するための仕組み [*] を 評価する指標 (コスト利用率、データ活用量、I/O速度など)は投資計画を練る際に参照されていますか？	データの蓄積・分析の仕組みを社内外で比較評価するという意識がない	一般的に使用される定量的な評価指標を洗い出し、投資計画の策定時に参照する	

部門横断的なデータ活用の推進

全社的にデータ収集と管理ができている
いわゆるDWHなどハードウェア的な環境の有無ではなく、データ自体の整備状況が全社的に統一されている状態

No	質問	原因	解決策
1	各部門はデータとその仕様書を セットで保持 していますか？	部門間でのデータ共有意識の低さ・サイロ化	横串組織の構築によるデータの横展開を推進する
2	3つ以上の部門 が参加する部門横断的なデータ分析プロジェクトが、現在進行中ですか？	縦割り組織、経営層のサポート不足	部門横断的なデータ活用プロジェクトの立ち上げと、成功事例の全社共有を実施する
3	データ仕様書やAPIが整備されていて、他者または他部門に対してデータの扱い方の レクチャーは不要 ですか？	業務多忙、セキュリティや制約、動機不足、複雑すぎる	経営層などによるトップダウンの部門横断施策を推進する
4	データの共有や利用に関する 社内ガイドラインが整備されていますか？	過度なセキュリティやプライバシーの懸念	データ共有に関する社内ガイドラインを策定する
5	同じデータが、 別のシステムで異なる内容 で保存されていることはありませんか？	マスターデータの不在	一貫したデータ管理のためのシステムを企業全体で導入することで、データの品質と整合性を確保する

データ基盤への投資

全社的なデータ収集・蓄積・分析を行うためのデータ基盤やツールなどが過不足なく提供されている
経営戦略に影響する分析を多面的に行うための、DWHやツールなどへ投資を行っている状態

No	質問	原因	解決策
1	データを蓄積・分析するための仕組み※は社内には存在していますか？	データを蓄積・分析するための土壌 そのものがない	(まったく存在していない場合、) ビジネス課題を 解決するためのデータ及びそれを支えられる基 盤について検討する
2	現在保有しているデータを蓄積・分析するための仕組み※は拡張 性や柔軟性に富んでおり、 将来的な需要変動 に迅速に応じるこ とはできますか？	現状しのぎの古いデータ基盤でやり 繰りしている状態	商機を逃さないためにも、拡張性や柔軟性が 考慮された環境を整備する
3	データを蓄積・分析するための仕組み※について、社内で 年1回 以上 の議論をする場が設けられ、社員の要望を把握できていま すか？	指標として表に出にくい要望をキャッ チアップできない	実際にデータ活用に従事している社員たちと定 期的に交流する場を作る
4	業界や他社の動向を踏まえた外部情報（年次調査、レポートな ど）を参考に、データを蓄積・分析するための仕組み※の更新・強 化の検討が社内で 年1回以上の頻度 で行われていますか？	社外動向への関心不足	競争力維持のため、定期的な調査機会を設 ける
5	データを蓄積・分析するための仕組み※を 評価する指標 (ユーザ利 用率、データ活用度、I/O速度など)は投資計画を練る際に参照され ていますか？	データの蓄積・分析の仕組みを社内 外で比較評価するという意識がない	一般的に使用される定量的な評価指標を洗 い出し、投資計画の策定時に参照する

※ ここではデータ基盤、BIツールなどを指す。費用対効果／利用実績によっては表計算ソフトウェアによる管理も含む。

データに基づく迅速な意思決定

データに基づいた意思決定に対し、迅速に評価、改善、実行サイクルを回している
データ分析による意思決定プロセスが、臨機応変かつ迅速に実行され、評価されている状態

No	質問	原因	解決策
1	過去1ヶ月間で、データ分析結果を受けて日々の経営における意思決定を実施した事例が複数ありますか？	迅速なデータ分析と意思決定のプロセスが確立されていない	緊急時の意思決定フローを整備し、データ分析から判断までの時間を短縮する訓練を行う
2	経営会議で、データに基づく複数の選択肢を比較検討し、その場で意思決定を行う習慣がありますか？	データを活用した意思決定の具体的な方法が浸透していない	経営会議の進行方法を見直し、データに基づく選択肢の比較と即時の意思決定を標準化する
3	予期せぬ事態（例：急激な需要変動、サプライチェーンの混乱）が発生した際、迅速にデータ分析に基づく対応策を決定できていますか？	緊急時のデータ分析と意思決定の体制が整っていない	緊急事態シミュレーションを定期的を実施し、迅速なデータ分析と意思決定の訓練を行う
4	日々の売上や顧客動向などの変化を、AI等を用いて自動的に検知し、即座に経営陣に通知する仕組みがありますか？	リアルタイムでのデータ監視や自動通知の仕組みが整備されていない	AIを活用した異常検知を導入し、重要な変化を即座に経営陣に通知する仕組みを構築する
5	データ分析結果に基づく意思決定の正確性と速度を、定期的に評価・改善するプロセスがありますか？	データに基づく意思決定プロセスの継続的な改善の仕組みがない	意思決定の速度と精度を定期的に検証し、改善点を洗い出す会議を四半期ごとに開催する

経営戦略とデータ活用の整合性

データ分析の結果に基づいた意思決定が行われている

データ分析結果が経営層に正しく伝達、経営戦略に反映されている状態。また、その効果を分析できている状態

No	質問	原因	解決策
1	データに基づいた分析結果が、 経営戦略の改善案 に反映されたことはありますか？	データ分析の結果と経営戦略が つながっていない	データ分析から得られた結果を 経営戦略に組み込むプロセスを構築する
2	過去1年以内 にデータ活用戦略を文書化し、経営会議で正式に承認されましたか？	データ活用戦略が重要視されていない、または戦略化ができていない	会社全体でのデータ戦略策定タスクフォースの 設立とワークショップを実施する
3	データに基づく戦略の効果を、 年に1回以上 評価していますか？	効果測定の方法が確立されていない、または定期的なレビューが行われていない	戦略のKPIを再確認または設定し、 効果測定対象を明らかにする
4	データ基盤構築・維持更新や、データ分析人材獲得・育成に向けた投資計画は、中長期の経営計画において 具体的な数値 を設定していますか？	データ活用の具体的な成功事例や 費用対効果が経営陣に十分に示されていない	データ活用の成功事例や費用対効果について、 経営陣もふくめた全社的に情報共有する
5	自社のデータ活用施策を評価する際に、 同業他社との比較 も行っていますか？	施策の評価を客観的に評価する 動機が弱い	定期的に他社事例を調査し、 評価、分析を行う

組織と人の育成/レベルアップ

全社的に収集したデータを分析する能力がある
企業文化などの組織醸成や、人材の採用/育成において、データ分析を志向している状態

No	質問	原因	解決策
1	全従業員を対象 としたデータリテラシ研修はありますか？ ※データリテラシ研修とは、「データを理解する力」「データを伝える力」「データを分析する力」「データを活用する力」についての研修を指します。	データドリブンに対する重要度の認識が低い	データ利活用のトレンドや成功事例をインプットし、データドリブンの重要性を認識する
2	データ人材に対する 待遇の差別化 をはかっていますか？ 例：個別の給与テーブルを採用、ITの資格に対する手当の導入、服装自由・テレワーク・フレックス制度の導入など	データ人材を維持・確保することの重要性を認識していない	データの利活用による効果を定量的に算出し、スキルを持つデータ人材を採用したときの投資効果を試算する
3	自社に必要な データ人材のスキルセット は整理されており、社内教育やデータ人材の新規採用に参照されていますか？	データ分析で何をやりたいか、課題が明確になっていない	現在の自社におけるデータ利活用の課題および今後の戦略の棚卸を行い、自社に必要な人材像を設計する
4	データ活用による業務改善を提案・実行した社員を 評価・表彰する全社的な制度 はありますか？	データ利活用を推奨する風土が醸成されていない	データドリブン経営を積極的に取り入れている他社事例を経営層へインプットし、データ利活用による利点を理解させる
5	データ分析の専任チーム が社内外（分社化等）に設置されていますか？	データ分析チームの役割が明確になっていない	現在の自社におけるデータ利活用の課題および今後の戦略の棚卸を行い、実現のためのロードマップを作成する

経営者へのアンケート結果 A社

アンケート自体への感想：

「データ活用戦略」「データ分析人材」「データリテラシ」など、当社事業では聞きなれない言葉が出てきた時に、当社なりの解釈をして回答しているが、**回答者の前提がそろいにくい**のではと想像する。データドリブン経営がどういうものか**感覚的にしか捉えていない**中の回答になる。

アンケート結果に対する所感：

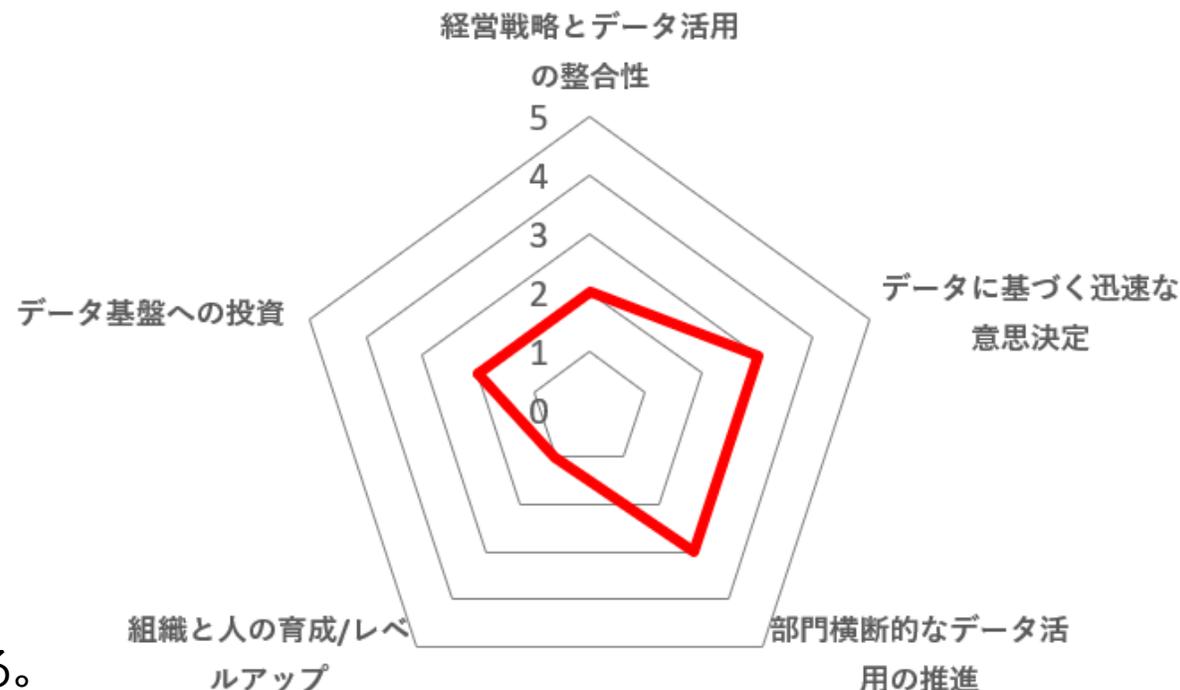
組織と人の育成・レベルアップについて、注力して取り組んでいますが、データドリブン経営やデータ活用戦略、分析人材などに限定した、組織的な育成策は打っていません。

データにアクセスできる環境の整備はしているけれど、それを活用する人のスキルとマインドに対する取り組みが低い。という受け止めをしています。

気づかされた点：

データドリブン経営についての事前説明が不足していたと感じる。アンケートに回答してもらう前に用語の解説が必要だったと思われる。

データドリブン経営成熟度スコア



研究を通しての気づき、課題、所感等

テーマ設定の難しさ

- ・データドリブン経営の理想像の明確化
- ・曖昧性を持つ用語の定義づけ
- ・研究のゴールの共通認識化

結果をどう出すか・どう見せるか

- ・表現方法の検討（フローチャート、マトリックス図なども検討）
- ・質問の軽重がばらばらにならないように留意
- ・主観が入る質問の除外（定量的な評価軸に限定）

対症療法でない解決策の提示

- ・ともすると、質問＝原因＝解決策の安易な対応となりがち
- ・原因療法を提示するための質問項目の検討に研究の多くの時間を割いた

課題

- ・様々な経営者に対して実際にインタビューすることによる、原因と解決策の有効性のさらなる検証と精度の向上
- ・本成果物は一人の経営者に向けた構成としているが、組織内で所管が複数人数にわたるケース（人材教育はA部長、基盤整備はB室長、など）への適用性の検討
- ・検討の結果、自社には合わないため採用しなかった、というような、イレギュラーなパターンへの適用方法は未議論
- ・実証を通じた原因と解決策の妥当性の向上

研究結果のまとめ

本分科会では「**データドリブン経営のすゝめ**」として**データドリブン経営成熟度測定シート**を作成した

このシートは経営者に25の質問に答えてもらうことで

- **データドリブンの観点から見た企業の強み・弱みをレーダーチャートで可視化**
- **特定した弱みの原因と解決策を提案** を行うツールである

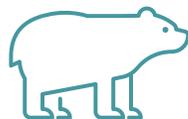
データドリブンな企業の特徴を調査・整理し抽出した要素について、客観的に回答可能な質問に答えることにより、自社の強化ポイントを明確化できる
これにより、効果的かつ効率的に**データドリブン経営**を実現できると考えている

ただし、

提案するシートは、本分科会の参加者の知見の集合体であり、さらに広い知見を取り入れ、ブラッシュアップしていくことでより完成に近づいていくものと考えます！

Appendixにブラッシュアップのための一案を提示しています

メンバーが感じたこと



アンケートを作成し、改めてデータ活用の重要性と自社の現状を見つめ直す機会になった。自社はまだデータドリブン経営の途上にあるが、アンケートを通じて課題を可視化し、少しずつでも改善につなげていきたいと感じた。

「データドリブン経営」の意味を深く考え直すよい機会になった。言葉にすると一言だが、対象者や会社規模によってもその意味するところが変わりうることを研究を通して実感した。どういった状態であるべきかを明確化できていないと、質問の形に落としこめないうえ、あいまいな部分を議論をとおして、自分なりにクリアにしていくことができたように思う。



原因も解決策も可能性が様々考えられるため、難しかった。今回上げた解決策がどこまで有効なのか、そもそもその解決策がなぜ実行できていないのか、と考え始めると、とても難しい。

テーマを絞るまでが思ったより苦労した。データドリブン経営、という単語が思ったより多義的で、何をもちてデータドリブン経営とするか、という思考の整理になった。



会社の規模によって環境整備の規模や投資できる人員、コスト等が異なるなかで、5つの項目と25の質問に集約することが難しかった。

加えて、各質問については回答者の主観によるブレを最小限にしたいとしつつも、質問を絞りすぎると各社の強み・弱みを抽出する上で有用ではなくなる等、バランスをみながら質問内容を作成するのも大変だった。

上記を考えることで、自社におけるデータ活用の課題が見える化できるキッカケとなったことが成果であった。

一口にデータドリブン経営という表現を使っている、実際のアクションにまで落とし込む方法は三者三様であることが印象的だった。これまで自社がよりデータドリブンになるためにはどんな要素が必要なのかわかりにくかったが、今回のように複数事例や複数人観点を組み合わせれば、具体的目標につなげられそうで大変勉強になった。



APPENDIX

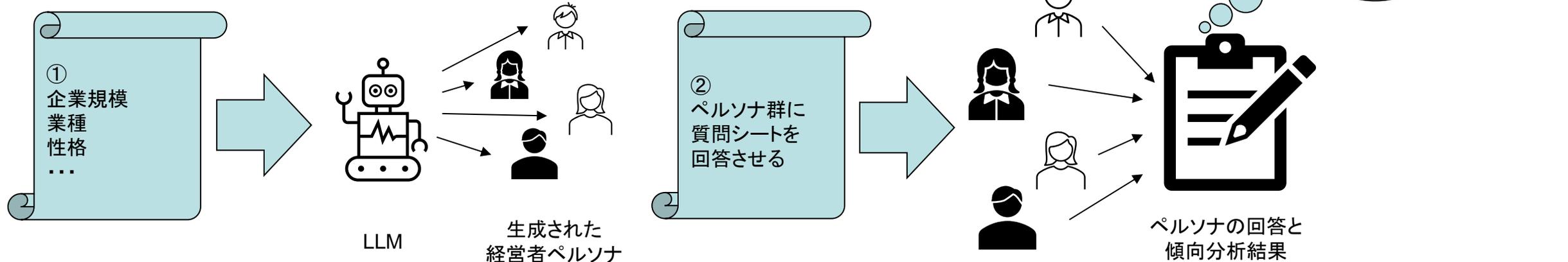
Appendix ペルソナドリブンツール！ (1/6)

今回、実際の経営者に対する質問が1例しかできず、データドリブン経営成熟度測定シートの有効性や改善点が十分洗い出せなかった

そこで、経営者の役を生成AIにやらせ、今回のデータドリブン経営成熟度測定シートを回答させることで、今回のシートの有効性を検証するツールを作成した（青木さん作成）

手順

- ①生成AIに経営者ペルソナ群を設定し作る
- ②ペルソナ群に今回作成したデータドリブン経営成熟度測定シートの回答をさせる
- ③ツールは、回答の主成分分析（PCA）を使い、傾向を分析まで行う
⇒ **分析結果を受けて、測定シートの有効性を検証、質問文の精度改善を行う**



Appendix ペルソナドリブンツール！ (2/6)

データドリブン経営のすゝめ(仮)

業界指定(航空業界など)

全業界

ロール(経営者、エンジニアなど)

経営者

何人のペルソナを生成しますか？

5 5 100

その他要望があれば記載ください

年齢帯

10 50 65 100

社員数

1 32576 50000 50000

回答離脱フラグ

試したいアンケート項目を書いてください

Q1:データに基づいた分析結果が、経営戦略の改善案に反映されたことはありますか？
Q2:過去12か月以内に、データ活用戦略を文書化し、経営会議で正式に承認されましたか？
Q3:データに基づく戦略の効果を最低でも年一回は振り返り評価していますか？
Q4:データ基盤構築、維持更新や、データ分析人材獲得に向けた投資計画は、中長期の経営計

送信

© 2025 A5creation(JUN Aoki). All rights reserved.

☆Point

会社の規模や業界などを指定可能
詳細なオプション設定では、回答者の性格やアンケート項目が長すぎて回答を途中で離脱するなどのリアルなデータを収集可能

↓こういったペルソナが生成⇒回答

No.1:高橋 誠一

業界:自動車製造
役職:代表取締役社長
社員数:42500

エンジニアとしてキャリアをスタートし、海外勤務を経て経営層に。冷静沈着で決断力があるが、時に独断的。イノベーションを重視し、環境技術への投資に積極的。趣味はゴルフと茶道。

No.2:鈴木 美咲

業界:IT・通信
役職:CEO
社員数:31200

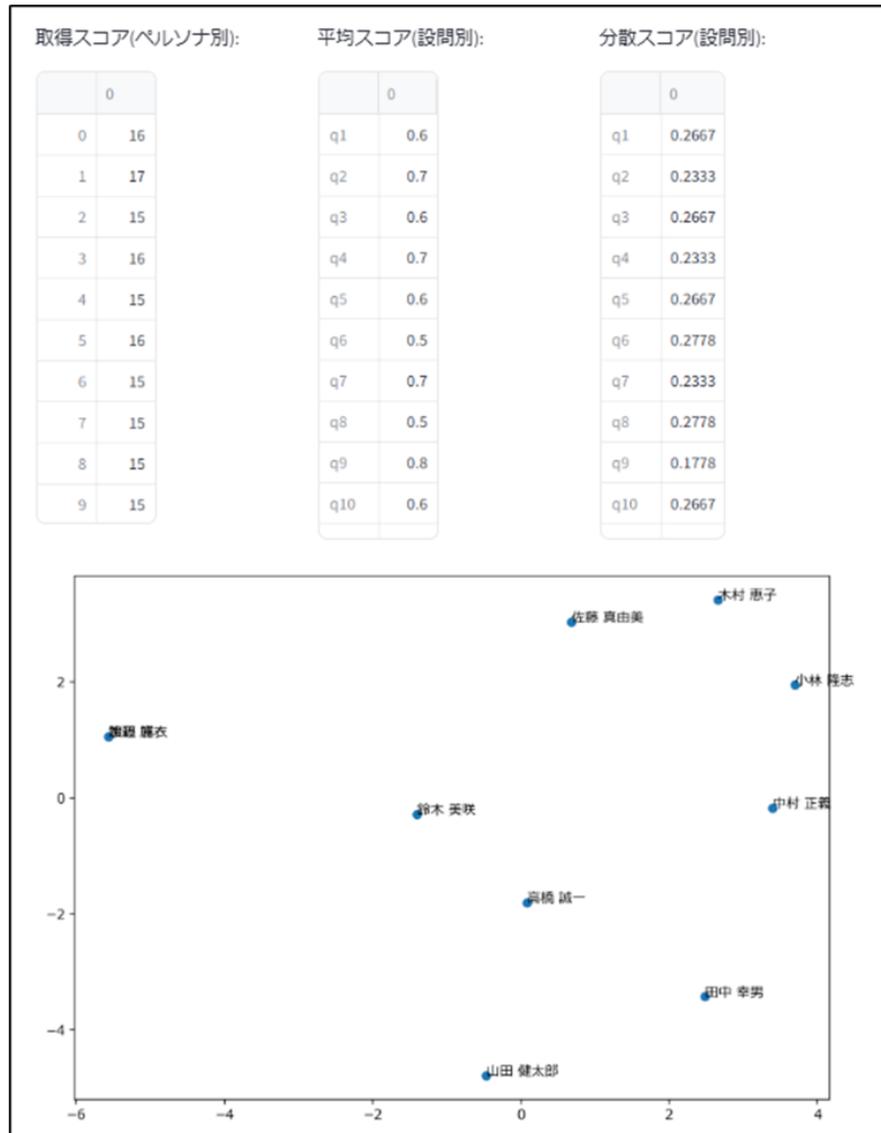
起業家として成功を収め、複数の企業を買収。カリスマ性があり、社員からの信頼も厚いが、完璧主義の傾向がある。新技術の導入に積極的で、常に業界の最前線を走る。プライベートでは瞑想を日課としている。

No.3:山田 健太郎

業界:金融
役職:取締役会長
社員数:38900

銀行員から始まり、リスク管理の専門家として頭角を現す。保守的な性格だが、デジタル化への対応に尽力。人脈が広く、政財界に強い影響力を持つ。趣味は美術品収集と旅行。家族との時間を大切にしている。

Appendix ペルソナドリブンツール！ (3/6)



☆Point

さきほどのペルソナたちが「データドリブン経営のすゝめ」アンケートに自社状況を回答した様子。

難易度が高すぎる質問や、差が生じえない質問を炙り出すことが可能。

また、回答状況をクラスタリングをすることも可能。左図中ではクラスタが分散されすぎていて、設問が適切でない可能性を示唆。

Appendix ペルソナドリブンツール！ (4/6)

回答内容へのインタビュー:

こんにちは。私は木村恵子、47歳のメディア業界CEOです。29,900人の社員を率いる当社では、デジタルトランスフォーメーションを推進し、多様性を重視しています。ジャーナリストとしてのキャリアを経て経営者に転身し、強いリーダーシップと革新的なアイデアで会社を成長させてきました。当社の目玉商品は、AIを活用したパーソナライズドニュース配信サービスです。今後は、グローバル展開とサステナビリティ重視の経営を進めていく方針です。

アンケートスコア[15/25]

q1. データに基づいた分析結果が、経営戦略の改善案に反映されたことはありますか？ Yes : はい、あります。例えば、ユーザーの閲覧データ分析により、コンテンツ戦略を最適化し、広告収入を前年比15%増加させました。

q2. 過去12か月以内に、データ活用戦略を文書化し、経営会議で正式に承認されましたか？ Yes : はい、6か月前に「2025年データドリブン経営計画」を策定し、取締役会で承認されました。

q3. データに基づく戦略の効果を最低でも年一回は振り返り評価していますか？ No : 現在は定期的な評価を行っていません。今後の課題として認識しています。

q4. データ基盤構築、維持更新や、データ分析人材獲得に向けた投資計画は、中長期の経営計画に

☆Point

各ペルソナが自社状態などを教えてくれる。(妥当性検証としても使用可能)

また、こうした特色を知ること
でアンケート上では拾えない会
社のカラーも拾える。

Appendix ペルソナドリブンツール！ (5/6)

プラン1: 基盤強化プラン [データガバナンスの確立]

予算：5,000万円 期間：6ヶ月

1. データ仕様書とAPI整備 [データ共有の効率化]
 - 外部コンサルタントを招聘し、全社的なデータ標準化を実施
 - 予算：2,000万円
2. 全社データリテラシー研修プログラムの導入 [社員のデータスキル向上]
 - オンライン学習プラットフォームの導入と基礎講座の開発
 - 予算：1,500万円
3. データ活用評価システムの構築 [データ戦略の継続的改善]
 - KPI設定と評価プロセスの確立、ダッシュボード開発
 - 予算：1,500万円

このプランにより、データガバナンスの基盤を整備し、全社的なデータ活用能力を向上させることができます。

プラン2: 分析力強化プラン [データドリブン意思決定の促進]

予算：1億5,000万円 期間：12ヶ月

1. 全社統合データプラットフォームの構築 [データ統合と分析の効率化]
 - クラウドベースのデータレイク導入とETLプロセスの確立
 - 予算：8,000万円
2. 高度なBIツールの会社展開 [リアルタイム分析能力の向上]

☆Point

各ペルソナの会社特性・経営者特性に応じた、会社改造プランを提供。

複数プランを提示してくれるので、予算などに則したものの使う。

Appendix ペルソナドリブンツール！（6/6）

☆Point

別モードには「自社ってどんなもんだろう」、「自社をデータドリブン経営にするためにはどのくらいお金かかるか」などの機能も搭載。

自社診断:

Q1:データに基づいた分析結果が、経営戦略の改善案に反映されたことはありますか？

- Yes
 No

Q2:過去12か月以内に、データ活用戦略を文書化し、経営会議で正式に承認されましたか？

- Yes
 No

Q3:データに基づく戦略の効果を最低でも年一回は振り返り評価していますか？

- Yes
 No

Q4:データ基盤構築、維持更新や、データ分析人材獲得に向けた投資計画は、中長期の経営計画において具体的な数値を提示していますか？

- Yes
 No

Q5:自社のデータ活用戦略を評価する際に、計画だけでなく同業他社との比較を行っていますか？

2024年度JUASビジネスデータ研究会 第5分科会 データの価値を理解させる黄金アプローチ

2025年3月12日

ビジネスデータ研究会第5分科会

- **分科会参加者**
- **実施履歴**
- **活動テーマ・選定理由**
- **研究結果**
 - **データ分析の全体像と課題の抽出**
 - **課題事項、分類**
 - **課題の深堀と解決策**
 - **データの価値を理解させるための黄金アプローチ**
- **研究を通しての気づき、課題、所感**

- **分科会参加者**
- **実施履歴**
- **活動テーマ・選定理由**
- **研究結果**
 - データ分析の全体像と課題の抽出
 - 課題事項、分類
 - 課題の深堀と解決策
 - データの価値を理解させるための黄金アプローチ
- **研究を通しての気づき、課題、所感**

メンバー紹介

名前	会社	備考
神崎 慎吾	サントリーシステムテクノロジー株式会社	リーダー
重田 皓平	NECソリューションイノベータ株式会社	サブリーダー
長谷川 智之	株式会社中電シーティーアイ	サブリーダー
赤松 加朱代	SOMPOシステムズ株式会社	
大下 健史	ブレインズコンサルティング株式会社	副部長
加藤 幸二	株式会社テプコシステムズ	
辻 佳介	ジェイアール東海情報システム株式会社	
井波 貴一郎	日本ハム株式会社	
中川 雄貴	株式会社大同ITソリューションズ	
中尾 健人	東海旅客鉄道株式会社	

活動紹介

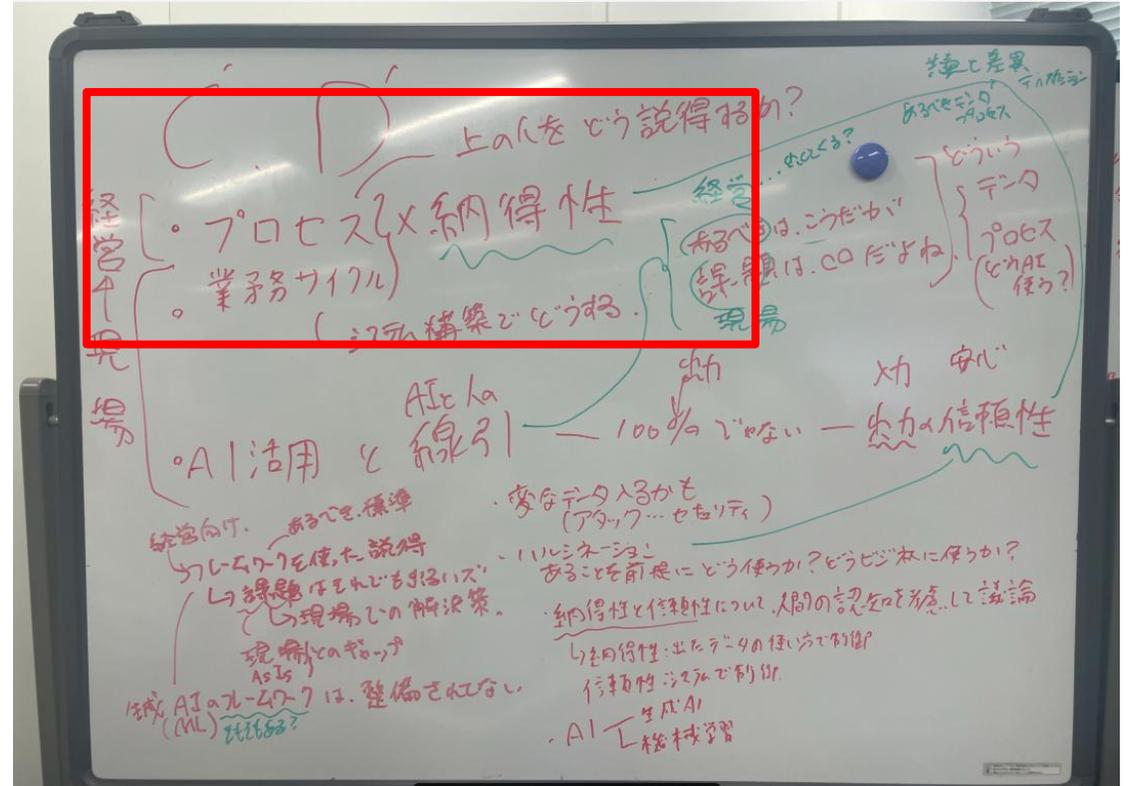
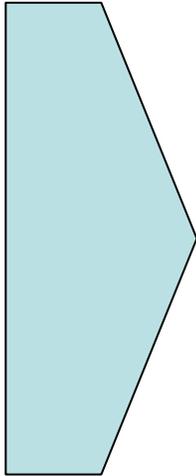
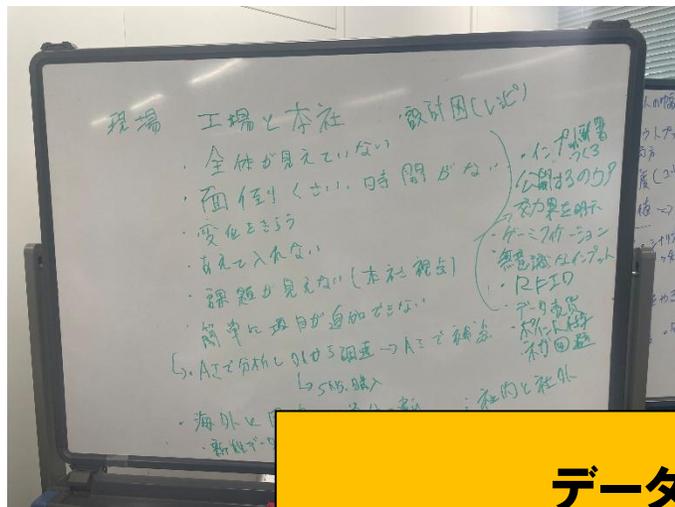
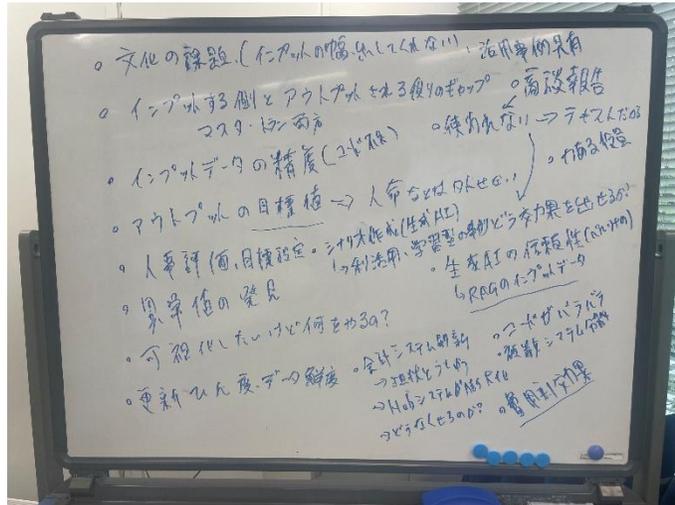
分科会での追加枠

No	日程		研究会	場所※ZOOMと併用	時間	メインテーマ
1	5月29日	水	第1回定例会	JUAS会議室	16:00~18:00	研究会方針・テーマ別ディスカッション・次回の予告
2	6月19日	水	第2回定例会	JUAS会議室	16:00~18:00	研究会全体で議論+講演
3	7月26日	金	第3回定例会	JUAS会議室	10:00~17:00	集中討議日研究会全体で議論(テーマ別分科会形成)
4	8月23日	金	分科会	サントリーシステムテクノロジー	16:00~18:00	分科会で議論
5	9月18日	水	第4回定例会	ZOOM	16:00~18:00	分科会で議論+状況発表
6	10月18日	金	分科会	JR東海、日本ハム	15:30~17:30	分科会で議論
7	10月30日	水	第5回定例会	ZOOM	16:00~18:00	分科会で議論+状況発表
8	11月15日	金	約90%以上の参加率			分科会で議論
9	11月20日	水				分科会で議論+状況発表
10	12月18日	水	第7回定例会	JUAS会議室	16:00~18:00	分科会で議論+講演(検討中)
11	12月20日	金	分科会&忘年会	ジェイアール東海情報システム	16:00~18:00	分科会&忘年会
12	1月24日	水	分科会	サントリーシステムテクノロジー	16:00~18:00	分科会で議論
13	1月29日	水	第8回定例会	JUAS会議室	16:00~18:00	分科会で議論+状況発表
14	2月7日	金	分科会	ZOOM	16:00~18:00	分科会で議論
15	2月12日	水	第9回定例会	ZOOM	16:00~18:00	分科会で議論+状況発表
16	2月19日	水	分科会	SOMPOシステムズ	16:00~18:00	分科会で議論
17	2月28日	金	分科会	中電CTI	16:00~18:00	分科会で議論
18	3月12日	水	第10回定例会	JUAS会議室	16:00~18:00	最終報告会

- 分科会参加者
- 実施履歴
- 活動テーマ・選定理由
- 研究結果
 - データ分析の全体像と課題の抽出
 - 課題事項、分類
 - 課題の深堀と解決策
 - データの価値を理解させるための黄金アプローチ
- 研究を通しての気づき、課題、所感

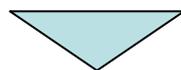
データの価値を理解させるための黄金アプローチ
～現場と経営を説得するためのインプット～

活動テーマの検討



データ活用に対する課題を洗い出しを実施

納得性を持ったアウトプットを出すためには
最適なインプット(データ生成元)、
受け取る側(データ活用側)に
それぞれ課題があるのではないか？

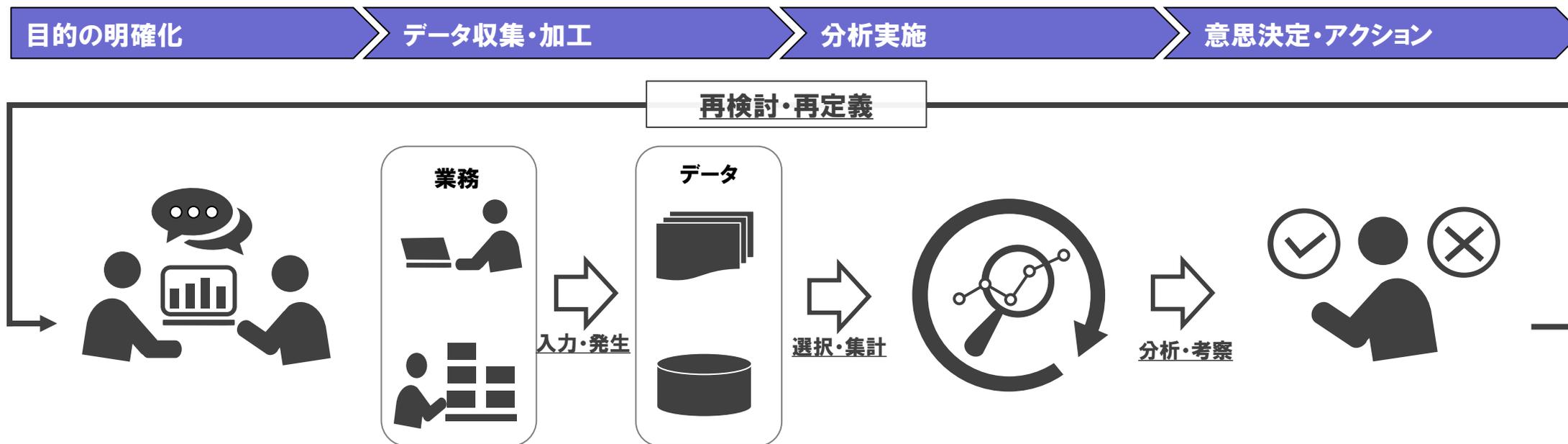


それぞれの課題事項に対して
どのようなアプローチで解決すればよいのかを研究

- **分科会参加者**
- **実施履歴**
- **活動テーマ・選定理由**
- **研究結果**
 - **データ分析の全体像と課題の抽出**
 - **課題事項、分類**
 - **課題の深堀と解決策**
 - **データの価値を理解させるための黄金アプローチ**
- **研究を通しての気づき、課題、所感**

概要図 – 課題マッピング

データ活用フローをチーム内で定義し、各課題の洗い出し・マッピング



- 分析者と意思決定組織側の**認識齟齬**
- **可視化をしたいが目的になる**
- 活用事例などがないと実施不可
- データ整備の**費用対効果**を**定量的に出せず**上を納得できない

- インプットデータの**精度が悪い**
- そもそも**インプットしてくれない**
- 更新頻度が低く、**データ鮮度が悪い**
- **ルールが煩雑すぎるため、守られない**

- **部門間でデータを提供してくれない**
- AIでの**分析結果の信頼性を説明できない**
- **すぐに結果がでると勘違いされる**

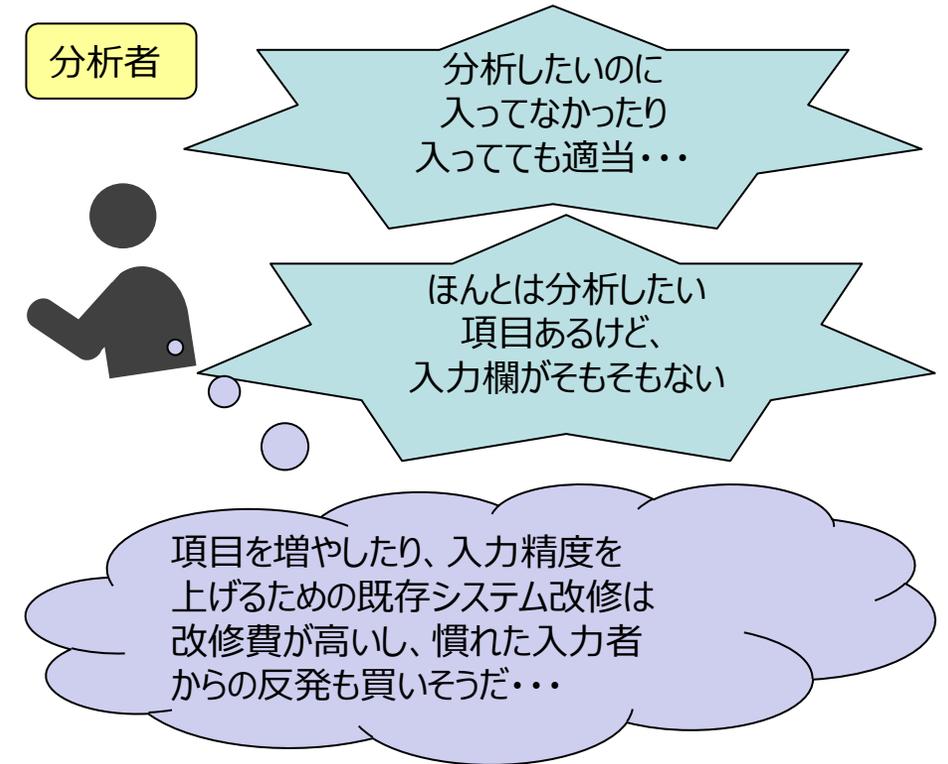
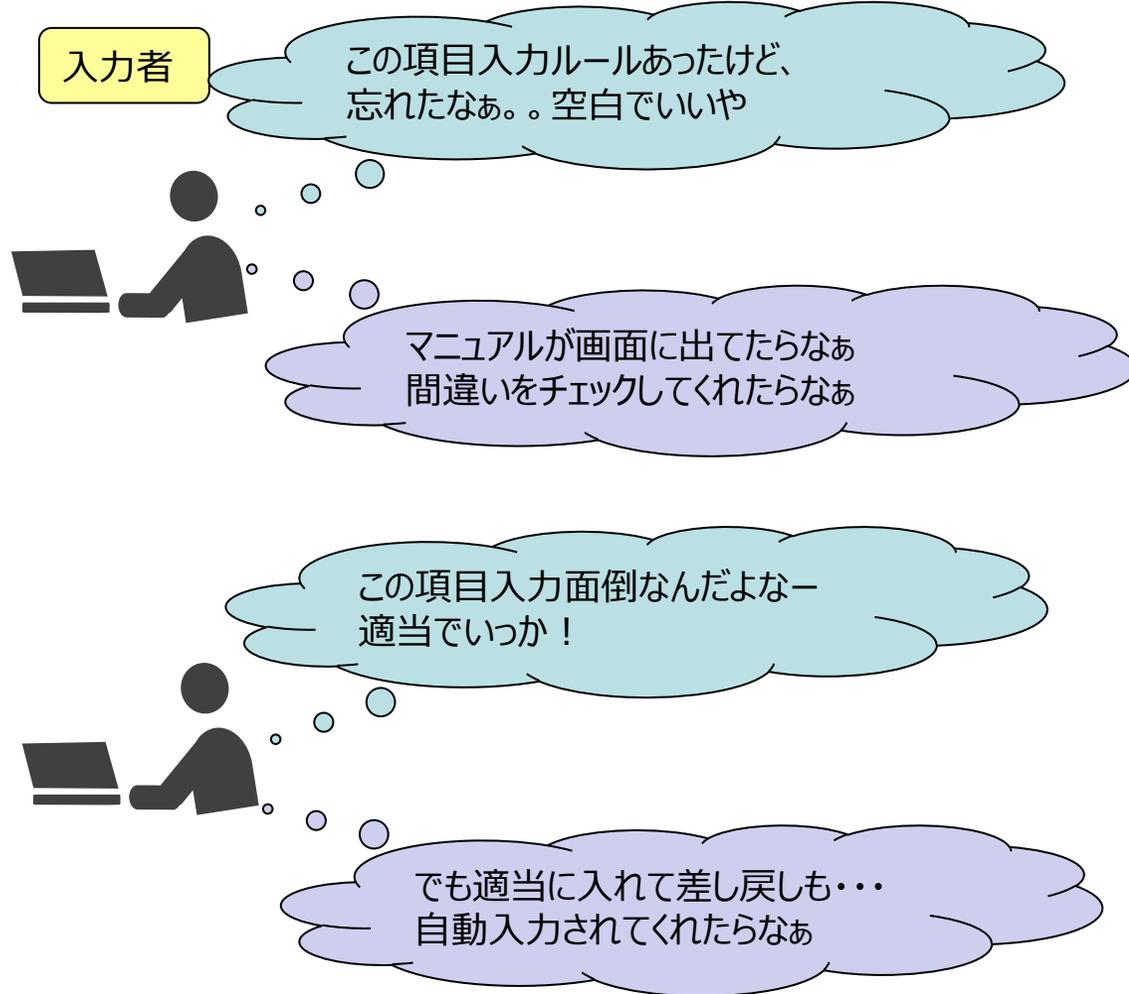
- 分析しても**使われない**
- 分析は**なんでもできると過度な期待**
- **受け身の姿勢**で結果を受け取るだけ

課題とあるべき姿ーデータ生成元

ジャンル	課題	あるべき姿(理想)
データ入力	記入や入力をしてもらえない	<ul style="list-style-type: none">・現場の全員がデータの価値を理解している・データの活用方法が全社で広報されている・インセンティブの仕組みが整っている
データ品質	マスターの項目やキーが不一致	<ul style="list-style-type: none">・全社統一のコード体系が設計されている・新たに導入するシステムはコード体系を統一している
	コードなど手動で入力しているため、手間で間違いが多い マニュアル(ルール)が未整備のため表記揺れデータが発生 改修するにも、お金や期間がかかる	<ul style="list-style-type: none">・値がコード化され、選択式になっている・テンプレート化された入力補助機能がある・データ入力が簡単で直感的に行えるUIが提供されている・入力中にリアルタイムでデータのバリデーションが行われ、エラーが即座にフィードバックされる
データガバナンス	マスタの管理体系が整備されていない (ルールが煩雑で守られていない)	現状のルールが分析され、シンプルで明確なルールになっている UIがシンプルで使いやすいシステムになっている
データ連携	マスターが合っていない	<ul style="list-style-type: none">・統合IDなどで各システムとの連携がシームレスに行われている
データ構造	新旧システムでデータ結合ができない	<ul style="list-style-type: none">・データのクレンジングが容易に行える

課題具体例:「データ品質」

課題：システムへの入力が面倒で①入れてもらえない、②人によってバラバラ。そもそも③分析に必要な項目がない



課題とあるべき姿ーデータ活用側

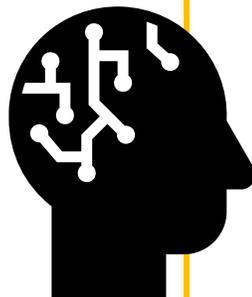
ジャンル	課題	あるべき姿
組織風土	費用対効果に対する疑問	データ活用の 価値と必要性 が理解されている
コミュニケーション	分析者と意思決定組織側の認識齟齬が発生	分析と業務の 結びつけが明確 である
	データの構造が理解されない	利用者自身が必要となるデータを見 つけられる ようになっている
リテラシー	なんでも出来ると過度な期待	分析で出来ることが 明確に理解 されている
	分析はすぐに結果が出来ると勘違い	長期的な視点 で取り組まれている
	受け身の姿勢。結果を受け取るだけ	受け取るだけでなく、 双方向に議論 が行われ活用される
結果の活用	データのセキュリティレベルの壁	データの民主化 ができており、見たいデータにアクセスできる
	次のアクションに繋がっていない	データに基づいた意思決定 が行われている
	ターゲットが不明確	活用の 具体的目標 が明確になっている
	作っても使われない	トレーニング が提供されて活用されている
	分析内容が不明確で信頼を得にくい	分析内容が明確 で信頼できて活用されている

課題具体例:「データ生成元と活用側の認識齟齬」

課題: データ生成元と活用側の認識齟齬が発生

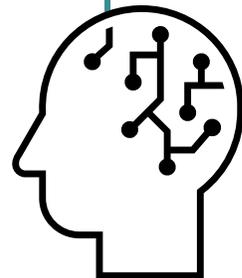
データ生成元

- ・分析できる環境があるのに利用されない
- ・分析手法が意思決定者に伝わらない
- ・データの構造が理解されない
- ・マニュアルを作成しても読まれない



データ活用側

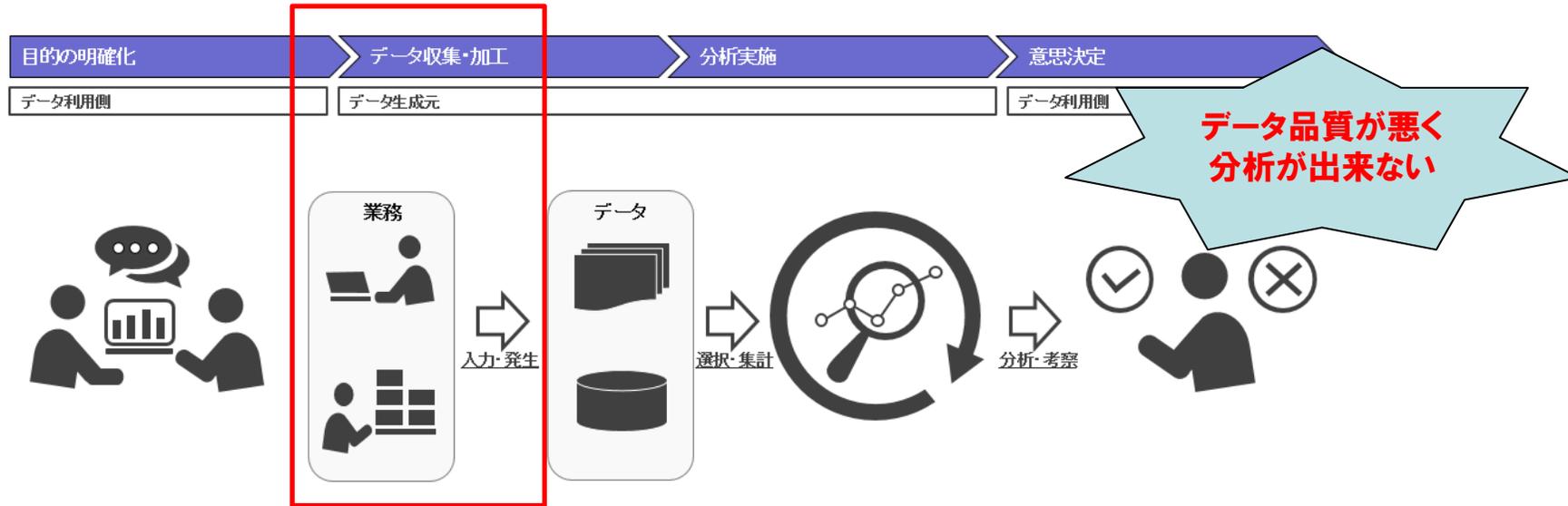
- ・データをどのように活用すればよいかわからない
- ・分析手法がそもそもわからない
- ・データの構造が複雑で分析が出来ない
- ・そもそもマニュアルが難しく何をすればよいかわからない



両者(会社間も含む)がうまく連携出来ずデータ活用がすすまない。。

各社事例(データ生成側)

課題の深堀 - データ生成側



データ生成元で発生しデータ利活用を阻害する課題の対応事例

ジャンル	課題	課題発生場所	対応事例
データ品質	コードなど手動で入力しているため、手間で間違いが多い マニュアルが未整備のため不備データが入力される 改修するにも、お金や期間がかかる	データ生成元	DAPツールを導入することで、パッケージ製品や既存システムを改修することなく以下を実現 <ul style="list-style-type: none"> コード値選択入力の実装 自動入力支援 データチェック実装 マニュアルを表示するヘルプ機能
	名寄せができない 正しい値が集計できない	データ活用側	データ表記ゆれ、欠損データの減少、データ整合性の向上により、正しいデータ分析を実現

各社事例(データ生成側①)

- パッケージ導入後に、データチェックやデータ入力形式の統一対策として、データ入力支援ツール (Digital Adoption Platform) の導入を検討



データ生成元とデータ利用者側の両者がメリットを享受できる黄金アプローチ



適用シーン	適用事例	データ生成元の効果	データ利用者の効果	その他効果
<ul style="list-style-type: none"> ・パッケージシステム ・既存システム 	データ入力支援ツール (DAP) の導入	<ul style="list-style-type: none"> ・自動入力や手入力の最小化により、データ入力の手間を省力化できる ・データチェックの強化により、再申請の減少が期待できる ・入力規則などのマニュアル内容を画面上に表示することで、マニュアル検索の手間を省力化できる ・繰り返しの単調データ入力作業が減少し満足度向上が期待できる 	<ul style="list-style-type: none"> ・欠損データ、不備データ、表記ゆれが減少することでデータ品質が向上し分析精度が向上する 	<ul style="list-style-type: none"> ・導入システムの改修を行わないためシステムへの影響を最小化し、コストを削減できる

各社事例(データ生成側①)

■ DAP(Digital Adoption Platform)ツールでの適用事例

WEBシステム画面上で操作に合わせてナビゲーションを表示する
デジタル・アダプション・プラットフォーム(DAP)です。

テックタッチ導入前



テックタッチ導入後



- ブラウザ拡張をインストールもしくはスニペット埋め込みで実装可能。改修不要で、低コスト/短期間で導入可能
- マニュアルと違い、操作・入力時にリアルタイムに操作ガイドを表示
- コンテンツはプログラミング不要で誰でも簡単に作成可能

課題解決のための対策



- 手入力から選択入力
- 自動入力支援
- マニュアル表示
- システム改修不要



【対策による効果】
• 入力作業の省力化
• データ品質の向上

ヘルプ 業務ルールを表示し 入力データ精度向上 	ガイド 操作案内でミスをなくす 	ポータル システム操作に迷う時間を削減 	アクションボタン システムになじみやすい デザインでUI改善
自動処理 画面クリックや定型文入力処理 などの業務効率化 	システム間連携 システム間の動線を繋ぎ 業務効率化を実現 	分析 システム活用を可視化し 更なる有効活用へ 	自動修正 AI活用で運用負担を最小化

システム導入の本来の価値を引き出し、現場の更なる付加価値業務へのシフトを実現

営業システム

- 顧客情報の正しい収集
- 売上/顧客満足度向上

基幹システム

- 業務プロセス標準化の加速
- 入力データのガバナンス向上

人事システム

- 人事戦略の浸透と
キャリア形成の質向上

ユーザー

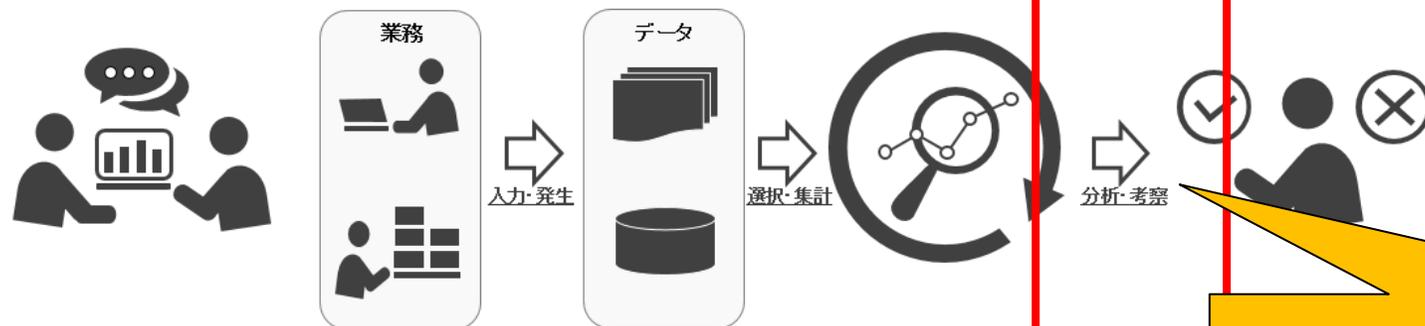
- 複雑な入力作業 約50%減少※
- 新規導入システムの定着期間短縮
- 業務状況に合わせた適切なデータ入力

システム提供者

- 差し戻し 約80%減少※
- 問い合わせ件数 約40%減少※
- マニュアル作成/トレーニングコストの大幅削減

各社事例(データ活用側)

課題の深堀 – データ活用側



データ活用に対するリテラシーがない
データの構造が理解されない

データ利用を阻害する課題の対応事例

ジャンル	課題	対応事例
リテラシー	なんでも出来ると過度な期待	データ活用コミュニティ(Teams)、データ活用ポータルでデータ活用の組織風土を醸成
	分析はすぐに結果が出来ると勘違い	
	受け身の姿勢。結果を受け取るだけ	
コミュニケーション	データの構造が理解されない	業務データ活用のための環境を基幹システム再構築時に整備
結果の活用	データのセキュリティレベルの壁	

各社事例(データ活用側①)

風土醸成するために運営中

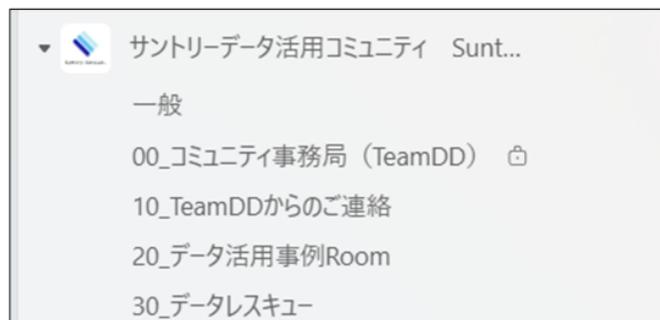
データ活用コミュニティ

[リンク](#)

悩みや気になることを気軽に解決できる

※相互共助の関係性構築

- ✓ 情報共有
- ✓ データレスキュー



データ活用ポータル

[リンク](#)

データ活用に必要な情報を受け取ることができる

※アクセスすればほしい情報が揃っている

- ✓ データ活用の考え方
- ✓ 分析手法
- ✓ 利用申請
- ✓ 事例・ナレッジ共有

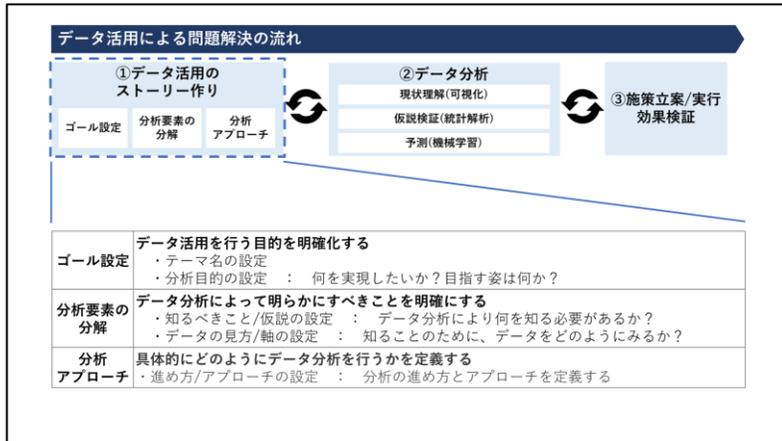


事例①

データ活用コミュニティ(Teams)、データ活用ポータル
でデータ活用の組織風土を醸成

各社事例(データ活用側①)

データ活用チームの活動



サントリー内のデータ活用事例をご紹介します!

事例共有会イベント

イベント名	開催日	領域	内容
Tableau活用共有会①	20230928	社内事例：営業領域	Tableauを使った現場開発事例を共有いただきました。 ● 発表部署 SBS才人職部 SBS職企部 SUN廣広域営業部 SFS九企部 SUN東海広域支社
Tableau活用共有会②	20240411	社内事例：企画・動態管理	Tableauを使った現場開発事例を共有いただきました。 ● 発表部署 SBF食料職企本部 SCB経営企画部 SPD人材部

データレスキュー実施

気楽に気軽に
データレスキュー
 対面・個チャ・電話OK
 TeamDDがお助け

毎週水曜日
 SWH6階
 9:00-17:30

データレスキューお申し込みはこちら! : Tableauでの前年同月比出し方

前年	前月	前週	前日	前週前日	前週前日
112	112	112	112	112	112

【データ活用の流れ説明】
 データ活用による**問題解決の流れ**を説明したページを準備

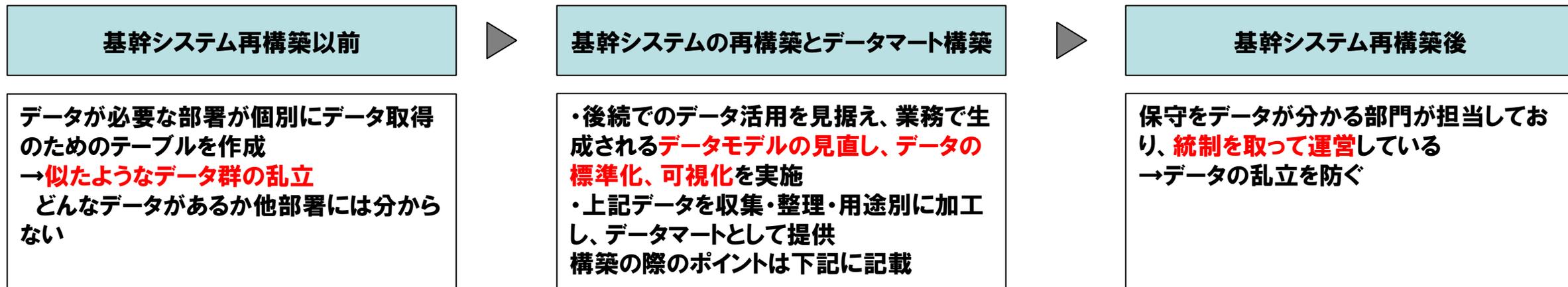
【データ活用事例共有】
 社内における**データ活用事例**を共有する会を実施

【データレスキュー活動】
 データ活用チームが**現場に赴き**データ活用を支援

以上の活動を通してデータを使う側のリテラシーを向上

各社事例(データ活用側②)

■ 業務データ活用のための環境を基幹システム再構築時に整備



#	ポイント	解決した事象	詳細
1	セキュリティ面の考慮	データのセキュリティレベルの壁	基本的に 個人情報参照は不可 としている 個人情報を参照する必要がある業務・分析の場合のみ、 個人情報参照可能ID を発行
2	データカタログサイトの提供	データの構造が理解されない	テーブル一覧、項目定義情報をドキュメント化、 一元管理しデータカタログサイト として提供 利用者自身が必要となるデータを見つけられるようになっている ◆コンテンツ例 ・データモデル、テーブル一覧、各テーブルの概要、主キー情報、データの更新頻度、項目定義、項目説明、個人情報の有無、サンプルデータ ◆ 最新情報を保つ工夫 基幹システム開発時に作成 、修正される設計書の内容を活用し、 項目定義を最新状態に保つ工夫 をしている

各社事例(データ活用側②)

データカタログサイトイメージ

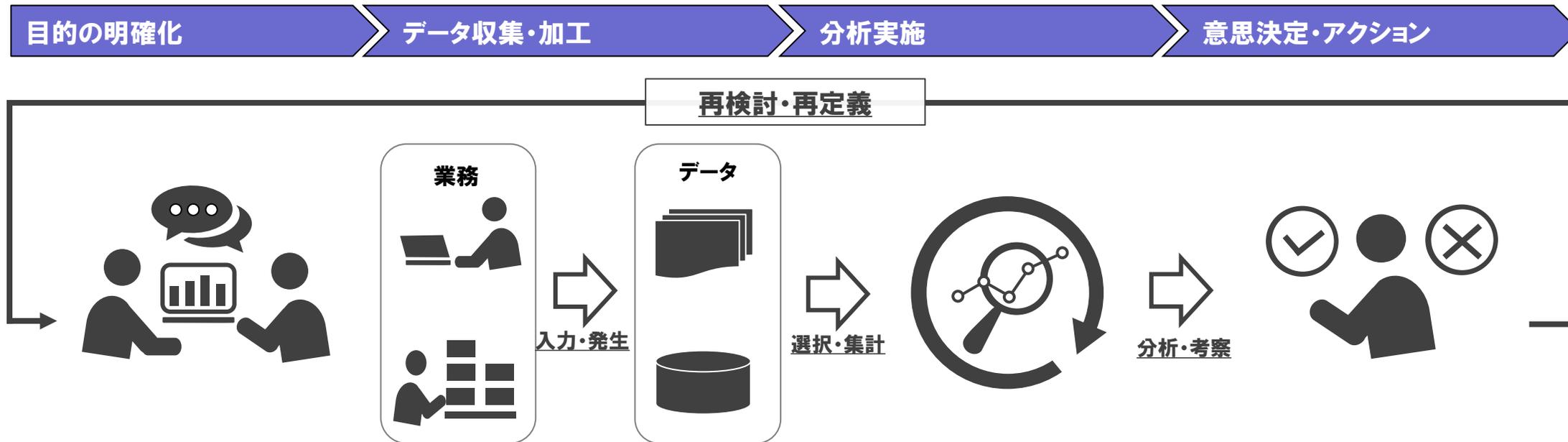
The screenshot shows a data catalog interface with the following sections and callouts:

- 更新サイクルの記載**: A callout box pointing to the '更新サイクル' section, which includes a note: '更新サイクル(※DM利用可能となるのは、以下に記載した日の翌朝になります)'. Below this is a '日次' section.
- 個人情報有無の記載**: A callout box pointing to the '個人情報有無' section, which includes a 'あり' (Yes) option.
- 項目一覧にキー項目、個人情報判別マーク**: A callout box pointing to the '項目一覧' table, which has columns for 'No', '項目名', and '説明'. The first row has a key icon (🔑) next to the item name, and the last two rows have a lock icon (🔒).

No	項目名	説明
1	🔑	
2	🔑	
3	🔑	
4	🔒	
5	🔒	

概要図 - 検討結果マッピング

チーム内で定義したデータ利活用フローに検討結果のマッピング



- 分析と業務の結び付けを明確に
- 分析者、意思決定者の
双方向での歩み寄りが必要

- ◎ 深 • DAPツールで既存製品そのままに
データ品質向上に繋げる
- 入力へのインセンティブ制度を策定
- UIをシンプルにしたシステムの作成

- ◎ 深 • 基幹システムを再構築後、
保守部門が統制を取って運営
- データの民主化ができており、
利用したいデータにアクセスできる

- ◎ 深 • データ活用の組織風土を醸成し、
データ利用側のリテラシー向上
- データに基づいた意思決定の実施
- データを受け取るだけでなく、
分析者との双方向の議論に発展し
活用される

- **分科会参加者**
- **実施履歴**
- **活動テーマ・選定理由**
- **研究結果**
 - データ分析の全体像と課題の抽出
 - 課題事項、分類
 - 課題の深堀と解決策
 - データの価値を理解させるための黄金アプローチ
- **研究を通しての気づき、課題、所感**

データの価値を理解させるための黄金アプローチ

さて、**黄金アプローチ**とは、、、

そんなものはない！

データの価値を理解させるための黄金アプローチ

一朝一夕で成し遂げられるものではなく
データに携わるすべての人（生成、収集加工、分析、活用）が
お互いの立場、データの価値を理解し、
一步一步共に成長する事

- **分科会参加者**
- **実施履歴**
- **活動テーマ・選定理由**
- **研究結果**
 - データ分析の全体像と課題の抽出
 - 課題事項、分類
 - 課題の深堀と解決策
 - データの価値を理解させるための黄金アプローチ
- **研究を通しての気づき、課題、所感**

研究を通しての気付き、課題、所感

・参加メンバーは各社それぞれの課題を持っており、本研究会で課題や事例などを議論したことに価値を感じた。

データに関する意見交換、深掘りをすることができ大変勉強になりました。様々な業種の事例を知ることができました。ビジネスモデルや業務プロセスによっても起きる問題の内容が様々でしたが、共通点もそれなりにあるなと感じました。解決策についても今後の業務を進めるうえでの大きなヒントを得られました。ありがとうございました。

データ活用をされている他社の方々と交流できる貴重な機会でした。データ活用の知識、先進的な取り組み、議論の進め方など参考になることが多かったです。生成AIが浸透してもこのような人の交流は残り続けて欲しいと思いました。ありがとうございました。

研究会参加の目的である他社様の活用事例の収集は、メンバーの皆さんと意見交換する中でとても参考になることが多く自社のデータ活用推進に大いに役立てることが出来ると思いました。各社のそれぞれの課題を持ち寄って議論できたことは大変有意義なことでした。ありがとうございました。

他社のデータ活用事例を知ることができ、大変貴重な機会となりました。データ整備を進めて活用できる状態にしても、実際に普及させることの難しさを痛感しました。多くの企業が同様の課題を抱えていることを実感する一方で、各社がユーザーとのコミュニケーションを工夫している点が特に勉強になりました。今後のデータ活用において取り入れられることは積極的に取り入れていきたいと思えます。

かなり時代に取り残されているな・・という危機感を持ちました。各社それぞれで分析に関する進み具合の違いはあれど、悩みや課題は（現場の反発や改修費、リテラシー・・）共通するものが多く、解決策やアプローチを考えるのは非常に勉強になりました。

データのインプット、活用の課題点と考えている事が、どの会社でも課題と感じており、各社で進められている施策を共有できた。この施策を自社に持ち帰り自社のデータ活用に取り込んでいきたい。

研究会を通じて、他社のデータ活用事例や課題を知ることができ、大変貴重な学びの機会となりました。様々な業種の事例を通じて、ビジネスモデルや業務プロセスによる問題の違いと共通点を理解し、解決策のヒントを得ることができました。また、データ活用の知識や先進的な取り組み、議論の進め方など、多くの参考になる点がありました。各社が抱える共通の課題に対するアプローチを考えることで、自社のデータ活用推進に役立てたいと思えます。このような場を与えて頂いたJUASの方々、関係者の皆様に感謝いたします。

データ活用されている他社の方々の話を聞くことができ、会社毎の社風・文化によって様々な課題があること知ることができた。また、各社の話を聞く中で、抽象度を上げると同じような課題もあったため、今後の業務を進める上での大きなヒントに気づくことができた。ありがとうございました。

インプット側（現場）とアウトプット側（意思決定層）に分けて、他社事例を実際に聴くことで、どこでも似たような課題があるという再確認ができたことも大きいですが、結局は、地道な対応・改善の積み重ね、協力関係をいかに築くかの重要さに改めて気づかされ、非常に有意義でした。

以上

次年度ビジネスデータ研究会について

【当年度総括】

当年度の研究では、5つの分科会が研究したテーマが、それぞれ関連していたと思います。
組織・人材の育成等を行いつつ理想のデータ基盤を用意し、データ活用の価値を理解していただきつつ品質を担保する取り組みを進めていく。また一方で、データを活用したデータドリブン経営の浸透具合を測ることができる。研究した内容が相互に作用し、ビジネスにデータを活用する一助になるものができたと思います。

【次年度の研究会】

- 現代のビジネスにおいて、迅速な意思決定と柔軟な対応が求められています。このような背景の中、企業および IT部門は「正確性・統制」を重視するSoRと、「変化対応力・試行」を重視するSoEとの両立に向き合う必要があります。
- 次年度は、各社が課題や取り組みを持ち寄り、これらの“信頼性”と“俊敏性”のバランスをいかに実現できるか多角的に検討し、共通的な「現実的で継続的改善が可能なデータ活用」を目指します。

【実施期間】

2025年5月～2026年3月

【主な活動予定】

- 全体研究会10回（内、講演会2回、集中討議1回の開催を計画中）
- その他分科会での活動

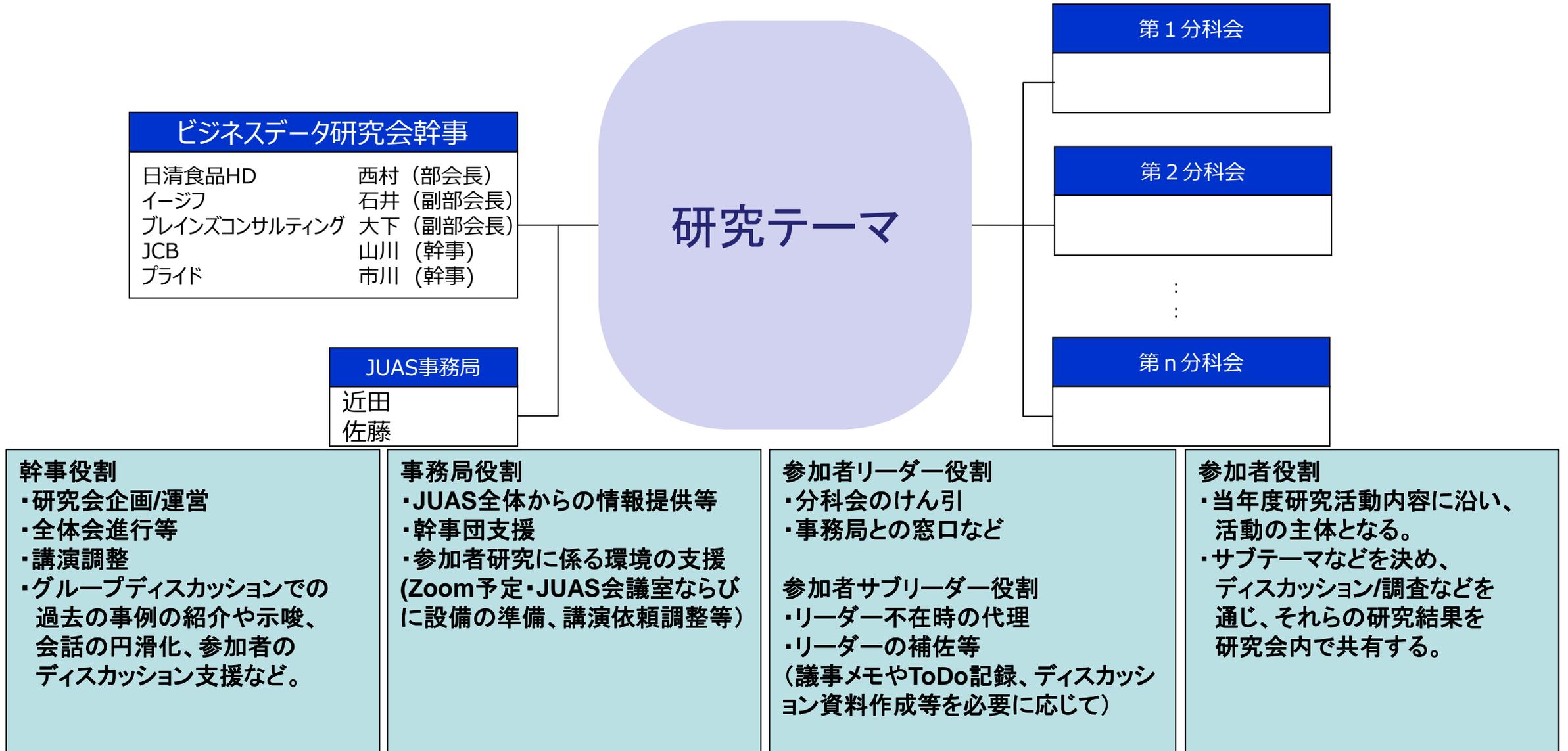
本研究会ご参加者の皆様、
本研究会に対してお講演いただいた皆様、
ありがとうございました。

ご視聴、ありがとうございました。

2024年度ビジネスデータ研究会活動

日程		研究会	場所	時間	メインテーマ
5月29日	水	第1回定例会	JUAS会議室	16:00~18:00	研究会方針・テーマ別ディスカッション・次回の予告
6月19日	水	第2回定例会	JUAS会議室	16:00~18:00	研究会全体で議論+講演
7月26日	金	第3回定例会	JUAS会議室	10:00~18:00	集中討議日 研究会全体で議論(テーマ別分科会形成)
9月18日	水	第4回定例会	ZOOM	16:00~18:00	分科会で議論+状況発表
10月30日	水	第5回定例会	ZOOM	16:00~18:00	分科会で議論+状況発表
11月20日	水	第6回定例会	ZOOM	16:00~18:00	分科会で議論+状況発表
12月18日	水	第7回定例会	JUAS会議室	16:00~18:00	講演+分科会で議論
1月29日	水	第8回定例会	ZOOM	16:00~18:00	分科会で議論+状況発表
2月12日	水	第9回定例会	ZOOM	16:00~18:00	分科会で議論+状況発表
3月12日	水	第10回定例会	JUAS会議室	16:00~18:00	最終報告会

研究会体制と役割 (敬称略)



ビジネスにおけるデータ利活用の重要性と可能性を追究し、
データに携わる多くの方々に提案することによって、
事業活動の未来に希望を持つことができる
研究会を目指します。

・我が社もデジタル化を！
・ビックデータを活用して会社
に貢献してよ！



・何をすればよいの？
・他社はどの様に実践してる？
・データ利活用できているとは
??



答えがあるのかないのか、
テーマを深堀する過程を
楽しもう！



ビジネスデータ研究会活動方針

1. せっかく異なる業種・業界のメンバーが集まるのだから・・・

お互いに新たな知見と気づきを生み出しましょう

・ご参加者の皆さまの相互貢献によって成果が出来上がります。まずは積極的なご発言をお願いします。

2. ビジネスデータという問題意識を持って集まるのだから・・・

それぞれの“成果”を形にしましょう

- ・テーマに対して、データを事業価値につなげる方法や考え方を調査・議論・整理し、役に立つ「形」にしましょう。
 - ・そのために過去の研究成果を参考に、その延長線上でのテーマ、または新たなテーマをもって研究しましょう。
- ※ドキュメントを作ることが目的にならないように注意しましょう。

3. ものすごく忙しい皆さんに集まっていたくのだから・・・

活動が効率的になるように、可能な限り便利なツールを使いましょう

・共有ボード、投稿チャット等々、どんどん利用します。皆様も、参加者同士で利用可能な便利ツールは活用してください。

研究会方針（活動のこれまで）

ビジネスシーンにおけるデータの利活用について幅広く研究を実施。

